

# 伯耆の古代を考える会雑誌



2017年 創刊号

発行 伯耆の古代を考える会

伯耆の古代を考える会雑誌 創刊号 (2017 Vol-1) ■もくじ

- P1 はじめに——伯耆の古代を考える会発足のころ 八尾 正己
- P4 アタ系海人についてのメモ 坂田友宏 (2017年1月28日発表)
- P16 安曇族を追って 香田 勇 (2015年2月21日発表)
- P29 「孝霊山」考 三原 彰 (2015年3月21日発表)
- P38 初めての考古学  
——伯耆の古代を考える会に参加して——覚書 (1)  
前川仁三夫 (2015年4月25日発表)
- P48 西伯耆の廻国塔 中村栄嗣郎 (2015年5月23日発表)
- P66 妻木晩田遺跡  
——洞ノ原地区の西側丘陵と環濠について——  
内田正英 (2015年7月18日発表)
- P76 古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察  
Consideration about the weather and the geography of ancient  
in west Houki from literatures.  
八尾正己 (2015年8月29日発表)
- P108 因幡国法美郡服部郷について  
——海部と服部の痕跡をたどる  
黒田 一正 (2015年9月26日発表)

## はじめに——伯耆の古代を考える会発足のころ

会の前身が発足したのは、平成 23 年 5 月、長野県の龍鳳書房酒井春人社長より、同年、長野県で開催される「安曇族研究会」への参加お誘いを受けたことによります。当時、私が作っていた古代史のホームページに、酒井さんが目を留められ、電話をしてこられたのです。

早速、民俗学の第一人者でもあり、古代史にも見識のある米子高専名誉教授の坂田友宏氏、『東アジアの古代文化』（大和書房）という準専門誌の編集に携わっていた黒田一正氏に相談を持ち掛けました。

ただ、当初は良い返事を頂けませんでした。しかし、かねてから伯耆国の古代史は非常にミステリアスで奥深いものだと信じていた私は、酒井氏からのお誘いは、県外の多くの人たちに、伯耆の古代史を知って頂くまたとない好機であると考えました。そこで、坂田氏、黒田氏の気持ちを酒井氏にお伝えすると、まずは自分が米子に赴き直にお二方と話をすると行って下さったのです。

7 月、酒井氏が長野から遠路を車でお越しになり、坂田氏、黒田氏を交えて海人族や古代史の話で盛り上がりました。おそらく酒井氏のひた向きの情熱が両氏の心に火を付けたのだと思います。その後、坂田氏、黒田氏、私の 3 人で勉強会を始め、9 月 24 日長野県安曇野市での研究会に参加しました。

これが、あわただしく立ち上げた「米子の古代を考える会」の誕生経緯です。

さらに翌平成 24 年 10 月には、九州福岡の志賀島歴史研究会の岡本顕実理事長より「金印シンポジウム」へのお誘いを頂きました。その際には米子市教育委員会で伯耆周辺の歴史と文化の掘り起こしに活躍されている杉谷愛象氏の参加も得て、4 人で九州に赴きました。

この時、福岡市役所内で行われた事務局会議で、酒井氏、岡本氏からい

つかは伯耆で研究会を開催して欲しいという要望を頂戴しました。

当時は4人で始めた古代史の勉強会、とても米子で主催することは無理であろうと思っていました。主催の可否は別にして、伯耆国の古代史をもっと学問的に追求してみたいと考える賛同者も増え、坂田氏を会長として、「米子」を「伯耆」に改め、「伯耆の古代を考える会」が発足しました。

こうした経緯を経て、平成26年11月29日、「海人フォーラム in 米子」と銘打って、「海の民の足跡をたどる——古代日本海の文化交流」を米子コンベンションで開催しました。当日は、長野や九州、そして地元の人々、約300人が参加してくださいました。また多くの賛同者のご寄付をいただき、立派なレジメも刊行することができました。

このフォーラムを経て、会員も9人に増えました。平成27年からは、この新メンバーで、まずは足元の西伯耆の歴史を勉強しなそうと、毎月1回、研究発表を行ってきました。本誌に掲載した論考は、毎月発表されたものです。まだまだ未熟ですが、一步一步、着実に伯耆の歴史の掘り起こしを行っていきたいと思っています。

平成28年秋

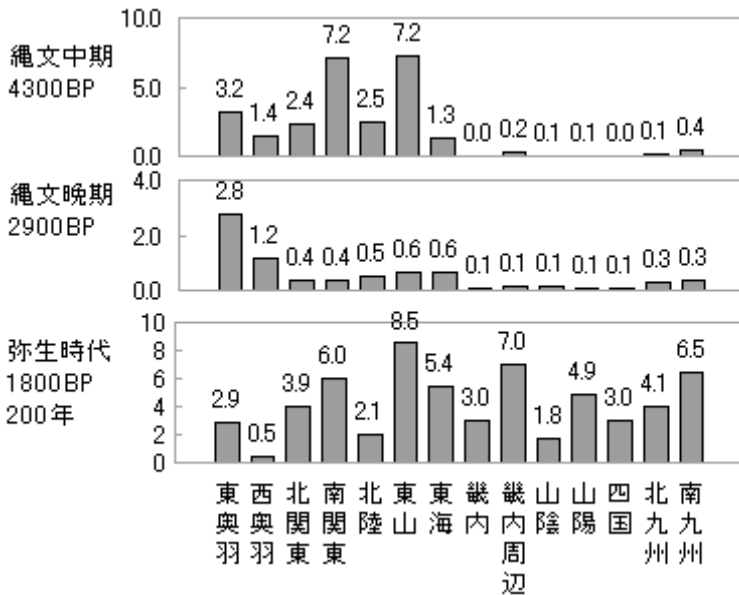
会員 八尾 正己

坂田 友宏

## 1 海洋民の移住

弥生時代の水田稲作の普及に伴って、次の表に示したように、西日本における人口の急増が注目される。

縄文～弥生時代地域別人口推移（単位千人）



(鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』を基に作成した表を引用)

こうした人口増をもたらした要因の一つとして、海外要因（大陸の春秋・戦国時代戦乱による避難民の流入）が挙げられよう。

- 前 473 年 呉（現江蘇省・蘇州一帯）が越によって滅ぼされる
- 前 334 年 越が楚に滅ぼされる
- 前 206 年 秦が前漢によって滅ぼされる 徐福来日
- 前 111 年 南越（広東州中心）が前漢の武帝によって滅ぼされる。旧閩越などの民は悉く蛮族として海辺に追い詰められ、ボートピープルとなって四散した。

などが主な出来事であるが、こうした情勢を踏まえて、谷川健一氏は次のような見解を述べている。

BC 2 世紀ごろ漢の武帝に滅ぼされた越の民が、漁業的性格の強い中国江南地方から水田稲作・金属・鵜飼などの技術を持って九州にたどり着いた。その中で対馬海流に乗って北九州に向かったのがアズミであり、黒潮本流に乗って南九州に着いたのがハヤトであった（谷川健一『古代海人の世界』）。

阿曇、宗像、住吉、阿多（隼人）などと呼ばれる海洋民のルーツは、こうした移住者あり、各地の開発に当たった。この中で、北九州を拠点とした阿曇、宗像をアズミ系海人、南九州を拠点とする海人をアタ系海人と呼んでおく。

アズミ系海人の出自については記・紀神話に述べられているが、古くは『肥前の国風土記』に安曇連百足の名がみえ、『日本書紀』に「磯良(しか)の海人、名は草を遣して視しむ」（巻九・仲哀天皇摂政前紀 9 年 9 月）と記されているのも阿曇族と思われる。『太平記』は阿曇の祖神とされる阿度部(あどべ) (阿曇) の磯良について以下のように記している。

神功皇后は三韓出兵の際に諸神を招いたが、海底に住む阿度部の磯良だけは、顔にアワビやカキがついていて醜いのでそれを恥じて現れなかった。そこで住吉神は海中に舞台を構えて磯良が好む舞を奏して誘い出すと、それに応じて磯良が現れたという。

\* 其貌ヲ御覧ズルニ、細螺(シタタミ)・石花貝(カキ)・藻ニ棲ム蟲、手

足五体ニ取付テ、更ニ人ノ形  
ニテハ無リケリ。一（中略）我滄海ノ鱗ニ交リテ、是ヲ利セン為ニ、  
久ク海底ニ住侍  
リヌル間、此貌ニ成テ候也。

（『太平記』卷 39、神功皇后攻新羅給事）

（系図）綿積豊玉彦命→宇都志日金折命（穗高見命）→豊玉姫、玉依姫

## 2 熊襲・隼人・阿多

『古事記』の国生み神話の中で、九州の誕生について、「次に筑紫島を生みき。此の島も亦、身一つにして面四つ有り。面毎に名有り」と述べ、筑紫国、豊国、肥国、熊曾国を挙げている。これによって、「筑紫」には九州全体を意味する場合と、後の筑前・筑後を指す場合の広狭二義があること、また、日向・薩摩・大隅に相当する地域を熊曾国と認識する場合があったことがわかる。

南九州に関する王権側の情報不足もあったと思われるが、反抗勢力であった熊襲・隼人・阿多についても、それが種族の呼称（自称か他称かも問題になる）なのかある地域の地名なのかが、必ずしも判然としていない。三者が区別して認識されている場合と、三者とも南九州全体を指しているようなケースも想定しておく必要がある。

**熊襲** 大和王権に服属しない化外の民とされ、『日本書紀』（景行天皇 12 年）に「朕聞く、襲国に厚(あつ)鹿(か)文(や)、迕鹿文(さかや)といふ者有り。是の兩人は熊襲の渠帥者(いさを)なり」とみえる。カヤはインドネシア系言語では資産とか呪力、貴人を指す語といわれる（大林太良「民族学から見た隼人」大林太良編『隼人』社会思想社、昭和 50 年 1 月）。厚や迕は地名ではないかという。

**隼人** 天武天皇 11 年（682）7 月、隼人朝貢・大隅隼人と阿多隼人の相撲

の記事が初見。

702年薩摩・多櫛、713年大隅、720年大隅・薩摩・日向で隼人の乱が起こる。

**阿多隼人** 『和名抄』に「薩摩国阿多郡阿太郷」、『古事記』の天孫降臨神話に「火照命<隼人阿多君の祖>」（紀・火蘭降命<隼人等が始祖>）とみえる。『新撰姓氏録』「阿多隼人 富之須佐利之命之後也」。薩摩半島一帯に居住していた隼人族。薩摩国設置後は、薩摩隼人の呼称が用いられる（『続日本紀』和銅2年709年）。

**大隅隼人** 『新撰姓氏録』「大角隼人 出自火蘭降命也」。後世の大隅郡（大隅半島北部）に居住した部族。主領域を肝属平野とする説もある。

**多櫛隼人** 種子島と屋久島（多禰島）に居住した部族。大宝2年（702年）には征討軍を派遣して鎮圧。

**甌隼人** 甌島に居住した部族。『続日本紀』神護景雲3年（769年）の条に記事。

**日向隼人** 日向国に居住した部族。『続日本紀』和銅3年（710年）に部族の首長である曾君細麻呂が服属し外従五位下に叙されたとの記事がある。ただし、これは、713年大隅国分離前の記事。『宇佐神宮史』養老3年（719年）の条には「大隅日向隼人襲来打傾日本國」の記事が見られる。

**隼人の墓** 考古学的にみると、鹿児島県・宮崎県境周辺に地下式横穴墓が分布し、これを隼人と関係づける説もある。考古学上、隼人の墓制は三種類あり、薩摩半島南部の「立石土壙墓」（阿多隼人の墓か）と「地下式板石積石室」（薩摩半島より北域）、そして広域に分布する「地下式横穴墓」となる。



なお、『肥前国風土記』には、「此の嶋（値嘉島）の白水郎は、容貌、隼人に似て、恒に騎射を好み、其の言語は俗人に異なり」とみえ、隼人が周囲から異族とみなされていたことを物語っている。また南九州から薩南諸島にかけては、以前には、次に示すような古モンゴロイドを髣髴とさせるような毛深い人が多かったという。



地下式墓の分布

(「かごしま考古ガイド」より引用)

**古モンゴロイド** モンゴロイドのうちの南方複合系。その分布は中国南部から、インドシナ半島、チベット、ミャンマー、インドネシア、日本（ア

イヌ、南九州など)に及ぶ。新モンゴロイドと比較すると、低めの身長、彫の深い顔、二重瞼、毛深い、湿った耳垢、波状の頭髮などの身体的特徴を持つ。

### 3 火照命、火明命、火蘭降命

高千穂の峯に降臨した瓊々杵(ににぎ)尊は、海神の娘である吾(あ)田(た)鹿(か)葦(し)津(つ)姫(別名・木花開耶(このはなさくや)姫)と結婚し男子が誕生する。誕生した男子を3人とする文献が多いが、それについては後述するように、異名が書かれているケースが多く、それを集約すれば兄・弟2人にまとめることができる。2人の兄弟の演じる海幸・山幸神話は、漁民社会の末子相続の慣行を背景にした典型的な兄弟話であり、兄の試練に耐えた弟が王権の継承者になるという筋書きであるが、それはともかく、この伝承の中でアタ系海人のルーツについて触れられている点は貴重である。まず兄弟の名前について『古事記』『日本書紀』『先代旧事本紀』の記事を整理して示そう。

(記) 火照(ほでり)命(隼人阿多君祖) 火須勢理(ほすせり)命 火遠理(ほおり)命(天津日高日子穗穗手見命)

\*火明命は瓊々杵の兄とする

(紀本文) 火蘭降(ほすそり)命(隼人等始祖) 彦(ひこ)火(ほ)火(ほ)出(で)見(み)尊 火明(ほあかり)命(尾張連等始祖)

第2 火酢芹(ほすせり)命 火明命 彦火火出見尊(亦号火折尊)

第3 火明命 火進(ほすすみ)命(火酢芹命) 火折彦火火出見尊

第5 火明命 火進尊 火折尊・彦火火出見尊

第6 火酢芹命 火折命(亦号彦火火出見尊)

\*火明命(その子天香山は尾張連等遠祖)は瓊々杵の兄とする

第7 火明命 火夜織(ほより)命 彦火火出見尊

第8 火酢芹命 彦火火出見尊

\*火明命（尾張連等遠祖）は瓊々杵の兄とする  
（旧事紀）火明命 火進命（異名・火蘭、火酢芹）火折尊 彦火火出見尊

こうした資料について、要点を列記すれば次のようになる。

- ① 火明命について『古事記』『日本書紀』第6、同第8は天忍穗耳尊の子（瓊々杵の兄）とする。
- ② 書記本文は誕生の順序が間違っている。結論的にいえば、火明は火蘭降と異名同神で、隼人等始祖であり、尾張連等始祖である。彦火火出見は末弟としなければならない。
- ③ 第7の火夜織は火折と同神と考えられる。したがって火明と彦火火出見の兄弟2神の物語ということになる。
- ④ 火照・火明・火須勢理・火蘭降・火酢芹・火進は異名同神、火遠理・彦火火出見・火折・火夜織も同様の神と考えられるから、結局、全話とも兄・弟2神に集約できる。
- ⑤ 『先代旧事本紀』では、最初に火明命（工(きぬぬい)の)造(みやつこ)等祖が生まれ、次に火進命（異名・火蘭、火酢芹命—隼人等祖）、3番目に火折尊、次に彦火火出見尊が生まれるが、彦火火出見について「天孫天津彦彦火瓊々杵尊の第二之子なり」と記しているところをみると、ここでも火明と火進等を同神、火折、彦火火出見を同神、つまり瓊々杵の子は2人兄弟であったと認識していたことがわかる。

【参考】『先代旧事本紀』は、「天照(あまてる)國照(くにてる)彦(ひこ)天火明(あめのほあかり)櫛玉(くしたま)饒速日(にぎはやひ)尊」といい、アメノオシホミミの子でニニギの兄である天火明命と同一の神であるとしている。

#### 4 アタ系海人の展開

さきに隼人についての解説を紹介したが、それに従えば、隼人というのは地域集団である部族の集合体であり、イメージ的には南九州南部から薩

南諸島にかけての漁民という印象が強い。その代表格が阿多隼人であるが、時にはそれが即隼人を意味しているようなケースもみられる。

氏族としてのアタ族については、前述の阿多君（記）に続いて、神武天皇の妃である阿（あ）比（ひ）良（ら）比（ひ）売（め）が阿多（あたの）小櫛（をばしの）君（きみ）の妹であるという記事があるが、8世紀以後の史料にみえず、早く衰退したといわれる。『日本書紀』に記されている吉野の阿太養鷗（紀）、『新撰姓氏録』の山城国・阿多隼人、右京・阿多御手犬養、「近江国志可郡古市郷計帳」（天平14年—742）の阿多隼人乙麻呂などは、いずれも大和朝廷に服属し中央に移住した阿多隼人だという。

このほか、アタ族の支流と思われる氏族も散見する。火明命の母であるコノハナサクヤ姫は『日本書紀』によれば、別名吾田（あた）鹿葦津（かしつ）姫（『古事記』は神阿多都比売）とも呼ばれていたが、このカシツ姫を祖にしたと思われる氏族が『続日本紀』にみえる。聖武天皇の天平元年（729年）7月の「大隅隼人始良郡小領外従七位下勲七等加志君和多利」と称徳天皇の神護景雲3年（769年）11月の「外従五位下薩摩公鷹白、加志嶋麻呂並授外従五位上」とある加志君がその1例である。

こうしたアタ系海人たちの奉斎する神として一般的にみられるのが火明命、吾田片隅命、神吾田津姫命（吾田鹿葦津姫命）といった神々である。ここではそうした祭神名をはじめ、神社名、地名、伝承などを通して、山陰から北陸にかけての事例の一端を紹介しておく。

**（事例1）雲伯・阿太加夜神社** 出雲の東部（松江市出雲郷）、意宇川の河口に鎮座する阿太加夜神社は、『延喜式』にはみえないが『出雲国風土記』所載の古い神社である。祭神は阿太加夜奴志（あたかやぬし）多伎喜（たきき）比売（ひめ）命とされている。西伯耆の阿陀萱神社、西出雲の多伎神社も同神を祀っている。この阿太加夜神社もアタ系の海人たちによって祀られた神社ではなかったかと思われる。

祭神のアタカヤヌシタキキ姫についていえば、アタ・カヤ・ヌシは、前述の熊襲の例に従えば、アタ（地名）＋カヤ（敬称・肩書）で、ヌシはカ

ヤと同義と考えられるから、敬称・肩書が重複していることになる。アタカヤを一つの地名と考えてもよい。この神の性格を示しているのがタキ・キであるが、これは宗像三女神の一人であるタキ・ツ姫（紀・湍津姫命）と同工で、このタキは海の滝、つまり潮流を意味しているのではなかろうか。航海民である宗像族が潮流を神格化して祀ったことは十分に考えられるところである。雲伯のタキ・キ（来）もこれと同じように潮流を神格化したものと考えられる。

なおついでに蛇足を加えておくと、『出雲国風土記』・国引き神話の八束水臣津野命も、海の民の生態を模したものではなかろうか。八束水は長い水流、水道（船の航路・船道）、臣は私称の肩書、津野は湊（船どまり）を意味していると考えられる。

**（事例2）伯耆・アタ地名** 伯耆ではアタに関係する地名として『和名抄』に日野郡阿太郷が記されている。これは現在の日南町印賀のあたりであったとされており、阿太上（おたうえ）、東阿太上、西阿太上、阿多山という地名が今も残っている。高天原を追放された須佐之男が降り立ったという鳥髪（現在の船通山）を挟んで、東出雲の仁多郡から西伯耆の日野郡にかけては、中国山地の中でもとくに良質な砂鉄の産地である。

前述の谷川健一氏の所論のように、渡来した海洋民が稲作や製鉄の技術を携えていたとすれば、出雲や伯耆は魅力的な進出地だったに違いない。あるいは海人とタタラの関係についても検討する必要があるかもしれない。

**（事例3）因幡・阿太賀津（あとかつ）武（たけ）御熊（みくま）命神社** 因幡の阿太賀津武御熊命神社（鳥取市御熊）は出雲臣系の神社である。境内神として鍛屋明神（天目一箇神）が祀られており、神社背後の鍛冶屋谷をはじめ、付近に金糞谷、大工谷など鍛冶に関する地名が多くみられるのが注目される。

この神社名を見てまず気になるのが、祭神名のアタカツとミクマであるが、これについて卑見を述べておくと、アタカツは前出のアタ・カヤと同

義と考えたい。つまりカツも敬称・肩書の類であり、他にも「正勝(Ⓜ)吾勝(Ⓜ)勝(Ⓜ)速日・天之忍穗耳命」(紀)、「事勝(Ⓜ)国勝(Ⓜ)・長狭」(紀)といった用例もみられる。とくに勇者というイメージが強い。

武御熊命は、天孫の降臨に先立って葦原中国の平定に派遣された、出雲臣の祖神・天穗日命の子で、『日本書紀』巻2・神代下の本文にしか見えない神名である。

即ち天穗日命を以て往きて平(む)けしむ。然れども此の神、大己貴神に佞(おもね)り媚(こ)びて、三年に比及(な)るまで、尚し報(かへりごと)聞(まう)さず。故、仍(よ)りて其の子大背飯(おおそびの)三熊之(みくまの)大人(うし)、亦の名は武三(たけみ)熊(くまの)大人(うし)を遣す。此亦還(これまた)其の父(かぞ)に順(おもね)りて、遂に報聞(かへりごと)さず。(紀・巻第二、神代下)

つまり、天穗日、武三熊とも葦原中国の平定を命じられたが、相手に寝返り、帰還して復命もしなかったという。これは反逆行為であり、これによって出雲臣氏が王権から化外の民として敵視されたことは間違いあるまい。こうした関係は出雲国造家系図の11代の振根まで続き、振根の反抗を最後に出雲臣は王権に服属することになる。

次に示すのは「出雲国造系図」の一部である。

①天穗日命—②武夷鳥命—③伊佐我命……………⑩世毛呂須命—⑪阿多命(振根)—飯入根—⑫氏祖命(鵜濡淳)—⑬襲櫛命(野見宿禰)

この中で、11代・阿多命(振根)とあるのが注目される。振根は出雲臣の遠祖で、神宝を崇神天皇に献上(服属の儀礼)した弟・飯入根を殺し、天皇の命により吉備津彦らに誅殺された。飯入根は振根が筑紫に往って留守の間に神宝を献上したという(『日本書紀』巻5崇神天皇60年)。この振根が阿多命と呼ばれ、筑紫(九州)との関係が示されている点が興味深い。

12代・氏祖命(鵜濡淳(うかづくぬヌ))は、『新撰姓氏録』によれば出雲臣の祖。『先代旧事本紀』によれば最初の出雲国造である。文字通り水中

に潜る鵜を神格化したものであるが、出雲臣氏の出自が漁民とかかわっていたことを示唆している。

阿太賀津武御熊命神社を通してアタ系海人と出雲臣との接点が見えてきた。つまり、アタ系海人の祖神である火明命は海人族であり、王権に対する敵対勢力である。一方の出雲臣族も、天穂日、振根の例のように反権力的勢力であり、阿多命、鵜濡淳といった名前から海人を想定することができる。

**(事例4) 丹後・籠(この)神社** 天橋立近くに鎮座する籠神社も、祭神を彦火明命とするアタ系海人族に関係する神社である。当社の歴代の宮司を世襲してきたのが海部(あまべ)氏であるが、同家に伝わる海部氏系図(「勘注系図」)によれば、天火明命から始まる系図は「尾張氏系図」(『先代旧事本紀』)にはほぼ重なっており、尾張氏が奉斎した神社ともいわれる。

尾張氏は右の系図に示すように、天火明命を祖神とし天忍人命から始まるとされ、平安時代の終わりまで代々熱田神宮の宮司を務めた。この神社名であるアッタはアタの変化と考えられる。景行天皇の時代、日本武尊が東国平定の帰路に尾張へ滞在した際に、尾張国造である12代・乎止与命の娘宮竇媛命と結婚し、草薙剣を媛の手許に留め置いたまま伊吹山の賊を退治に出かけ、病を得て能褒野で亡くなった。「娘子(をとめ)の床の辺にわが置きしつるぎの太刀 その太刀はや」という歌謡は、その時に日本武が詠んだ辞世の歌であるが、守護神である草薙剣を持参しなかったことへの後悔の叫びが聞こえてくる。その後、宮竇媛は熱田に社地を定め、剣を奉斎鎮守したのが熱田神宮の始まりといわれる。

(尾張氏系図)

祖 天火明天命 2 天香語山命 3 天村雲命 4 天忍人命  
5 天戸目命 6 建斗米命 7 建田背命 8 建諸隅命  
9 倭得玉命 10 弟彦命 11 淡夜別命 12 乎止与命

**(事例5) 能登熊来(くまき)郷・久麻加夫都阿良加志比古(くまかつあら**

**かしひこ)神社** 能登半島の七尾湾に面する当社は通称お熊(おくま)甲(かぶと)の宮と呼ばれ、秋のお熊甲祭は北陸を代表する祭礼として有名である。その所在地については、『神名帳』に「羽咋郡」とあることからいろいろ議論があるが、ここでは一応「能登郡熊来郷」とする説に従っておくことにする。当社もまたアタ系海人族にかかわる神社であった可能性が大きい。当社の地名と祭神について『式内社調査報告』は、熊来を高麗来(こまき)とし、アラカシヒコを崇神天皇のときに伽耶から来たというツヌガアラシト(都怒我阿羅斯等)に擬する説を紹介しているが、この説には賛成できない。

まず熊来であるが、これは「クマ(熊襲国＝南九州)から来た」と解すことが可能である。次に問題になるのは「久麻加夫都」の訓みである。これについてはクマカフツ、クマカブツなど諸説があり、現在はクマカブトと訓むのが一般的であるが、そうした中で、国史大系本・『延喜式』が「加夫都」にカツ(㊦㊦)と傍訓しているのが注目される。

「加夫都」は万葉仮名の訓み方からすれば、カブツと訓むのが普通であろう。それを国史大系本がカツと訓んでいる論拠が不明であるが、鹿児島方言ではカブはカツと促音化する。つまり、カブ→カッ→カツという変化が考えられる。その際「都」は漢字訓読の際の捨て仮名(送り仮名)と考えられる。つまり加夫の最後の音はツであるということを示すための仮名である。「アラ・カシ」については、アラには「新」とか「荒」を宛てることもできるが、アタから転化した語である可能性もある。アタカシツ姫に対応するアタカシ彦であり、この神も船泊まりの神ということになる。



香田 勇

## はじめに

安曇族の出自は、中国大陸の春秋時代に長江河口南域を拠点としていた呉の国です。呉は越との長年の戦争に敗れ滅ぼされると優れた農業の技術等の色々な技術をもって東シナ海を渡り北九州に亡命をした、そして福岡市東部の志賀島に住みついた海人の集団が安曇族です。

## 安曇族の渡来

中国大陸の春秋時代に（BC. 770～403年）、呉越同舟の熟語で有名な呉国と越国は長江の下流域にあって30年ほど戦い、BC. 473年に呉が滅びた。呉人は海人出身で優れた航海術を持っていたので、東シナ海を渡って日本列島の北九州へ亡命した。このことは中国史書に「倭人は呉の祖」と言われている「太伯の後裔」であり入墨などの習俗で共通すると書いてあることから分かる。

又、両国の争いから出たもうひとつの有名な熟語に臥薪嘗胆がある。これは復讐の念を忘れないことから生まれた言葉であるが、北九州へ亡命して来た呉人はこの熟語通り、仇敵越へ復讐を誓い越の情報集めと軍資金を得るために、中国大陸へ出かけて交易を始めたその北九州の根拠地が現在の福岡市東区志賀島です。

BC. 334年に仇敵越が楚に滅ぼされると復讐という目的をうしませんがそれまでの交易で身につけた商人として発展します。いわば戦闘集団か

ら経済集団へ転換し、中国大陸から日本列島への移住を望む人たちを支援



上空から望む上安曇・下安曇

していきます。

亡命者たちは、水田稲作、養蚕や漁撈の技術を持っていた。安曇族は中国大陸の交易が軌道に乗ると交易で取り扱う品を多くするため日本列島内にも交易網を広げていたから、鉄製品がまだ普及せず石や木の農具を使つての水田稲作と養蚕に適している地域の情報も持っていたし、魚介類が豊

かで船を扱いやすい海岸の情報も持っていた。だから安曇族は亡命者たちに、水田稲作と養蚕に適した地へ、漁撈が得意な人たちへはそれに適した海岸を斡旋して住まわせた。その斡旋先での生産物は安曇族が一手に引き受け、日本列島内の交易も中国大陸との交易も大きく発展した。商業に重点を置いた政策をかかげた後漢の光武帝にとっては取引先として大切な相手であったので安曇族へ「金印」を授けた。

安曇族は呉の創建者の太白（たいはく）の教え「入郷従郷」の精神で日本列島の各地に入っても、すでにその地で祀る神を尊重した。神社名についても同じように「入郷従郷」の教えが伺える。本家の福岡市の志賀海神社、大川市にある風浪宮、安曇野市にある穂高神社、名古屋市にある綿神社と号しているように社号は統一されていない。

## 古代外洋船の大きさ

古代の外洋船の大きさについて、松枝正根氏は『古代日本の軍事航海史』のなかで、以下のように書いている。

5世紀の初め朝鮮半島や中国との交流に使われた外洋船は、全長15m、幅3m、高さ4m以上で、総トン数20～30t 余り乗員は20～30人位であったろうと推測される、そして、片舷に4人ずつ計8人によって櫓を操り国内外へ進出を果たした。

また、『史記』張儀列伝には、次のように記されている。

長さ20～24m、幅3.2m、水手50人、武士26人、指揮官12人、舵見張り5人、都合93人、舳船（二隻の船を並べたて組み合わせたもの）である。

## 筑前安曇族五つの階層

筑前安曇族には、以下のような五つの階層があったと推定される。

- ①航海術を持っている者（安曇族）
- ②漁民（時は兵士）
- ③農民
- ④海運交易商人（商品を売る者、時には兵士）
- ⑤職人（専門の技術者）

米子の安曇地には①、②、③の人が上陸したと思われる

## 安曇地の共通点

各地の安曇地の地理的な共通点として、以下のような点が考えられる。

- ①小川で海とつながっている（下流部で船によって運搬出来る）
- ②谷田（棚田）がある（土地が柔らかい、水の有効利用が出来る）  
木のクワ、スキ等を使って耕せる地

『尚徳村誌』では「法勝寺低地」について次のように述べている。

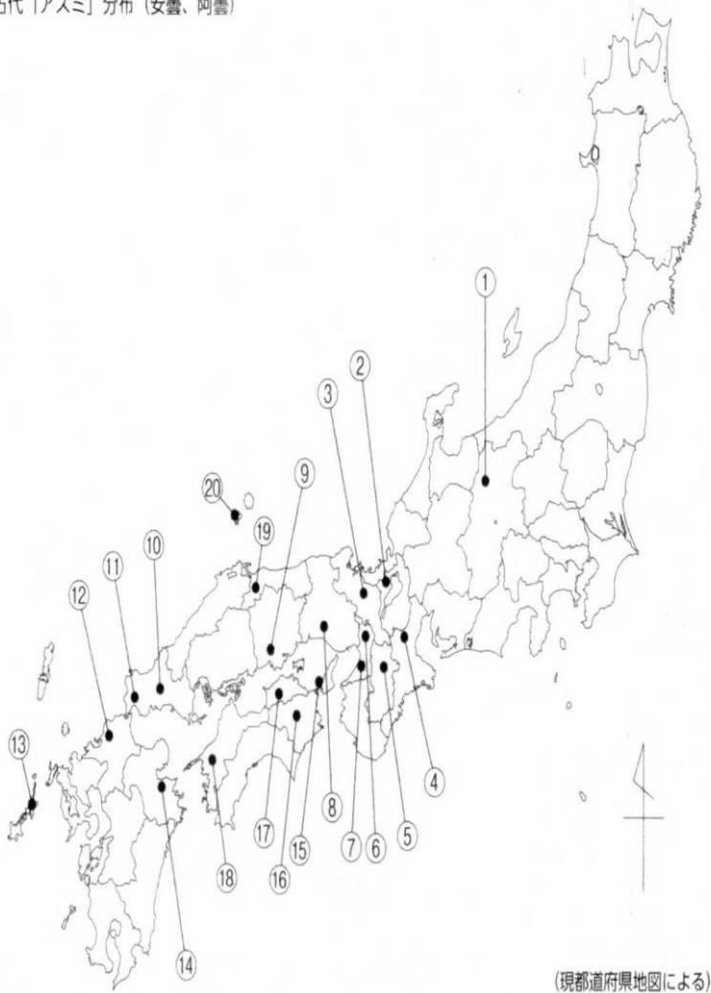
法勝寺川によって運搬された砂礫（されき）や泥土が堆積して造られたいわゆる沖積平野である。この平野の特徴は細かい物質から構成されていて傾斜がきわめて緩く平坦である。「土地分類基調調査」によると低地の南端部にあたる、会見郡天万部落付近（地図の赤丸）の沖積層断面は砂層、粘土層、砂層、粘土層、の互層であって礫（れき～小石、石ころ）は入っていない。

小谷氏は『法勝寺川』の中で次のような見解を述べている。

手間盆地通過の鉄道線路（法勝寺電車 1924年 大正13年創業）

に於ける多くの橋脚掘下地を見るに田面下は花崗岩まいらん（腐食）の石英長石の粗粒をふくみ、その上に多少の粘土を混じた層があつてその以下は同様粗粒を伴った細砂の層がある。1 m以下に於いて粘土層となっている。この土質から推考すれば盆地の一面はある地質時代

図表2 古代「アズミ」分布（安曇、阿曇）



1	信濃国	安曇郡	主領安曇部百島
		安曇郡前科郷	安曇部真羊
2 -a	近江国	伊香郡安曇郷	
2 -b		高島郡安曇河御厨	
3 -a	山城国	石京	安曇宿禰
			阿曇継成
3 -b	山城国	玉井庄(綴喜郡)	庄司ほか安曇
3 -c	(山城国カ河内国)		阿曇山背連比羅夫
4	伊賀国	玉瀧柚(阿閉郡)	工安曇
5	大和国	添上郡左京六条二坊八坪隅	安曇仲子相伝頼
		添上郡六条・七条各一里内	安曇田庄
6	摂津国	(西成郡など)	安曇江
			阿曇寺
		住吉郡	安曇連(等)
7	河内国		安曇連
8 -a	播磨国	揖保郡石海里	安曇連百足・太牟
		揖保郡浦上里	安曇連百足等
		揖保郡古上郷□家里	阿曇
8 -b	播磨国	赤穂郡有年庄	専当・寄人安曇ら
9	備中国	浅口郡船穂郷	阿曇部押男
10	周防国	吉敷郡神埼郷	阿曇五百万呂・阿曇部□麻呂
11	長門国	美祿郡	安曇・安曇部
12 -a	筑前国	糟屋郡安曇郷	
		糟屋郡	阿曇社
12 -b	筑前国		阿曇神8戸
13	肥前国	松浦郡値嘉郷	阿曇連百足
14	豊後国	海部郡	阿曇部
15 -a	淡路国	野島(津名郡)	阿曇連浜子(黒友とも)
15 -b	淡路国		国司安曇宿禰虫麻呂・広道の交替
16 -a	阿波国		阿曇部
			書生安曇豊主
16 -b	阿波国	名方郡	安曇部粟麻呂
		名方郡佐濃郷	阿曇部佐婆ら
		名東郡	安曇継見
		那賀郡幡羅郷海部里	阿曇部ら
		板野郡カ勝浦郡余戸郷	安曇部太隅
17	讃岐国	大内郡入野郷	多数の安曇
18	伊予国	伊予郡石井郷海部里	阿曇部太隅
19	伯耆国	会見郡安曇郷	間人安曇□
20 -a	隠岐国	海部郡	少領阿曇三雄
		海部郡前里	阿曇部都祿
		海部郡佐吉郷	阿曇部□□多
		海部郡佐佐郷治田里	阿曇部止巳
		海部郡佐佐郷大井里	阿曇部意比
		海部郡佐々郷大井里	阿曇部
		海部郡佐佐郷大井里	阿曇部真佐
		海部郡海部郷志吉里	阿曇部与呂比
		海部郡□□□□□	阿曇部与里比
		海部郡布勢郷大浦里	阿曇部知麻呂
		海部郡布勢郷大浦里	阿曇部奈々部
		海部郡布勢郷敷多里	阿曇部広田
		知夫郡由良郷	阿曇部赤人
20 -b	隠岐国		阿曇部麻支
20 -c	隠岐国		浪人安曇福雄

に平静な水面であって、粘土層の沈静を見、次の地質時代に洪水毎に山地の花崗岩まいらん土砂を運搬沈積したものと見られる。

表層の観察も昭和40年代の基本調査と一致していて狂いが無い、表層の河川堆積物の下に米子市街地の地下にあるのと同じ貝殻をふくんだ海成層があると推定される。

これらの考証の他に古老の伝える埋蔵物等の傍証(法勝寺川)があり、あれこれ総合するとこの低地が海であったことはほぼ確実のように思われる。この低地が米子地方で最も古くから拓かれた豊かな稲作地帯であったことは、周辺に見られる古代人の住居遺跡からもうかがう事ができる。

その他、以下のような資料もある。

\*天明8年(1788)土蔵新築のさいの覚書きである、この中に、車尾村戸上から天津村福成まで荷船で石を運んだ際の費用明細書がある。

\*明治26年水害兼久堤防決壊修築工事の際、戸上石運搬の石船は戸上から青木茶屋まで毎日あがった。

これらは、昔の法勝寺川が今よりもっと底が深くて船運の便のあつたことを物語っている。

一方下流域は、地球上の温度が今より高く、海水が上昇していて河川の埋立作用と地盤の隆起によって海はしだいに退却したが、縄文末期においても、海岸線は現在の海拔4～5mの所にあり、面積にすれば縄文前期の入江の三分二以上がなご海であった。この海新时期には宗像あたりまで海がきていて尚徳平野は入江になっていたかもしれない。

## 磐井の乱と安曇族

壬申の乱(672年)と並んで、古代史最大の動乱と言われる磐井の乱は継体天皇の21年(527年)の6月、近江の毛野臣が6万の軍隊を率いて朝

鮮半島へ渡ろうとしたのを筑紫国造（くにのみやつこ）は毛野臣の軍隊の渡海を妨げた。

安曇族は磐井の側についていた、なぜなら彼らの本拠地である粕屋郡は磐井の子の葛子（くずこ）が支配していたからである。安曇族は磐井軍の海軍として玄界灘に展開していた、安曇族は粕屋郡を本拠地とする海軍だったから、軍事分断線の北に展開していた。

彼らはおそらく博多湾から玄界灘に軍船を連ねてそこから戦況を眺めていた、つまり磐井軍は全滅したが安曇族は実際には戦っていないかった。大和朝廷が安曇族の操船技術が今後必要になると考え、磐井の乱後の戦後処理として大和王権の強い力が働き安曇族を全国いたる所に移住させたと考えられる。その中で米子の安曇地への上陸の理由は北九州勢力の分散、そして伯耆地域（現在の上安曇、下安曇）の開発、特に鉄資源の確保を命じたものであろう、上陸時期は私見では550年頃と思われる。

## 安曇族と北九州との結びつき

安曇族と北九州との結びつきをうかがわせる数多くの地名、神社がある（上安曇、下安曇、宗像（宗像神社）、兼久一高良神社等）。また法勝寺川、小松谷川支流域には角田徳幸氏も初期の横穴式石室との直接的な交渉によって受容された古墳が多くあることを論じている。船で海氏が北九州あたりから伯耆に移住してきたことは確実に（年代不詳、私見550年頃）これによって、相当な規模の集団があったことは明らかである。

## 安曇族が消えた理由

——「海人フォーラム」、新川登喜男先生の基調講演から

2014年11月29日、米子で開催された「海人フォーラム」の基調講演をされた新川登喜男先生は、安曇族などの海の民の痕跡が残りにくい要因について、以下のようなことを述べられた。



流動性に富み結束の固い小規模な海部集団の生業形態を尊重しつつ何とか土地に拘束しておこうと墾田開発による稲作農民や稲作民導入と引き換えに陸にあがったと思われる。

「海の民」を稲作民化させ班田収授や庸、調制などを介して土地に結び付け、常に行財政機関が把握しやすいようにしたいということなのです、同時に人口を増やして農耕生産力と生産量そして税収を高めようとした。

このような政策は、たとえば645年の大化の改新などに現われている。その方向性は、以下のようなものである。

- ①国、郡、里制による地方政権の朝廷集中
- ②私有地、私有民の廃止
- ③庸、調等の税制の統一
- ④班田収受法

男女6歳に達すると国家より男で2反の口分田が授けられた収穫の3%の年貢はそんなに厳しいものではなかったが、都での強制労働、中央諸官庁での雑役、兵士、その上飢饉など世の中が不安定となり、又重税のため農民の中には耐えられず自分の土地を捨てて逃げ出す者もあらわれ、荒地が増加したため墾田永世私財法が制定された。

このような状況のなか安曇族は農民となり陸にあがった。さらに土地に関する法は、以下のように展開する。

### **三世一身の法 制定 (723)**

土地の開墾をしても良い、但し孫の代までの三代しか自分のものではない、これで班田性が崩れた。

### **墾田永年私財法 制定 (743)**

永年に渡って墾田した者の所有となる法が制定され財力、権力のあ

る豪族、社寺が農民を使って開墾をして私有地を広げていった。律令制がくずれ、荘園制度が発生した。平安時代～鎌倉時代へ

## 安曇郷（族）に関する文書資料

古代の会見郡安曇郷に関する文献資料を2点紹介する。

1点は、平安時代中期の承平年間（931～938）に編纂された『和名抄』に、「伯耆国会見郡安曇郷」の名が記されている。

もう1点は、「伯耆国会見郡安曇郷戸主間人安曇〇調純壹匹」と書かれた調布の白絶断片が残っていて、現在正倉院に保管されている。764年には海人ではなくなり農民となり「絶」を収めている。

「伯耆——壹匹」の20文字の中に安曇（族）が住んでいたことを証明できることが3つある。

①安曇〇〇氏がいた

②調として絶を壹匹納めた（安曇族しか絶が織れなかった）

③朝廷から絶を納めるように命があった、BC. 473年に呉の亡命者（安曇族）が初めて日本に養蚕の技術を持ち込んだ、朝廷もこのことを知っていた。その後農民に桑の木を植えるよう、布を織るよう令が出た。尚近隣の郡、郷の調納物はほとんど昆布、小魚の腊であった。

## 伯耆民談記（江戸時代中期の史書）

平安時代末期～鎌倉時代前期（1100～1200）に庄園制度が出来る。1600年頃迄続く。

①富田庄～後世、三崎、寺内、天万、上安曇、清水川村

②福田庄～柏尾、谷川、坂根、境、大袋、下安曇村

\* 富田庄は長者原の紀成盛の領土である。（大山寺縁起）

\*ここで初めて上安曇、下安曇の地名が出て来る。

## 上安曇集落について

大永4年(1524年)尼子経久が、米子、天万に乱入した。尼子経久は続いて黒坂、淀江、尾高城を落とした。これらの戦いについて『伯耆民諺記』に「国中の人民戦死すること幾千万の数知れず、死人街に充満し、放火の余煙蒼天を暗まし、時は五月下旬の事なる故、今に至って老民の諺に五月崩れと云は此動乱のことなり」と結んでいる。

下安曇、別所にあった、お寺は勿論のこと当たり一面焼け野原となり貴重な歴史資料、財産も全て灰となった。

この時、天万、清水川、境の農民も手間要害山での戦いに山名氏の兵としてかりだされた。しかし戦わずして破れ城を明け渡して、それぞれの集落に戻った。その農民の人達の一部が江戸時代前期から中期にかけて上安曇地区に入村した。

江戸時代後期、1842年の上安曇の戸数は13戸であった(尚徳村誌)。

## 安曇族を追って——おわりに

呉の亡命者(安曇族)が北九州に上陸し水田稲作、養蚕の技術を持ち込んでから約1200年間続いた安曇族の活躍も終わりを告げた。大化改新(645年)によって海人から陸に上がり稲作農民、あるいは養蚕業へと変わり安曇族としての活動は終わった。平安時代後期には安曇族の名前は聞かれなくなった。以後、郷村の発生、荘園(庄)制度をへて会見郡尚徳村、(明治22年)へ、そして西伯郡尚徳村(明治29年)へ、米子市合併(昭和28年)へと変遷していった。その後度重なる水害で土砂が流れ込み安曇の湖沼地は今、田園、果樹園(富有柿の里)となっている。

附 記

### ①「内膳司について」

安曇族、すなわち安曇宿禰氏は長い間内膳氏という役所に勤め、しばしばその長官の要職を占め天皇家の食卓を預かった。安曇宿禰氏には高橋という強力なライバルがいたが、不始末により官位をはく奪され、内膳氏から追放されそして佐渡へ流された。安曇族の運命を左右する重大事件であった。安曇族が消えてゆく要因ともなった。

### ②「安曇族と徐福」

徐福とは、中国の山東半島の斉の国で生まれ育った人である。徐福は秦の始皇帝に東方にある蓬莱に、不老不死の霊薬があると具申し、命をうけて財宝とともに数千人を従えて秦から東方に船出した。そのうち蓬莱にあたるのが和歌山県新宮市とされていて(日本全国に37ヶ所の候補地がある)、徐福はその後新宮市に住みついたという。ここに住みついた徐福とその他の人達は大陸からの文化や農業、捕鯨漁、特に鉄製工農具、絹織物を作る機械技術等に関する技術を新宮市の人に伝え、ここ新宮市の地で没したと言われている。

尚、和歌山県新宮市には神社、公園、碑、由緒板、徐福像、不老不死の木が植えてある。

### ③「貢納物の運送について」

大化改新の詔でうたわれた古代の道である。少なくとも律令時代の道路に対して、山辺の道のような狭い道や曲りくねった道。あるいは獣道のようなイメージを抱くのは誤りである。天皇の命令を広く全国に伝えるための七道で、山陰道についていえば丹波―丹後―但馬―因幡―伯耆―出雲―石見―隠岐という順路が定められていた。官道(現代の高速道路のように2車線～4車線幅のまっすぐな道であった)は、都から放射線状に日本列島各地に延びる道で、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道のことである。

### ④「貢納物運京、上京」

貢納物の輸送と都で働く人の移動、庸、調の運脚はその家から出すことになっていた。ただ実際には納入者全員の中から選ばれた者があたり、運脚は国司が率いて官道を上京していった。伯耆から都まで上り十三日、下り七日の行程であった。律令制がなくなると山陰道を利用する人は少なくなり、山越えの道を利用するようになった。

## ⑤「山越えの道」

根雨から四十曲り峠を越え、美作国津山を経て播磨国姫路へ至り、畿内へと結ぶ道。四十曲りは「四十九の曲り」あるいは「始終曲がる」との名前があるほど、超えるのに困難な峠であった。

江戸時代には四十曲り峠は、参勤交代の為に整備された出雲街道随一の險路であり、江戸への道のりで最大の難所である箱根越えと双壁であった。

## 参考文献

- 坂本 博 『信濃安曇族の謎を追う』  
坂本 博 『信濃安曇族のルーツを求めて』  
坂本 博 『信濃安曇族の残骸を復元する』  
亀山 勝 『安曇族と徐福』  
松枝 正根 『古代日本の軍事航海史』  
『史記』 張儀列伝  
『尚徳村誌』 法勝寺低地  
『米子市史』  
錦織 勤 古代中世の因伯の交通（『新修米子市史』5）  
新川登喜男 海人フォーラム、基調講演  
『伯耆民談記』  
『会見町誌』  
『伯耆民談記』  
『尼子氏と戦国時代の鳥取』（鳥取県）

## 三原 彰

### 1. はじめに

孝霊山（標高 751m）は米子市淀江町と大山町の境界線上にあり。古来、高麗山・韓山・唐山・香原山・瓦山などとも表記されてきた。山麓には弥生後期の妻木晩田遺跡やいわゆるカラ山古墳群と称される総数四百基以上の古墳の分布が確認されている。また石器類も多く出土しており、少なくとも縄文期以降人々が連綿として生活した場所であることがわかる。

米子から右手に大山を望みつつ国道9号線を東進すればやがて孝霊山が次第に大きくなり、ついには大山の姿がすっぽり隠れてしまう地点が来る。丁度そこに妻木の壹宮神社（祭神＝シタテルヒメ＝オオクニヌシのムスメ神、母はタキリヒメ：古事記）が鎮座している。神社から見る孝霊山の山容は主峰を中心に副峰が両側に並ぶ、最も均整がとれた美しい姿を見せる。この神社は、古代から孝霊山自体を信仰の対象としてきたものであろう。また日本海から見れば孝霊山は航海の目当てとなる山でもあったはずである。本稿では地名を手がかりに孝霊山について考察をこころみたものである。

### 2. 山名およびその変遷

まず、孝霊山麓に暮らす人々（主に年輩の人たち）に山名についての聴き取りを行うと、実際に地元の人同士の会話の中で通常使われている呼称は「カワラヤマ:kawarayama」あるいは「カーラヤマ:kaarayama」、カラヤ

マ「karayama」であり、「コウレイザン:koureizann」と呼ぶことは少ない



**孝霊山**

という事が分かる。カワラ、カーラの語源については朝鮮半島の韓・伽耶・加羅由来などの説やサンスクリット語のカーラ（黒）からとするなど諸説がある。近世（江戸期）の古地図には「瓦山」・「香原山」などと記載され（資料1）、中世の古文書にも「香春山城～」との記載例があることからすれば、現在の名称「孝霊山」は伯耆地方に色濃く残る孝霊天皇伝承から比較的新しい近世に付会された呼び名であり、中世以前に遡れば「カワラヤマ」と呼ばれていたと考える。

#### **資料1 地図、文書に見える孝霊山の名称**

中世	香原山（城）（かわらやま城）
寛政9年（1797）	高霊山 片山楊谷「大山眺望絵図」
天保14年（1843）	孝れい山 江戸後期 「会見郡大庄屋村支配図」

M12年	高麗山 (瓦山)
M40年	光廉山
M42年	光靈山
T13年	孝靈山
S7年	孝靈山

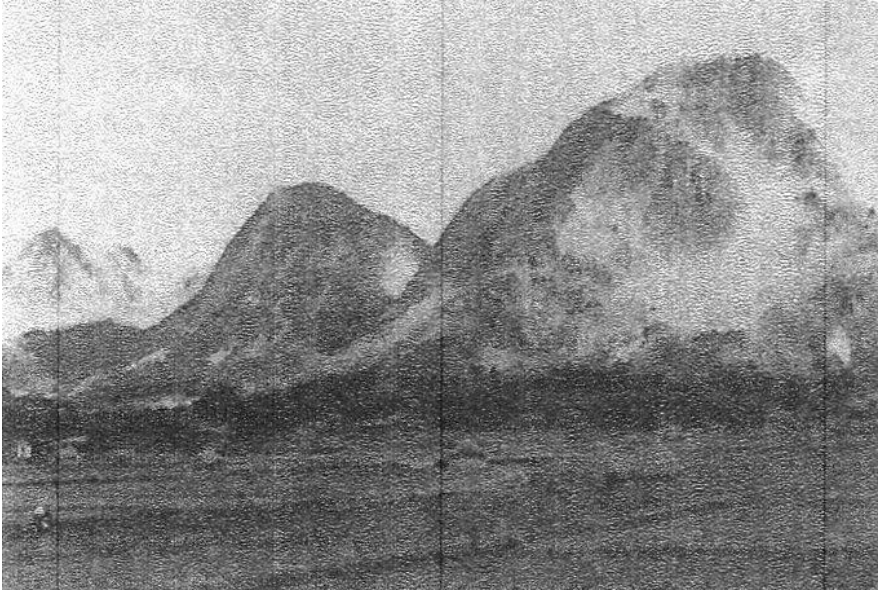
### 3. カワラ地名について

国内の「カワラ」と名が付く地名で半島との関係から真っ先に思い浮かぶのは、福岡県田川郡香春町（豊前）の香春岳（カワラダケ）である。香春岳は「豊前の国風土記」に「昔、新羅国の神が渡ってきてこの河原に住む。名づけて鹿春の神と申す」とある。香春岳は古代より銅を産出することが知られており、風土記は、この銅を産出する山を開発したのは、新羅からの渡来した神であるというのである。

何故渡来人をカミと呼んだかと言えば、古代には金属を精錬する技術者（あるいはそれを擁する集団＝秦氏、息長氏等）は高度な技能を持つがゆえに神として畏敬されたためである。香春岳の「採銅所跡」(地名)には現人あらひと神社が鎮座し祭神はツヌガアラシト（意富加羅「大加羅」の王子 資料2・3）である。また、香春岳を神体とする香春神社の祭神は、第一座辛国息長大姫大目命(カラクニオキナガオオヒメオオメノミコト)、第二座忍骨命(オシホネノミコト)、第三座豊比売命(トヨヒメノミコト)であって、それぞれ香春岳の第一、第二、第三ノ岳の神とされている。

第一の神については、辛国は韓国、オキナガは「息長」で「ふいごを吹く」の意、オオメは「大目」すなわち大眼で「一つ目」を言い、「目一つの神」はいわゆる鍛冶製鉄（精銅）技術者が信奉するカミであり、その巫女





香春岳 左端=三の岳 真中=二の岳 右端=一の岳 (昭和初期)

ということになるとして香春岳の神の本質は第一座のみという説がある(上図)。一方「採銅所」に古宮八幡があり、「新宮」と称する香春神社に対する「古宮」であろうから、ここが香春の神が最初に祀られたところであろう。だとすれば、新羅から「渡り到来きた」神とは香春神社の第一座の祭神「辛国息長大姫大目命」ではなく、古宮の祭神「豊比咩命」であるという説(=岡谷公二)もあり、製鉄神とのみ解釈するにはさらに検討を要する。

#### 4. 地名以外の共通点と相違点

次に、孝霊山(瓦山)と香春岳の、地名以外の共通点について考えてみる。

①古代から信仰の対象であった。

②朝鮮半島（特に新羅）との交流を想起させる伝説（大山との背比べ＝孝霊山、現人神社等＝香春岳）が残る。

③山の形が特異・相似 1山3峰形成

しかし、相違する点もあり

A 孝霊山からは銅・鉄を産出しない。

B 孝霊山は海岸にあり航海との関連が想起されるが、香春岳はかなり内陸に入っている。（下図）



香春岳周辺地図

香春岳

## 5. 孝霊山名の起源

以下に三つの仮説を提示してみよう

①豊前の「香春」から孝霊山に移住してきた人々が名付けた。

②伯耆の孝霊山の麓にいた人々が豊前香春に移ってつけた。

③双方、直接の関係はないが、新羅あるいは伽耶に「カワラ」と呼ばれる源郷（伽耶山？）があって、その地域にもともと住んでいた人々が日本に渡来して故郷の山の名を付けた。

最も可能性の高いのは③である。それを証明するには新羅（あるいは伽耶）

耶)に「カワラ」山ないしそのように呼ばれる土地が古代にあったことが前提となる。しかし、古代の高句麗、百済、新羅、伽耶諸国で使われていた言語、すなわち古代朝鮮語については未だ十分に解明されておらず、残念ながら現代朝鮮語や中期朝鮮語をもって直ちに比較することは出来ないといわれている。

## **資料2 伽耶関連国名表**

⑦ 不斯国 ブシ	⑥ 古資彌凍国 コシミドク	⑤ 半路国 ハシロ	④ 彌鳥耶馬国 ミアヤマ	③ 戸路（ホロ）国	② 安那（アヤ）国	① 狗邪（クヤ）国	魏志
非火加耶 ピフアカヤ	小加耶 ソガヤ	星山加耶 ソンサンカヤ	大加耶（※） ダガヤ	古寧加耶 コニヨンカヤ	阿羅加耶（※） アラカヤ	金官加羅 クムガンカヤ	三国史記
昌寧（チヨンニヨン）	固城（コソン）	星洲（ソンジュ）	高靈（コリヨン）	咸昌（ハンチヨン）	咸安（ハナン）	金海（キメ）	比定地
非火「本朝史略」 比自火（ひしほ）「神功紀」・	久嗟（クサ）・古礎（コサ）「欽明紀」	伴波（はへ）「継体紀」	加羅（から）「神功紀」	晉洲（チンジユ）比定説もあり	安羅（あら）「神功紀」	南加羅（ありひしのかや）「神功紀」	備考
			※上加耶とも ウガヤ		※下加耶とも アガヤ		筆者補注

澤田洋太郎著「伽耶は日本のルーツ」  
P113の表をもとに補注



### 資料3 伽耶国の概略図

## 6. 結語

現代において遡れる最も古い朝鮮の文献資料は11世紀に著された「三国遺事」「三国史記」および新羅時代の「郷歌」(わずかに20首)であるされ、これらにより単語ベースで復元推測可能なものがあるが、残念なことに文章レベルの解読には至らないとされている。よって「カワラ」の語源をたどることは容易ではなく、意味を探ることも困難である。しかし韓国内を中心に近年発掘されはじめた多くの文字資料(石碑や木簡等)によって今後研究が進むことが期待されている。

# 初めての考古学

2015年4月25日発表

## ——伯耆の古代を考える会に参加して——覚書（1）

前川仁三夫

### はじめに

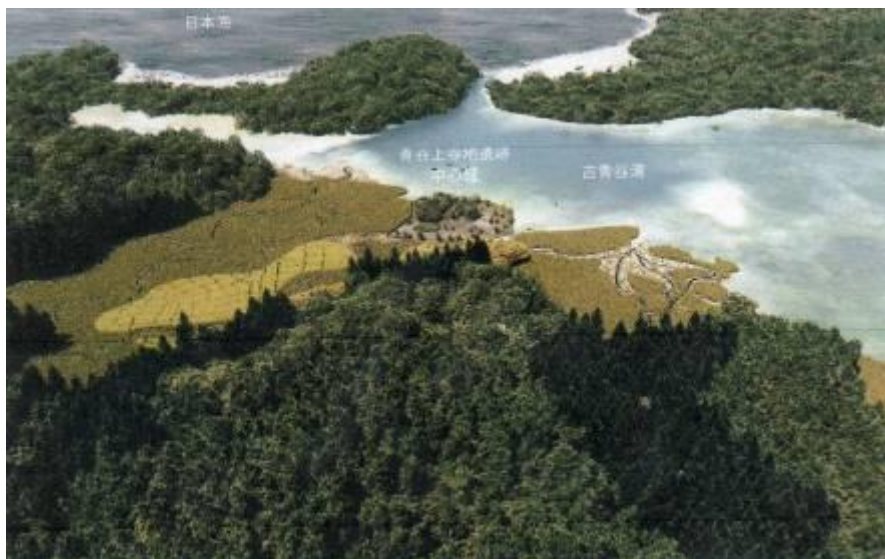
伯耆に住み始めて1年が過ぎ、2014年11月29日に開催された「海人フォーラム in 米子 古代日本海の文化交流」に参加した。そこでの呼びかけに応じ「伯耆の古代を考える会」に参加することになった。

古代史、考古学など全くの素人でありながら月例会に参加させていただいているが、これが面白い。古代史や考古学の専門用語も知らず、伯耆の土地勘もないので、例会での話が分からないことがあるが、でも面白い。その場で辞書を引きながらであったり、初歩的な質問をしたりで会員の皆さんにはご迷惑をかけているが、どうかご容赦願いたい。

私が、このフォーラムに関心を持ったのは次のようなことからである。一つは妻木晩田遺跡の四隅突出墓のレプリカを富山で見たことがきっかけで、「日本海学」について知った。そして日本海をめぐる人々の交流に思いを巡らすようになった。今回のフォーラムで、それらを担った人々を“海人”と呼んだとは、なんと大胆かつ納得できることかと思ったのだった。

もう一つは今の時代、国境があり様々な地域で暮らすには大きな制約があるが、いつのころから、なぜ？このような制約が始まったのかと思っていた。第2次大戦後に宣言された世界人権宣言第13条には「どこにでも住める」（谷川俊太郎の世界人権宣言）とうたわれているが、未だそうでは

なく、それは希望なのだ。しかし東アフリカに生まれたといわれる人類はホモ・サピエンスとして一つの種でありながら世界に広がっていく中で、



**資料1 現在の青谷と弥生時代の青谷上寺地遺跡復元図**

そのような不自由はなかったのではないかと。そこには豊かな暮らしがあったのではないかと想像していたからだった。

私のテーマは「海人に限らず移動する人々について探求する」だが、60万年前の旧石器時代からAD600年ごろまでの人々の暮らしに目を向けたい。

## 覚書 (1)

### ——青谷上寺地遺跡フォーラムに参加して——

2015年3月14日「人・もの・心を運ぶ船～青谷上寺地遺跡の交流をさぐる～」に参加した。その概要を報告する。私の関心は古代の“船”のありようであった。



主催は鳥取県埋蔵文化財センター、会場は鳥取市青谷町総合支所多目的ホールで行われた。講演者は深澤芳樹天理大学客員教授の「弥生・古墳時代の船、川を下り、海を渡り、空を翔る」（講演 1）、カヌー大工の洲澤育範氏の「船を造る・船を漕ぐ」（講演 2）、鳥取県埋蔵文化財センターの君島俊行氏「青谷上寺地遺跡の船」（報告 1）そして鳥取県立公文書館の檜村賢二氏「鳥取県内の精霊船—靈魂の乗り物の現状と儀礼—（報告 2）」であった。

フォーラム資料には次のように青谷上寺地遺跡について述べられている（これまでに 5 回のフォーラムが開催されている）。

「精製木製容器（花卉高杯）」「骨角器」「鉄器」「青銅鏡」「玉」といった日本海交流によって運ばれた「もの」を取り上げて多角的に検討を加えてきた。そして青谷は「港まち」だった。「交易拠点としての港湾集落」だった。「船」に焦点を当てその交流の実態に迫る試みである（以上、要旨、その他資料 1～6 もフォーラム冊子による）。

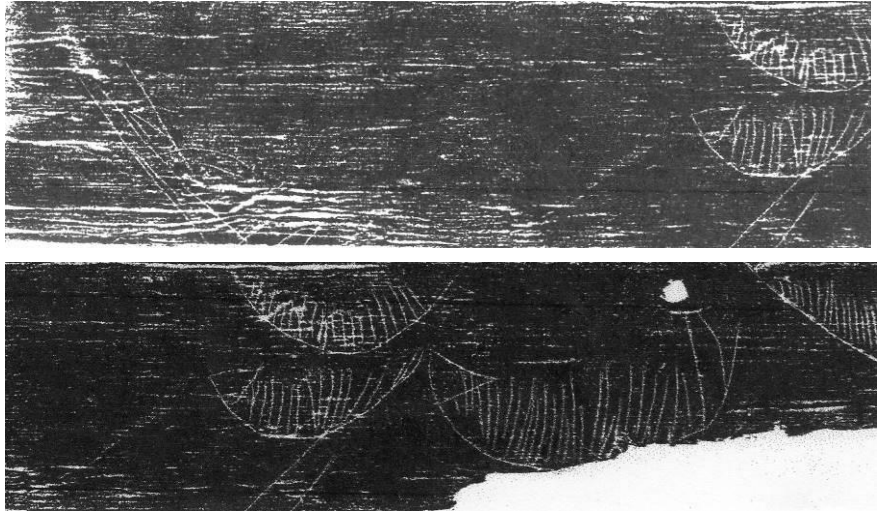
一片の出土した木片から弥生時代の暮らしに迫るのはすごいことだと感じるし、フォーラムの最後に船を復元したいね！との呼びかけがあり参加者の多くが拍手で応えた。

以下の概要は私の関心があり理解したところである。

### <講演 1：概要>

- 1、青谷上寺地遺跡（以下青谷）は船研究にとって今や欠かすことができない。〈資料 1〉
- 2、朝鮮半島と日本列島の間は島が介在することによって、地文航法（ちもんこうほう）で充分航海ができた。
- 3、青谷では魚骨や釣り針、銚（もり）、ヤスなどの出土から青谷の弥生人は漁民であった。
- 4、青谷には、まだ港が見つかっていない。港の類例として、長崎県原の辻遺跡、岡山県上東遺跡がある。

- 5、鉄器利器で描いたと思われる船団の様子が描かれた木片、弥生時代中期後葉<AC200~AD0年頃)の土層から出土。その縦線表現は飛沫防具説を描いていると考えている。<資料2>



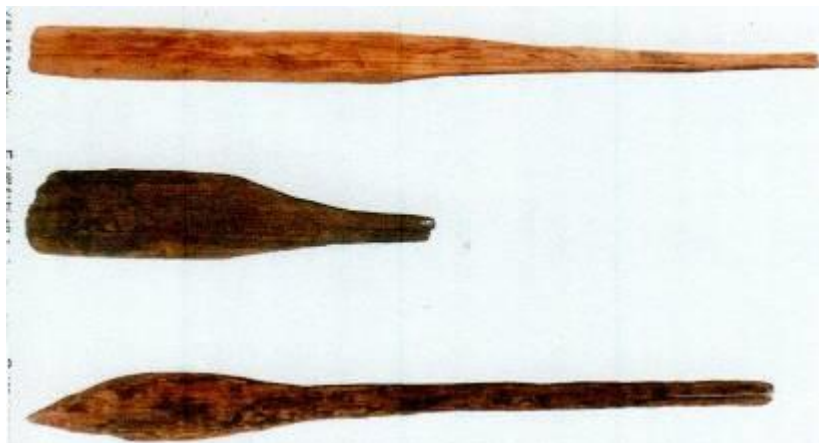
資料2 青谷上寺地遺跡出土の船を描いた板

- 6、縦線表現のある船絵は長崎県辻遺跡、鳥取県妻木晩田遺跡、鳥取県青谷上寺地遺跡、福井県向遺跡、愛媛県の新谷(にや)森の前遺跡、文京遺跡、枝松遺跡、三重県小谷赤坂遺跡、千葉県天神偉遺跡で見つかっている。
- 7、弥生時代後期(AD0~AD300年頃)から古墳時代(AD300~500年頃)にかけて(船絵には旗がなびくが、これは先秦時代からある「ぶつ」と呼ばれた旗で、馬車などの乗物後部にあつて、出行の旗印とした。
- 8、「北史」「随書」の倭国伝には葬送の場面として、小さな輿にのせる他は船上に遺体を安置して陸上で綱を引いて運ぶ風習のあったことを伝えている。

- 9、東殿塚古墳出土の円筒埴輪の絵画は、この葬送船を絵画化したものである。
- 10、舟形埴輪は必ず船の中央底部に旗竿用の孔が空いているので、その遺体運搬用の葬送船を埴輪にしたものである。
- 11、太平洋島嶼部の人々の世界観は海・船を深い関係にある。なかに沖で海と天が接する天際で、あるいは海面の曲率で視野から消えた刹那に、人間の想像力が船を天空に移動させるという。こういった海に生きる人の想像力と大陸起源の出行を示す旗「ぶつ」が日本列島で邂逅して、独自の観念と葬送船を生むことになったのではないだろうか。

## <講演2：概要>

- 1、実際に海に船＝カヌーを浮かべ漕いでいると、弥生時代も現在も海況はさして変わっていないのではないかと想像する。
- 2、カヌーに20～30kgの荷を積み穏やかな移動するのは担ぎ歩いて移動するより容易なことである。
- 3、青谷の丸木舟も縄文期の丸木舟（鳥取市桂見遺跡）もカヌーとしてとらえている。
- 4、櫂＝パドルとは手に持って使う推進具である。青谷はシングルパドルで素材は桑属（約2100年前）桂見のパドルもシングルで素材はヤマグワ（約3000年前）である。
- 5、パドルの使い方①推進力②舵取り③バランスをとる。<資料3>



資料3 青谷上寺地遺跡出土の櫂

- 6、一本の丸太からその部位による密度や重量の違いを見つけ出し、重心の低い、安定感の高い、より安全に航海できる丸木舟を作り出しただろう。
- 7、丸木舟は稚拙な造船技術の船であり、構造船は高度な造船技術の船であるとは思えない。
- 8、船造りの道具として石器があったが、石の目が読めないとできないらしい。材の荒出しは、焼き切りと楔（セツ＝くさび）で、刳（コ＝切り開く、くりぬく）り貫きは焼いた石などで材を炭化させ、石斧や貝斧で削るだろう。
- 9、エスキモーのカヤック文化に触れ、彼らはその地を選んで生き、水圏を自由に行き来する術を創りあげた。
- 10、カヤックも丸木舟も水に浮かべるとグラグラと不安定だ。人や荷物を載せ、丸木船は舟底にしっかりと水を吸わせることにより、安定性や操作性をます。

- 11、西日本地方と大陸の行き来においては積載能力を問わなければ、全長が5m以上の丸木舟で可能であったと思われる。
- 12、シングルパドルの活用でアウトリガーも備えられ、安定性を増す。
- 13、航法として、水上で目的地にまっすぐな道は、まず無い。水は動いている。川の流れ、潮流、海流、対流など。その流れは水の下地形により変化する。そして風。水上では風を遮（さえぎ）る物がない場合が多い。
- 14、身体と体力と五感は自然に打ち勝つために使うのではなく、自然と同調するために使う。
- 15、海に寄り添い生きてきた民なら数世代に渡り航海術を蓄積していただろう。
- 16、船は大きいより小さいほうが扱いやすい。転覆しても船にしがみつき海が穏やかになるのを待つ。それから船を起こし乗り込み航海を続ける。
- 17、膝ほどの水深があれば手軽に移動できる。天候が急変すれば容易に陸に引き揚げることもできる。
- 18、丸木舟は弥生の庶民の足だ。
- 19、カヌーを漕げば分かる。文字や言語を介さずともカヌーは我々に過去を伝えてくれる。
- 20、われわれの知る歴史に登場しない数多くの海人が自由奔放に海を歩き来し、大陸と往来していたのだろう。

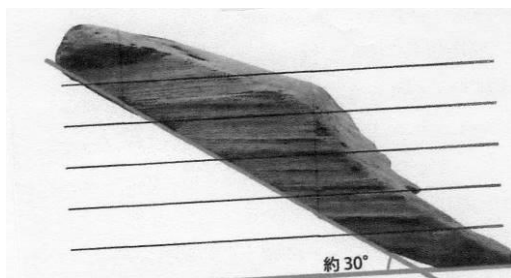
### <報告1：割愛>

### <報告2：概要>

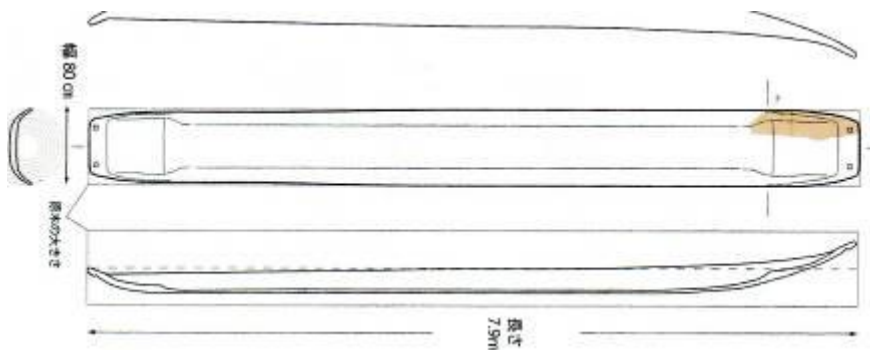
- 1、船の分類は考古学の立場から「刳船（くりぶね）」「準構造船」「構造船」に分類する。
- 2、準構造船は刳船（＝丸木舟）をベースとして、その舷側（船べり）に「舷側版」と呼ばれる板を取り付けて大型化を図った船であり弥生時代に登場した。
- 3、青谷からは約50点の船の破片を出土。2種類の舟形がある。



10、弥生時代後期以降、大型船は準構造船（Ⅰ型船）中・小型船は丸木舟（Ⅱ型船）とされていたのが青谷の特徴である。



資料5 丸木船の木取り



資料6 丸木舟の復元図

おわりに

海人フォーラムに参加して、弥生時代どのような船で海を往き来していたのかと興味を持っていたが、まさにぴったりの青谷でのフォーラムであった。その際、青谷上寺地遺跡展示館を見学したが、弥生人の生活は今の私たちの生活と同じで、のんびりした暮らしだったのではないか。食料を

賄い、絵を描き、音楽を奏でていたようだ。また殺傷痕のある人骨も出土しており時代の混乱の始まりを反映していると思える。

テーマは「人・もの・心を運ぶ」であったが、中でも「心」の交流の意味する範囲は広いものと思われる。交流は相互であり連鎖するものであることから、九州から見た交流、石川から見た交流などについても気にかかる。このようにお互いの視点を意識しながら考えるという意味で谷川健一著「孤島文化論（1972年発行）」が興味深い。その書き出しは次のようである。「日本人は外国をたえず意識しないでは生きられない民族である。そうした日本人の特色が日本人の孤立感から出ており、孤立感とは孤島苦にほかならないことを力説したのは柳田国男であった。孤島の特色は海の彼方にたいする強烈なあこがれである。」・・・「では孤島の閉ざされた特性に対して、開かれた特性はないか。ここに着目した島尾敏夫は日本列島をポリネシア、ミクロネシア、インドネシアなど太平洋の島々と類似するものとしてヤポネシアと呼んだ。」と書かれている。ヤポネシアの視点からすれば、北海道と九州、日本本土と沖縄とをひとつに考えることはできない。北方文化の流入口であった北海道と、大陸系文化の取り入れ口であった九州、それから南方文化に洗われる沖縄とが一緒に論じられるはずがない。」と述べている。日本列島と大陸や南の島々との交流について、より知りたいものだと思う。

海人フォーラム後、月例会に参加する中で学び興味を持つことが多くあった。古代についてだけでなく、古代を考える現代の人々の取り組みについても知りたいと思い2015年5月には志賀島を訪ねることにした。



## 中村栄嗣郎

### 1、廻国塔と六十六部

納経塔の一種。石碑の正面に「奉納大乘妙典 六十六部廻国供養塔」の文字を彫り「天下和順 日月清明」などを添える石塔のこと。下部には廻国した行者の住所氏名と、造立の何月日を記す。多くは自然石で造られているが、普通の墓石と同じものもあり、古くは地藏菩薩像に彫りこんだものもある。

『日本国語辞典』（小学館）には、以下のような解説が載る。

ろくじゅうろくぶ（六十六部）

全国66か所の霊場に一部ずつ納めて回るために書写した66部の法華経。またそれを納めて回る行脚僧。室町時代に始まり、江戸時代には僧侶のほか、鼠木綿の着物に同色の手甲・甲掛・股引・脚絆を付け、仏像を入れた厨子を背負って、鉦（かね）や鈴を鳴らして米銭を請い歩いた者をいう。六部とも称される。

また諸資料に記されたものを拾っておく。

『甲陽軍艦』「六十六部の聖とつれて奥州、出羽、関東その他処々を修行し給う。」

『真俗仏事編 廻国納経』「六十六部の納経の人、今の世甚だ盛んなり。是北条の時政 前世納経のことより起これり。」

「浄瑠璃・神靈矢口渡し」「願うは弥陀の誓願力、六十六部廻国に姿をや

## 2、大乘妙典について

大乘妙典とは法華經のこと。釈尊が涅槃に入られる前の8年間、最後に説かれた教えであるとされる。30歳で悟りを開かれ、それから色々と教えを説かれたが、それが全て最後に法華經を説くための方便であったと法華經の中に記されている[方便品第2]。

古来法華經には不思議な神力が宿るとされ、宗派を問わず重宝された。身近には葬儀のときに上げるお経として、法華經の[如来寿量品 16]と[觀世音菩薩普門品 25]は、日蓮宗だけでなく各宗派に利用されている。

## 3、六十六部廻国行者の信仰はどこからきたのか

江戸中期の国学者天野信景（さだかげ）の随筆『塩尻』によれば、鎌倉幕府の創始者源頼朝（1147~1199）や、頼朝の妻となった北条政子の父親であり、頼朝亡きあと鎌倉幕府の初代執権となった北条時政（1138~1215）は前世で廻国行者であったという。誰が言い出したか分からぬこの言い伝えが、廻国行者の夢となって、生死を賭けた日本全国を歩くお遍路修行が始まったようである。生まれ変われば将軍様であるという、今の世であれば総理大臣を夢みて、5年も6年も旅を続けたのが廻国行者である。噂の発生は鎌倉時代に遡り、関東を中心とした地域で廻国塔が広がっていったようである。

念願を果たした廻国行者は、その達成記念に廻国塔を寄進したのである。だから廻国塔はお墓ではない。六十六か所をすべて歩いた貴重な記念塔である。

『太平記』によれば源頼朝と北条時政は前世に廻国行者であり、全国六十六か所に法華經を奉納して歩いたから、今世「日本の王」となると記されている。

大山寺に上る観光道路が、佐摩線と交わる交差点に大きな石地蔵がある。

「大山分かれ地蔵」とも呼ばれ、嘉永7年（1854）建立されているが、これを寄贈したのは廻国行者である。別名「頼朝地蔵」とも言われ、自分達



写真①頼朝地蔵

の夢である頼朝公の千年供養として、廻国行者が建立した地蔵である。

#### 4、何時ごろから始まったのか

古くは室町時代から六十六部の全国行脚が始まっているが、江戸中期の元禄の頃から盛んとなり明治に入るまで続いた巡礼修行である。初めの頃は僧による専門集団であったが、のちに一般庶民が加わって六部行者となった。

#### 5、山陰の廻国霊場

六十六部行者が山陰で訪ねて歩いた神社仏閣は、石見の南八幡神社、出雲大社、隠岐の焼火（たくひ）神社、伯耆の大山寺、因幡の宇部神社が該当する。法華経を奉納して歩く先は、仏教でありながらお寺ではなく、全国六十六か所の一の宮が多かった。

しかしながら満願達成の廻国塔は、神社にはない。彼等が歩いた道中のお寺さんの境内に置かれているか、地区の観音堂に置かれていることが多い。廻国塔探しをするときには、神社は外して探るのが早い。

## 6、米子市内と近郷の廻国塔

米子市内では大山寺が法華経を納経する霊場であったため、淀江の小波から佐摩・尾高 箕蚊屋周辺の地域に廻国塔が多い。米子市内から箕蚊屋周辺に17体、淀江で5体、日吉津で2体確認できる。

## 7、廻国行者の関所札

徳川幕府の寺請制度のもとでは、原則的に自由な移動は禁止されている。しかし行者は特定の会所に所属し、その支配下に入ることで、ある程度自由に巡礼できる特権を得ていた。一般的には六部行者は、上野寛永寺、京都仁和寺、空也堂などが元締めとなり、その免状を貰って廻国巡礼を行った。伯耆、出雲の廻国行者は地元の菩提寺から証文を貰い、その証文には自分の名前と住所、廻国行者であること、しかもどこで行き倒れても、自分の身柄は当地で葬って欲しい、決して国許に遺骨など送ってもらわなくてもよいという一文を添えて、身分証明書の代わりとした。これが関所手形となる。

## 8、廻国札

江戸時代に廻国巡礼が一部の専門集団から庶民化すると、法華経を書写

したものの代わりに、お札が使用されるようになる。「廻国行者札」と呼ばれ、中央に「奉納大乘妙典日本廻国」等の文字が書かれ、上部左右に「天下泰平」と「日月清明」等の文字。廻国塔に刻まれている文字と同じである。すべて木版で刷られ、この木版に人名を墨書した札を行者は持参する。旅先の神社仏閣に納め、宿をお世話になった人々にお札を配って歩いた。宿を提供したある家は、100年たつて天井裏から山のようにこの札が出てきた例もある。

## 9、廻国塔の種類

廻国塔には3つの種類がある。

一つは廻国行者が満願達成の暁に記念として建立する、最も一般的な廻国塔。

二つ目は廻国巡礼の最中に、どこかで行き倒れとなって命を亡くした行者の供養のためと、廻国の功德にあやからんがために、行者の倒れた地区の農民達が協同で廻国塔を建立する場合もある。

三つ目は廻国行者に宿や食事を無料で提供した記念に廻国塔を建立する場合もある。これは廻国行者に無償で奉仕することで、廻国行者と同じ功德にあやかることが出来るとする法華經の教えに因る処が多い。

## 10、六部宿

六部を泊める宿も、六部と同じ功德が頂けるという法華經の信仰から、



**写真②大山寺とやま旅館の廻国塔**

あちこちで六部宿が設けられた。大山寺の兜山（とやま）旅館の門前には六部三千人を宿泊させたという記念碑が残っている。

「豆腐屋 高見茂兵衛」と刻まれ、半世紀にわたっての六部行者三千人の宿泊記録は、法華經の善根を積むという信仰が並々ならぬものであったことが推察される。

また名和町上木料の村の墓地に、土地の大庄屋であった林原家のお墓がある。この墓地に廻国塔が二つある。半ば土に埋もれて下のほうが見えにくくなっているが「六十六部僧二百人一宿供養 為二世安楽」「日本廻国僧六十六人一宿供養 為父母菩提」と刻まれ、木料村 林原次良兵衛という名前も判読できる。

宝永三年（1706）の廻国塔である（写真③）。  
現在林原家ではお盆のときに、この廻国塔が話題になることがあっても、何の石塔なのか誰も分からないと語っておられたことを、思い出す。



**写真③上木料の廻国塔**

また佐摩、今在家で六部宿を提供した廻国塔を見ることもできる。まもなく大山寺という地点で、宿を提供してもらった廻国行者には望外な喜びがあったに違いない。それだけ熱心に法華経の功德を、六部行者から耳にしたことに違いない（写真④）。



写真④今在家の廻国塔

## 11、西伯耆各地の廻国塔

### ①大山町国信地蔵と尾高観音寺の六地蔵

大山町国信墓地は村の堤の横にある。その墓地の一角に蓮座に立つ石地蔵二体がある。

高さ1メートルをこす石地蔵で、光背に「奉納日本廻国大乘妙典之供養」「宝永七朱夏(4月)廿日 浄安宗智敬白」と読める。側面に赤松村 五三右門とある。横の一体にも同文字を記し「願主 月峰宗心」と読める。人名だけが異なる。同じ日付で二体の廻国塔は珍しい。一緒に廻国巡礼した行者であったことが伺える。1710年は、伯耆に廻国塔が始まる初期の頃のもので、二人とも専門の僧であったようだ。大山寺の地蔵信仰の影響もあると思える。

尾高観音寺の六地蔵

また尾高観音寺の六地蔵の光背に「正徳二年・施主月峰円志」の文字が



かすかに読み取れる。正徳二年は1712年であり、国信と尾高の二つの廻国塔は、ほぼ同時期のものであり、どちらも地藏菩薩に「奉納大乘妙典日本廻国」と刻んでおり、「月峰」という法名からひょっとして同一人物の可能性も考えられる。



写真⑤大山町国信地藏



## 写真⑥尾高観音寺の六地藏

### ②尾高観音寺の廻国塔

尾高観音寺にもう一つ廻国塔（写真⑦）がある。これは山門の横に立っていて分かりやすい。

寛政4年（1792）8月とある。地藏菩薩の廻国塔から80年ほど下る。願主は「尾高村・林蔵 脇願主 備前・朋三郎 越後・善吉 出雲・幸松 江戸・龍助 出羽・仁助」となっている。廻国行者が一人ではない。尾高村の林蔵が目的達成の記念に、仲間の廻国行者達も協力して林蔵の廻国塔を建立したことが伺える。1792年林蔵が満願達成したことで、同行した行達らが祝って建立を手伝ってくれたようである。林蔵は人望家であったと推察される。



写真⑦尾高観音寺の廻国塔



写真⑧分けの茶屋跡の一字一石塔

### ③大山・榎原の分けの茶屋跡の一字一石塔

寛政9年（1795）に建立された一字一石塔である。法華経6万余字の一語一語を石に書写したものを、この塔に埋めた。廻国塔とは異なるが、同じ法華経の功德にすがった信仰の一形態である。願主の名前をみると、尾高村の林蔵が仲間達と一緒にこの一石塔を寄進したことが読み取れる。単に廻国塔で終わっていない、廻国行者の徳積（とくずみ）奉仕である。

#### ④中福万の『供養さん』

中福万の墓地には『供養さん』と呼ばれる廻国塔が残っている。地元の大庄屋であった中曾家が代々祀ってきた。毎年7月7日の七夕の夜、村の大人や子供達は香華を供えて、この廻国塔を拝み、無病息災を祈って、中曾家と高田家から接待を受けるお祭りが今も健在である。

廻国塔には安永2年（1773）6月江戸京橋豊町 願主盛真となっており、施主は当村茂平と刻まれている。廻国塔は福万村の住人ではなく、江戸の行者が行き倒れになって、村の茂平という人物が建立した廻国塔である。江戸の行者は、ひょっとして医術の心得のあった人物で、村人の病気を治癒した善行があったのかも知れない。それが言伝えとなって、この廻国塔を拝むことで無病息災にあやかることができるという信仰に繋がったと推察できる。茂平は中曾家の先代であろう。



写真⑨中福万の「供養さん」

### ⑤日吉津・石田・中間の廻国塔

日本廻国の巡礼修行は、今日では想像もできない苦行であったと推察される。皆死を覚悟して旅立ったと思われる。日吉津の海川、尾高の傍の石田、淀江町中間の廻国塔は。いずれも他国の行者の名前が刻まれている。淀江町中間の廻国塔は文化元年8月に村人が造立したもので、石碑面には「豊後国佐伯郡床木村行者 全指 於当所相果」と刻まれている。あと一月もすれば九州に帰れることを夢みながら、夏の病に倒れた行者を哀れんで、村人達の善業で建てられた供養塔であろう。

尾高の石田村の廻国塔は立派な造りである。元文2年建立「岩崎村塩田郡（福島県いわき市）大石理左衛門 此之所寂死 造立村中」となっている。遠く奥州の地から歩いて山陰まで来て、尾高で行き倒れた行者を供養のため村人が建てた廻国塔である。昭和10年には篤信家によって玉垣が造られている。昭和の初期でも廻国塔の信仰はまだ風化していなかったと思われる。



写真⑩の1 日吉津の海川墓 写真⑩の2 石田の廻国塔

写真⑩の3 淀江町中間の廻国塔

### ⑥赤井手の廻国塔

赤井手に文化7年（1810）尾高村赤松喜平と刻まれた廻国塔がある。石碑面には「従文化二丑至七午六年」と記されている。文化2年から7年の午年にいたる6年間の巡礼修行であったと読める。上部が折れて破損し、田んぼの中に忘れられたように他の石地藏と一緒に並んでいる。振り返る人も今はいなくなってしまった。探すのに一苦勞であった。

廻国行者は大体5年から6年かけて全国を旅して歩いたことが、この石碑から伺える。



写真⑩赤井手の廻国塔

### ⑦赤崎・花見瀧墓地

赤崎・花見瀧墓地の東側入り口に巨大な石地蔵が祀られている。河原地蔵と呼ばれている。この地が化粧川河口付近の河原にあり、その地に建てられた地蔵が名前の由来。

琴浦町教育委員会の説明では、町指定の保護文化財となっている。高さ4.3メートルの石像で、建立は延喜4年（1747）西譽求方（法名）という道信者が発願主となって、廻国供養仏として建立されたと説明がある。廻国供養仏と銘記されているので西譽求方が廻国行者であったことは疑いない。河原地蔵の脇に三界万霊塔が一体ある。この碑面に西譽求方の名前が刻んであり背後の墓地の中に、草のなかに埋もれた状態で自然石に「南無阿弥陀仏」と刻まれている。「天下和順 日月清明 日本廻国 西譽求方」と読める。廻国塔というより、彼のお墓かもしれないと思う。河原地蔵とともに、それを献上した廻国行者の西譽求方と彼の廻国塔と一緒に説明してあげると、残念に思う。貴重な赤崎の文化遺産である。



写真⑫の1 赤碕の河原地蔵



写真⑫の2 西譽求方と彼の廻国塔

### ⑧大山町福尾の廻国塔

大山町福尾の墓地には立派な廻国塔がある。台座2段の3段になっていて、上段は自然石で「寛政5年正月9日 奉納大乘妙典中塚 日本廻国」「因州鳥取又六 春山浄翁信士 世話人 当村甚兵衛」と刻まれている。隣には同じ大きさの自然石で「法華経」と刻まれていて、同じ人物が造立したものと分かる。日蓮宗の「題目塔」ではない。廻国を達成した悲願に併せて建立されたものに違いない。法華経に対する信仰の深さを感じさせる廻国塔である。



写真⑬大山町福尾の廻国塔



写真⑭岸本町大原の廻国塔

### ⑨岸本町大原の薬師堂

岸本町大原の林原孫兵衛が享保6年（1721）造立した廻国塔が、薬師堂の傍にある。記録の明確な廻国塔として、米子地方の代表的なものの一つである。正徳6年（1716）から2年8ヶ月かけて廻国を達成している。果たして全国を全て歩いたのかわからない面もあるが、彼は自分が歩いた旅先の『宿日記』を残している。どこの土地で誰の宿に世話になったか、詳しく記録している。この旅日記によれば、大山の兜山旅館にも立ち寄っている。

## 12、廻国行者はいつごろまでであったか

白衣を着て厨子を背負った六部の姿は、大正・昭和の初期までで終わる。今では風化した石碑にしか語るものは残っていない。廻国塔は歴史の中に



埋もれてしまった。

廻国塔年代と地域[米子市周辺]

旧暦	西暦	観音寺	梅輪寺	赤井手	石田	長砂	日下	日原	二本木	一部	福万	福市	安倍	大徳	日吉津	上泥	北尾	西原	中間	合計
元和	1681~1690																			
元禄	1691~1700																			
宝永	1701~1710																			
正徳	1711~1720	●																		1
享保	1721~1730																			0
天文	1731~1740				●					●										2
寛保	1741~1750																			0
宝暦	1751~1760								●						●					3
明和	1761~1770									●	●				●					3
安永	1771~1780					●				●	●							●		4
天明	1781~1790						●	●						●						4
寛政	1791~1800	●																		1
享和	1801~1810			●															●	2
文化	1811~1820																			0
文政	1821~1830																			0
天保	1831~1840		●										●							2
弘化	1841~1850											●								1
嘉永・安政	1851~1860																			
文久・明治	1861~1870																			
合計																				23

## ——洞ノ原地区の西側丘陵と環濠について——

内田正英

### はじめに

国の史跡「妻木晩田遺跡」は、東西 2km、南北 1.7 km、面積 170ha にも及ぶ。遺跡の西端、洞ノ原地区西側丘陵からは環濠の一部が検出された。この環濠については、

「ムラが作られ始めた頃、西側丘陵には環濠が掘られたが、その後丘の上に建物が作られた頃には埋まっており、何のために掘られたのか謎である。

環濠は、妻木晩田の山に沢山の人が住み始めた約 2000 年くらい前に掘られたもので、丘陵を囲むようにぐるりと円形に巡っており、その直径は約 65m である。壕の規模は、幅約 4m、深さ約 2m もあり、一度中に落ちると簡単には這い上がることができない。

この環濠の内側には、現在、竪穴住居や高床倉庫を復元しているが、これらは環濠が埋まってしまった後に建てられた建物である。」

とされている。

この洞ノ原西側丘陵と環濠について考えてみたい。

## 1 環濠

『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』（淀江町教育委員会）（以下「調査報告



**妻木晩田遺跡洞ノ原地区から日本海を望む**

書」という)には、環濠に関し次のとおり記録されている。

「環濠は、1期（弥生時代中期後葉）に掘削され、8～9期（弥生時代後期後葉）には機能を失い、周辺利用に伴い自然埋没した。

環濠は、集落域を取り囲むものではなく、集落の縁辺の監視、警戒の目的で設置されたと想定したい。

環濠地区の性格を窺わせる遺構として、環濠の内側では、物見など特殊な役割が想定される建物跡(DHSB11)、狼煙場と考えられる焼土遺構、旧表土上面に備えられた礫石（68個）などが確認された。」

## 2 環濠と集落の関係

環濠と集落とのかかわりについては、以下のような時間的な段階が想定されている（前記調査報告書）。

### **第Ⅰ段階（弥生時代中期後葉）**

まず、洞ノ原地区の丘陵先端に環濠が形成される。本格的な集落形成は始まっておらず、また、洞ノ原地区の直下に同時期の晩田遺跡が所在する。

### **第Ⅱ段階（弥生時代中期末）**

洞ノ原地区では引き続き環濠が維持され、墳丘墓の発端として東側丘陵に1、2号墓が造営される。

### **第Ⅲ段階（弥生時代後期前葉）**

集落の形成が始まったと判断される。洞ノ原地区では継続して環濠は維持されるが、この段階で、洞ノ原墳墓群の築造は終了する。

### **第Ⅳ段階（弥生時代後期中葉）**

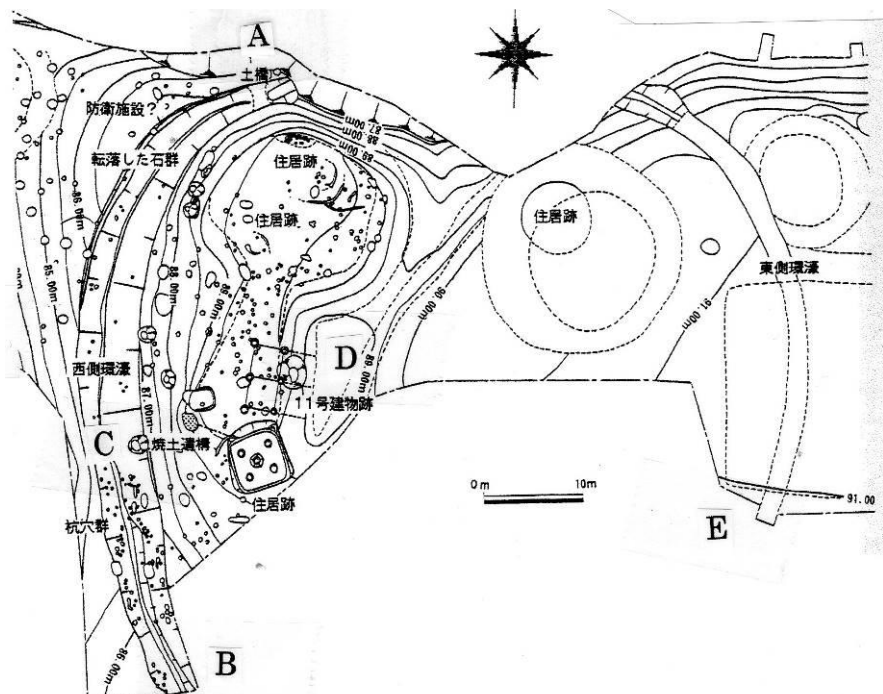
環濠は次の8期（弥生時代後期後葉）に埋没するため、この段階で機能を停止するものと考えられる。

## **3 西側丘陵について**

以上の調査報告書から想定されることは、洞ノ原西側丘陵は、妻木晩田の丘の上に人びとが住み始めるより以前から、麓の周辺に暮らしていた人たちにとっての、古くからの特別な意味を持った場ではなかったか、ということである。したがって、この段階では環濠は勿論まだ掘られてはいない。

それは、妻木晩田の丘に人びとが住み始める弥生中期後半より以前のことで、人びとが水稻農耕をはじめてから程ない頃からのことであったのではないかと思える。それまでの縄文時代から続いてきた狩猟採集の暮らし

に代わって、水稻耕作を取り入れた農耕の生活が定着するとともに、春に



資料 2 「美木孝田遺跡発掘調査報告書」  
(淀江町教育委員会) から転載

第 2 節 美木孝田遺跡と西信養生堂発達の動態

時期	穀祀頭・小政石清水		妻木山・湖ノ原		妻木新山・仙谷		松原屋敷	時期合計
	居住	墳墓	居住	墳墓	居住	墳墓		
1	貯蔵穴出現	貯蔵穴出現	貯蔵穴出現	貯蔵穴出現				0
2	住居跡初現、円形	貯蔵穴減少	貯蔵穴減少	貯蔵穴減少				1
3	円形	貯蔵穴遺構			住居出現 木製円形、隅丸方形	3		5
4	円形				住居増 円形、楕円形	16		21
5	円形		住居出現、円形	円形・隅丸方形	住居減少 木製円形	9	増長出現	19
6	円形		円形・隅丸方形	住居形跡多様化	円形、木製円形	11		21
7	住居増 円形主体、隅丸方形出現	円形	住居形跡多様化	住居増、形跡多様化	住居増 木製円形	9	住居出現	44
8	住居増 大塚住居、大塚型物 (同型付大塚建立柱遺物) 住居形跡多様化 S45で後汲盛瀬 遺構新発見	円形	住居形跡多様化	住居増、形跡多様化	住居増 木製円形	9		
9	住居数拡大 大塚住居 (41.76㎡他)	住居数拡大 大塚住居 (41.96㎡他)	住居数拡大 隅丸方形形跡半散 S119で増築出土	住居数拡大 大塚住居 (44.96㎡他)	住居増 住居形跡多様化 大塚住居 (34.56㎡)	14	住居増 隅丸方形形跡主 S111から角縁柱 大塚住居 (33.12㎡)	97
10	住居形跡多様化	住居減少 隅丸方形	住居減少 隅丸方形	住居減少 隅丸方形	住居減少 隅丸方形形跡主	5		28
11	住居小増化 住居小増化 (S131)	住居小増化 住居小増化 (S131)	住居小増化 住居小増化 (S131)	住居小増化 住居小増化 (S131)	住居減少 大塚住居 (38.48㎡)	3	隅丸方形	37
12	住居減少 住居小増化 住居小増化 (S131)	住居減少 住居小増化 住居小増化 (S131)	住居減少 住居小増化 住居小増化 (S131)	住居減少 住居小増化 住居小増化 (S131)	住居減少 大塚住居 (34.24㎡)	5	隅丸方形	22
13	住居減少 方形	住居減少 方形	住居減少 方形	住居減少 方形	方形主、小増化 土器陶磁土質 (SK156)	3	方形	11
計	85	137				78		313

第 5 表 妻木孝田遺跡の推移 (総非灌作園を一部改変)

ったのではあるまいか。

妻木晩田の周辺の人たちにとっての神名備山、それはおそらく孝霊山であったに違いない。洞ノ原西側丘陵は、こうした山の神を祭るムラ人たちにとっての神聖な祭りの場所ではなかったかと思えるのである。

洞ノ原西側丘陵がムラの祭りの場ではなかったかと思われる理由について考えてみたい。

第1には、洞ノ原地区からは東側丘陵も含めて、孝霊山に隠れて大山は全く見えず、孝霊山はその両袖に2つの峰を脇侍のように従えて、神名備としては最も荘厳にして美しく眺望できる場所であることである。

第2には、西側丘陵には、現在米蔵として高床倉庫が復元されているが、この辺りからプラントオパールと呼ばれる物質が発見されていることである。プラントオパールは、イネ科植物の細胞中に取り込まれたガラス質の物質が、土壌中に残ったものとされている。

これは、西側丘陵で毎年秋に執り行われた豊年感謝の祭りに、その年の収穫物としてイネなどの農作物が繰り返し奉供された結果であると考えられるのではあるまいか。

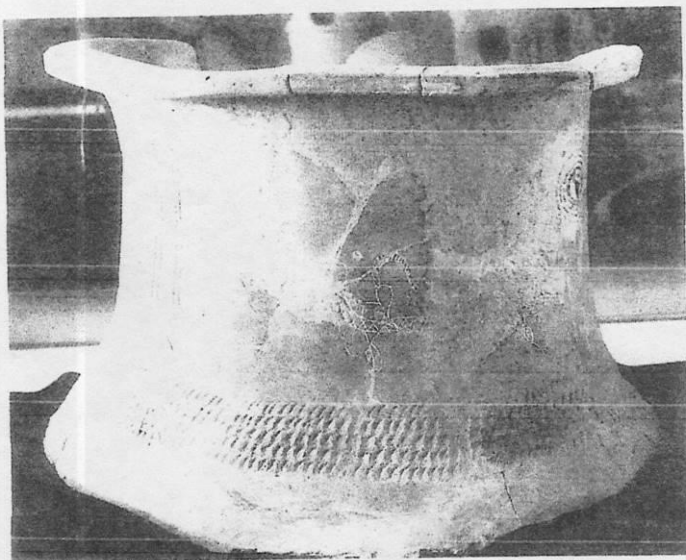
## 4 稲吉角田遺跡出土の土器壺について

上記のほかにも、西側丘陵の意味を考える上で見過ごすことの出来ない重要な発見がなされている。それは、妻木晩田遺跡から程ちかい稲吉角田遺跡から出土したとされる大型の土器壺の存在である。

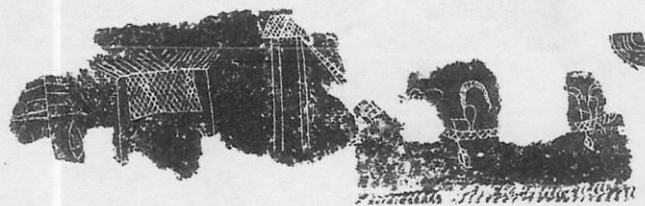
「米子市淀江町の角田遺跡から1980年、胴径58cmという雄大な中期の壺の肩部をめぐる絵巻物風のへら描き絵画が見つかりました。接合関係の間違いないものだけでも、舟、建物2棟、木があり、ほかに接合はできないが、シカと太陽を示す同心円文があります。」（1994



年『ふるさとの古代史』山田一仁)



へら描き絵画のある弥生土器（淀江町角田遺跡）



土器に描かれた絵。左から樹木、切妻住居、高床建物、船、太陽。

### 資料3 （『ふるさとの古代史』より転載）

この壺は、土地改良に伴う調査から偶然発見されたもののようであるが、現在上淀白鳳の丘展示館に所蔵・展示されている。

この壺に描かれている線刻画について、私は西側丘陵に実際に存在した風景をもとにイメージされ、麓のムラ人によって土器に描かれ焼成された

ものではないかとかんがえている。

壺に線刻されている舟は、洞ノ原西側丘陵に建てられていたと思われる物見櫓風の高い建物に向かって漕がれている。おそらくは、淀江潟に向かって漕がれていることをイメージしたものであろう。

「美保関と淀江とは古来深いつながりをもっている。美保関港が日本海沿岸での最重要港であった歴史からして、淀江港というものの存在も、地形、地理からみて今は水田化しているが、古代淀江港は港湾としてすぐれた港であらねばならない。」(1981年「鳥取県淀江町・宇田川地区土地改良に伴う調査概要」佐々木謙)

このように、西側丘陵には、海を望む物見櫓が立ち、その丘の麓の淀江潟には交易船の出入りする港があったに違いないと思われるのである。

壺の左端の木の枝に大きな果物風の絵が描かれているが、これは銅鐸がぶら下げられているのではないかと私は考えている。

以上述べたように、西側丘陵は稲吉角田遺跡から出土した土器壺に描かれた線刻画から考えても、弥生時代中期頃の古い時代からムラ人たちにとって、特別の意味を持った場所であったと考えられるのである。

## 5 環濠の築造

ムラ人たちにとって西側丘陵が特別の意味を持った場所であったとして、何故弥生時代中期後葉に環濠が掘られることとなったのであろうか。

調査報告書によれば、環濠の掘削は弥生時代中期後葉、そして墳丘墓1、2号墓の築造は弥生時代中期末とされている。時間的に若干の差はあるものの、両者の造営はほぼ同時期に行われたとされている。

これらの点に関して、誤解を恐れずに言えば、古くから続けられてきた

銅鐸を用いた祭祀から、新しく人びとの心を占め始めた墳丘墓の祭祀への移り変わりという大きな時代の流れの中で、ムラ人たちの精神風景を2分した変化と相克があったのではあるまいか。

弥生時代に入って、水稻農耕が定着するにつれ、家族を単位とする古くからの狩猟採集の暮らしと異なり、水稻農耕に伴うムラ人たちの協同作業が必然的に必要となってくる。多くのムラ人たちにとって、統制のとれた協同作業を進めるためには、集団を統率する強いリーダーシップが必要となることは明らかである。それは、ムラにおける首長の誕生である。

そして、時代とともに社会の階層化が進み、生前ムラを統率した首長は、亡くなると神になったのである。

おそらくは、この時期、妻木晩田のムラにおいても古くからの銅鐸を用いた祭りから、墳墓築造による祭祀へと移り変わる過程にあったのではあるまいか。

こうした過渡期にあって、ムラ人の総意として、2分した価値観の併存を容認し、東側丘陵にムラ長の墳丘墓の築造を受け入れるとともに、他方、旧来からの祭祀の場であった。西側丘陵にも環濠を設けることによって、山の神への尊崇も守り続けるということになったのではあるまいか。

やがて、銅鐸の祭りの記憶は薄れていく。それに伴って、ムラ人たちから環濠の意味と存在は次第に忘れられていった。そして、妻木晩田の丘に最も多くの人たちが住む頃、弥生時代後期後葉から終末期にかけて、西側丘陵にも人びとが住み始める頃には、環濠は埋まっていったものと考えられる。

## むすび

妻木晩田の丘には、弥生時代後期から終末期にかけての約300年間に亘り、人びとが暮らしていた。この時期は、所謂魏志倭人伝において「倭国乱相攻伐暦年」と記された時期と重なっている。

洞ノ原西側丘陵は、それ以前の古くから麓の人たちにとって特別の意味をもった場所として受けとめられていたと考えられる。

当時、倭と呼ばれていた古代日本は、それまでの小さなムラ単位の社会から、地域におけるムラの統合が進み、次第に部族的社会として大きくまとまっていくという流動的・変革的な時代であったかと思える。やがて、部族間の政治的連合を経て、国家として統一されていくという古代日本の国家形成に向けて、激動の過程にあったと考えられる。

こうした時代の大きな流れの中であって、妻木晩田のムラもまたその渦流から遁れることはできず、いろいろな形で影響されていったことであろう。

洞ノ原西側丘陵における環濠を含めた遺構は、古くから人びとを支えてきた素朴な精霊崇拜の跡を残しているものと考えられる。そして、東側丘陵における墳墓の築造は、新しい祖霊崇拜へと移り変わっていったムラ人たちの営みの軌跡ではあるまいか。それは、やがて墳墓の築造がより政治的な意味を深めていく古墳時代へとつながっていく、新しい時代の精神風景の展開を予想させているようにも思えるのである。弥生時代後期中葉以降、墳墓の築造が仙谷丘陵に移るに伴い、洞ノ原地区西側丘陵と環濠の意味と存在は、次第に人びとの記憶から遠ざかり忘れられていったのである。

# 古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察

Consideration about the weather and the geography of ancient  
in west Houki from literatures.

2015年8月29日発表

八尾正己

## 【1】はじめに：目的

歴史は生産力と生産関係の矛盾により進歩するという考えに基づいて、唯物史観の概念が提唱された<sup>1)</sup>。唯物史観では、経済活動のあり方とその変化が、歴史を発展・前進させる原動力であるとする。すなわち、歴史は神の意志や人間の理性によってではなく、「物」によって動くと考えられた。

では、「物」とは何かを再考すると、それはエネルギーに関連するものと理解され、中世までは人力がこれを担っていた。そしてこのエネルギーは産業革命によって石炭、石油へと変遷したわけであるが、それまでのエネルギーであった人力は食料によってその存在が保証され、鉄器や木材などの利用によってその効率が飛躍的に向上する。

ここで食料の生産力に注目すると、生産力は気象や地理的要因に大きく左右され、気象と地理の両者にも相互関係がある<sup>2)</sup>。従って歴史を理解するためには当時の地理的背景を考慮する事が不可欠とも思われる<sup>3)</sup>。

西伯耆の古代史を考える場合にも同様で、まずは当時の気象や地理的環境を念頭に置きながら様々な歴史考証を展開する必要があると実感する。そこで当時の地形に思いを巡らせると、現在の地形とは大きな乖離があることは容易に想像出来るが、それを全て解決する資料は十分であるとは言いがたい。

しかし、現在までに行われたボーリング調査や、氷床の分析、あるいは古文書や伝承などをもとに古地形の再現がある程度可能なものとする。

最初に現在の西伯耆の地形を概観すると、米子平野は、概ね以下の山々



図 1: 西伯耆地形の概観

に取り囲まれている（図 1）。

- 西側 : 行者山、ドウド山、要害山、母塚山、メイゲ平山
- 南側 : 手間要害山、峰山、越敷山
- 東側 : 壺瓶山、孝霊山、鍋山、釜戸山
- 南東 : 大山およびその周囲の山々

さらに平野の内部には微高地や台地（長者原台地・大谷大地など）が存在し、日野川をはじめとする各種河川が流れている。山岳部は現在も古代も大きな差異は無いかもしれないが、海岸線、河川、平野部の地形はかなり違った様相を呈していたものであったと推測される。

現在の地理的環境を念頭に置きながら、渉猟可能な文献等から弥生、古墳、飛鳥。奈良時代を中心に当時の西伯耆および関わりのある地域の主だった古地形の再現を試み、今後の西伯耆の古代史考証に何らかの寄与が出来ればと願う次第である。

## 【2】 調査項目および結果

西伯者における全ての時代の全ての気象変動、古地形を検索しそれを再現することは不可能に近いと思われる。ここでは歴史学的に重要と思われるものについてのみを対象とした。

### 1：古代の気象変動および海水面変動

#### (1) 気温変化

温度計による計測が始まる以前の長期にわたる平均気温の記録は、年輪の幅やサンゴの成長線、氷床コアの同位体など様々な手法から得られている。これらの手法で、過去 2000 年間の北半球の気温変化が再現されている (図 2)。

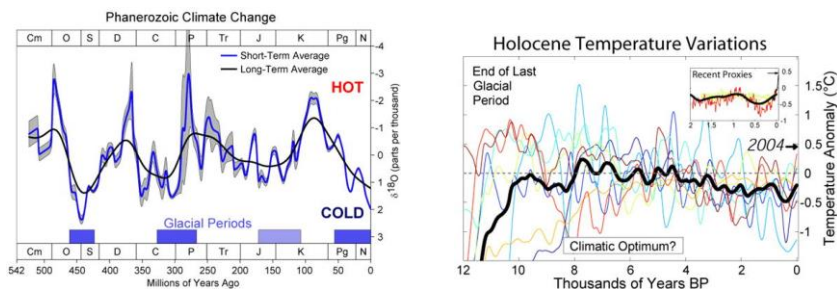


図2: 過去の気温変化 (The main figure shows eight records of local temperature variability on multi-centennial scales throughout the course of the Holocene, and an average of these : thick dark line).Wikipedia: 過去の気温変化より引用

これらを元に気温変化の長期的推移を見ると、温暖期では $+1\sim+2^{\circ}\text{C}$ と高く、寒冷期では $-1\sim-2^{\circ}\text{C}$ と低くなり、氷河期における平均気温の変化は $-3\sim-6^{\circ}\text{C}$ 程度低くなると言われている<sup>4)</sup>。

このような気温変化の長期的要因としては、地球の公転や、太陽の銀河系内での公転に関係しているとされる。また短期間での気候変化は火山活動に拠るところが大きい。これには地震→火山噴火→冷夏というサイクル

があり、例えば 864 年の富士山噴火（貞観大噴火）の後、869 年に貞観地震が発生。その後、「伯耆国飢」と言う記載が『三大実録』にも見られる。また 1707 年 10 月 28 日に宝永地震が発生し、49 日後に富士山が噴火（宝永大噴火）し、1731 年から享保の大飢饉となった。

このような気温変化は、海水準や作物収穫に大きく影響する。過去 30 年間の平均気温より  $-0.2 \sim -0.6^{\circ}\text{C}$  平均気温が下がると冷夏とされ、冷夏が 3 年連続すると不作になる。平安時代初頭は、伯耆国でも凶作の記録が散見されている<sup>5)</sup>。

## (2) 日食

気象変動の 1 つとして、日食<sup>6)</sup> は注目すべき変動の 1 つであると考えられる。これ自体は極めて短期間の変化であるため気温や他の気象に実質的影響を及ぼすことは極めて少ない。しかし、天文学的知識の乏しかった当時の古代人への心理的影響は計り知れないものがあつたと推測される（表 1）。

わが国では、863 年（貞観 4 年）から、日食や月食の予報に進歩が見られる宣明暦が施行されているが、それ以前、特に推古朝以前は、日食が起るといふことは天子の不徳の致すところとして非常に重視され、日食の日は廢朝とされたとも言われている。

また、247 年～248 年頃の妻木晩田遺跡およびその周囲の人々が、直接皆既日食を経験していた可能性はかなり低い事が確認された。

## (3) 海水準変動

現在のような大陸の形が形成された 200 万年前以降は、平均気温の変化によって海水準が変動している<sup>7)</sup>。主に海から蒸発した水（ほとんどは北半球）が氷床として固定され成長する時に海水準が低下する。氷床が後退するときに融解水が海洋に供給されることによって海水準が上昇する。また、現在のグリーンランドと南極の氷床が溶けると、海水準はおよそ 80m 上昇すると予測されている。



海水準変動については多くの報告があるものの、地域によってその値が異なっている<sup>7) 8) 9) 10)</sup>。おそらく、沖積、浸食、洪水等の他の要因が複雑に関与しているためと考えられるが、以下に凡その値を示す。

### ①海水面の時代的推移

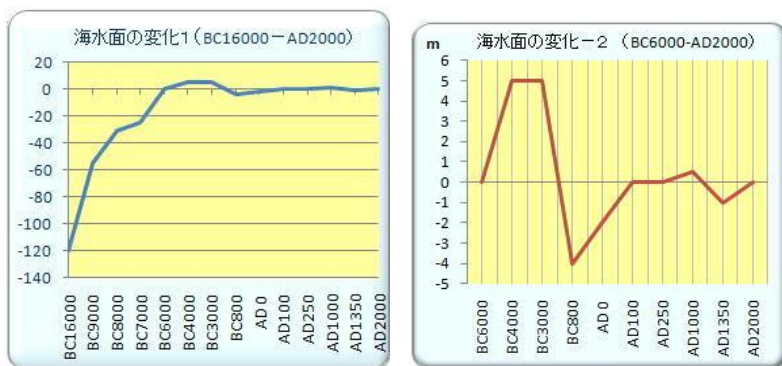


図3：海水面の時代的推移

BC13000	-120m	ウルム氷河期の最盛期が終わる。
BC10500	-120m	最後の寒冷期（オールデストドリアス）。その後海水面は急速に上昇。縄文海進が進む。
BC9000	-55m	徐々に上昇。
BC8000	-31m	徐々に上昇。
BC7000	-25m	徐々に上昇。
BC6000	±0m	現在の海拔付近になる。
BC4300	+4~5m	縄文海退の最盛期。 (一説には10m上昇との説もあるが、しかし実際には4~5m前後と考えられている)
BC3000	+4~5m	海水面の大きな変化は無く、高位で停滞。この後、縄文海退進む。
BC1500	±0m	現在の海拔付近になる。

BC 800	-4m	縄文海退の最盛期
紀元前後	-2m	弥生小海退
AD 700	-1m	ロットネスト海進
AD1000	-0.5m	さらに海進が続く。
AD1100	+0.5m	平安海進。 『更級日記』で真野の長者の家（現千葉県市川市）が水没した原因はこの海進であるとされる。
AD1350	-1m	パリア海退
AD2000	±0m	現在の海水面。

## ②海水準変動の影響

当然の事ながら海水準の変動は地形に多大な影響を与え、居住者の生活範囲を著しく限定する。また一度海水に浸った平地は、海退後も数百年は湿地の状態が続くとされている。

例えば目久美遺跡ではBC400年頃からBC100年頃にかけて水田の跡が見つかっているが<sup>11) 12)</sup>、水田利用は海拔-1mの深さに在ったと推測される。目久美遺跡が繁栄していた時期は、縄文海退～弥生小海退の時期に付合し、海水面は-2～-4mであった。また発掘された農耕具は木製品で、これは湿地帯であったと考えられる根拠ともされている。

## (4) 地震・津波

山陰地方における地震の記載は極めて多数存在するが、津波の記録は過去1300年間に9件のみが確認された<sup>13) 14) 15) 16) 17)</sup>。

しかし中世以前の記録は物証に乏しく全てを信用はすることは出来ないが、同時にこれらを否定することも出来ない。以下にその例を挙げてみる。

### ①丹後国：凡海郷の津波

日時：701年（大宝元）……丹後国風土記残缺

被害：若狭湾の凡海郷（島）が沈没し、頂上二つの小島（冠島、杳島）のみになる（図4）。

しかし実際に津波が発生したか否かの地質学的確証は得られていない。

「丹後国風土記」 残缺より

凡海郷は、往昔、此田造郷万代浜を去ること四拾三里。□□を去ること三拾五里二歩。四面皆海に属す壺之大島也。

其凡海と称する所以は、古老伝えて曰く、往昔、天下治しめし大穴持命と少彦名命が此地に致り坐せし時に当たり、海中所在之小島を引き集める時に、潮が凡ほしく枯れて以て壺島に成る。故に凡海と云う。ときに大宝元年三月己亥、地震三日やまず、此里一夜にして蒼海と為る。漸くわずかに郷中の高山二峯と立神岩、海上に出たり、今号つけて常世嶋と云う。亦俗に男嶋女嶋と称す。嶋毎に祠有り。祭る所は、天火明神と日子郎女神也。是れは海部直並びに凡海連等が祖神と斎所以也。



図 4: 若狭湾の冠島周辺図

## ②石見国：鴨島を沈めたとされる津波

日時：1026 年（万寿 3）……万寿の大津波

被害：柿本人麻呂が幽閉されていた（？）とされる鴨島（図 5）が沈んだ。

加藤芳郎著 「益田を襲った万寿 3 年の大津波」<sup>18)</sup> より抜粋

石見地方沿岸に大被害 津波は大田市まで及んだ可能性あり。  
万寿津波の記録は益田市から大田市沿岸の各地で認められるが、平安時代に書かれた書物にはなく、益田から約 240km 隔てた対岸の韓国（高麗王朝）にも万寿津波・地震の記録はないため、その発生を疑問とする説も存在する。

しかし、地名の伝承で小鯛ヶ迫、舟超坂、鯨坂、万寿津波の伝承・遺物など津波の痕跡を想像させる場所があり、年代はともかく、大津波を経験したことは事実と考えられる。

1977 年に鴨島遺跡学術調査で海底潜水調査がおこなわれ 1992 年～1993 年の鴨島学術調査においても同じ場所で潜水調査が行われた。しかし、鴨島の跡であることを示す積極的な証拠は確認できていない。また、1992 年～1993 年の陸上調査では、トレンチ発掘調査により津波堆積物が確認された。

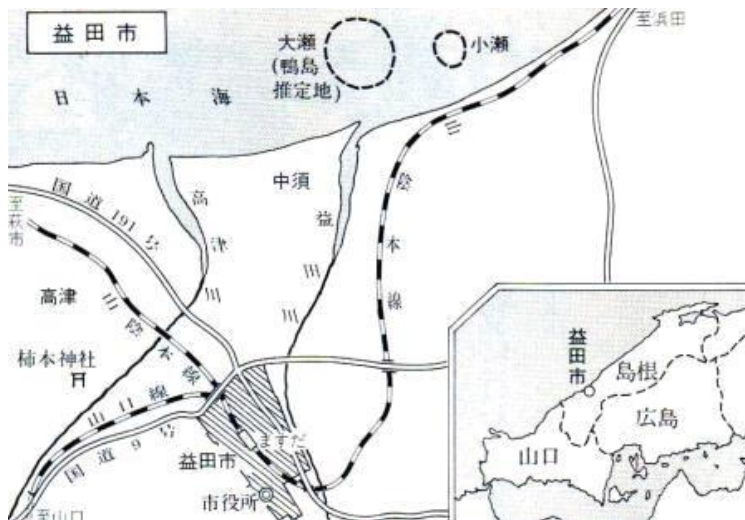


図 5: 鴨島位置図

## (5) 火山活動

有史以来、山陰地方における火山噴火の記載は無かった。しかし BC5300 年の鬼海カルデラの噴火で九州の縄文人が東方へ移住したとされるように、火山活動は歴史に極めて大きな影響を及ぼす<sup>19)</sup>。特に阿蘇山の噴火は甚大な被害を発生し、阿蘇が大噴火すれば局地的な影響のみならず、平均気温は 3℃下がるとの予測も有る<sup>20)</sup>。

## 2：地形

古代より現代まで、地形は大きく変わって来たと考えられているが、その要因としては気温変化に伴う海水準変動、沖積、浸食、地震、津波、洪水などが挙げられる。ここでも重要と思われるものについてのみの検索を行った。

### (1) 海岸線・平野・丘陵地の概観

#### ①海岸線

上記の要因により、海岸線は時代とともにかなり変遷したと思われる。これを時代ごとに正確に再現することほとんど不可能と言わざるを得ないが、代替的な方法として、海水準の上昇や沖積等を勘案し、Flood-Map<sup>21)</sup>で海水準を 10m 上昇させ当時の地形の推測を試みた (図 6)。

図 6 で示すように、米子平野はほぼ海水面下となり、その後の沖積を勘案すれば、もっと内陸部まで海岸線が入り込んでいた可能性もある。注目すべきは、安来市の比婆山付近、南部町三崎・上安曇・青木・福市付近、淀江町向山付近は海岸に近かったと考えられる点で、これらの地域には様々な遺跡、伝承などが存在する。



図6:海水準を10m上昇させた場合の西伯耆の地形

## ②平野部

縄文後期から弥生時代において海水準は今より低く、 $-1\sim-2\text{m}$ であったとされている。これに基づけば現在の平野部分は海面上であったわけであるが、一度海水が浸潤した土地は数百年にわたり湿地帯になると言われている。したがって弥生時代位までは平野と言っても湿地帯の様相を呈していたことが推測される。

『続日本後記』嘉祥元年(848年)8月16日条に、会見郡における条里制に関する記載があり、平安時代には水田耕作が出来るほどの土地となっていたと解釈される。

また、縄文・弥生・古墳時代の日野川は石州府、上福万、日下、尾高の遺跡群の足下を流れていた可能性もあり、平野部においてもかなりの地形変化があったと推測される。

## ③丘陵地

縄文時代以来は明らかな地殻変動が無かったことから、山々、丘陵地は

若干の浸食は受けたであろうが、概ね現在の情景と大差はなかったと推測される。

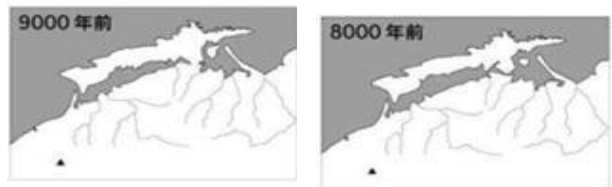
## (2) 潟湖（せきこ、ラグーン）の形成

潟湖は湾が砂州によって外海から隔てられ湖沼化した地形とされるが、完全に外海から隔てられたものはほとんどなく、ごく狭い海峡によって外海と繋がっているものが多い。したがって、ラグーンは塩湖である。

BC4300～BC3000 頃、海水準は+4～+5m前後で停滞するが<sup>4)</sup>、徐々に現在の気候に近づき、海水準も下降する。この時、陸地に閉じ込められた海が出現し、これが淡水化し潟湖となっていく。

山陰地方の潟湖および類似するものとしては、湖山池、多鯨ヶ池、水尻池、東郷池、神西湖、宍道湖、中海などがある。淀江平野は、弥生時代以前は「淀江湖」という潟湖であったと考えられている。

## (3) 中海、弓浜半島、大根島および島根半島、出雲平野、斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖（図7）



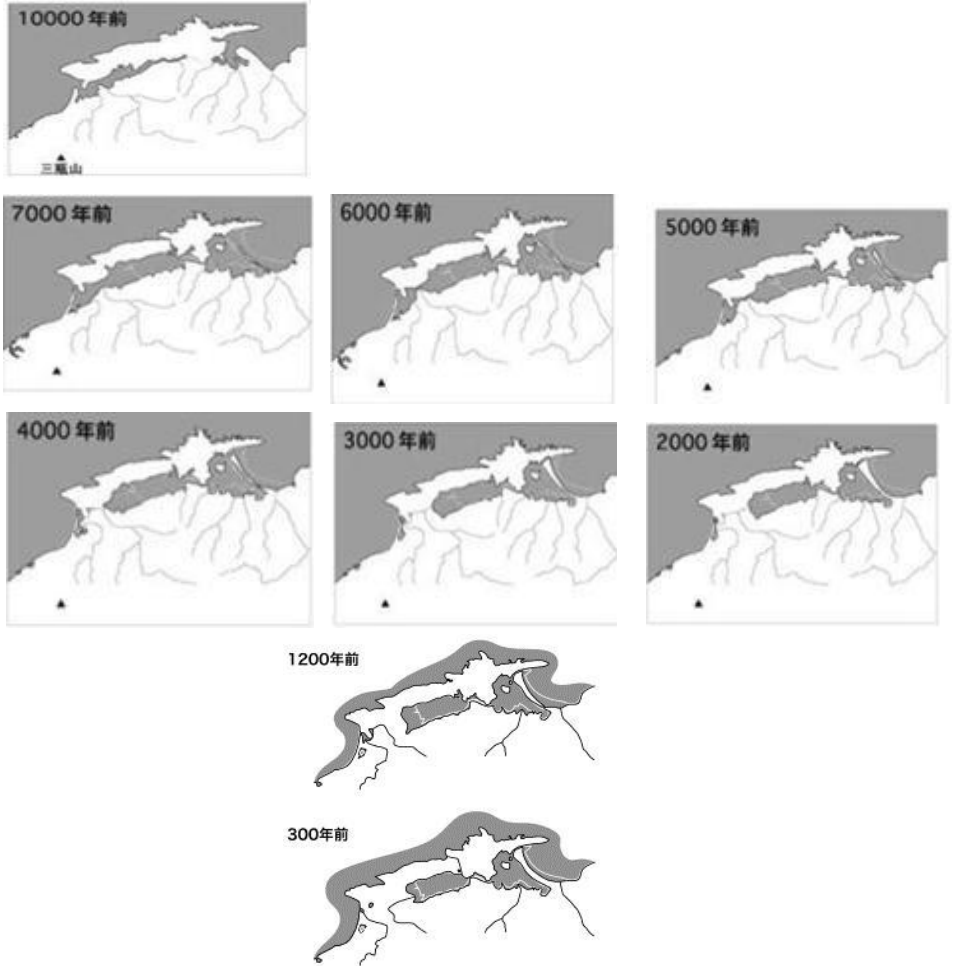


図7：中海と大根島および島根半島、出雲平野、斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖の時代的变化 田中義昭「山陰地方における弥生時代の海水準について一遺跡立地からの検討-」より引用

①中海、弓浜半島<sup>8) 22)</sup>

1968年（昭和43年）の干拓事業が本格着工するまでは、古来より米子の食を支える宝の海であったという。また、安来港、米子港は大型船も寄港する通商の要でもあった。



弓浜半島は、上古は島であったが、その後も海水準の変化のため姿を消したり現したりしていた。完全に現在の様に半島化したのは江戸の末期であるとも言われている（図8）。

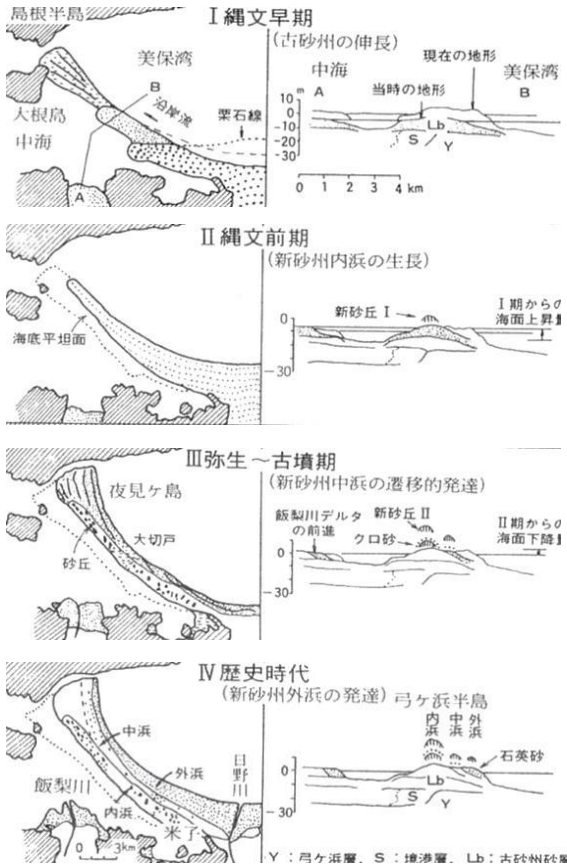


図8: 弓浜半島の時代的变化

藤島弘純著 「日野川の自然」 (富士書店 2000) P45 より引用

### 〈旧石器時代〉

今から 15000 年前、最後の氷河期（ウルム氷河期）が終わる時点では、海水準は今より 120m低かったと考えられている。従って、この地域は中

海も宍道湖もない陸地であった。

〈縄文時代 BC5000年頃〉 (図7:7000年前参照)

縄文海進(+5m)により、古中海湾が形成され、現在の地中海の原型が形成された。この頃はまだ古宍道湾(現在の宍道湖)とは繋がっていなかったが、斐伊川の堆積砂によって古宍道湾の入り口が塞がると、宍道湖の水は古中海湾へと流れるようになった。山間部から古中海湾沿岸にかけて縄文集落(堀田上遺跡など)が現れ、宍道湖湾沿岸には縄文人が出現する(菱根遺跡など)。

次に日野川の土砂が海流に乗って東の入江の入り口付近に堆積し、砂州が徐々に形成されて東の入江は閉じた水域に変わっていった。

〈弥生・古墳時代 BC800年頃〉 (図7:3000年前参照)

弥生時代になると、縄文海退と砂の堆積によって古中海湾の入り口に弓ヶ浜砂州が出現し、潟湖としての古中海が形成される。海岸線が後退(縄文海退-4m、弥生小海退-2m)し、弓ヶ浜半島は完全に姿を表す。その後海水面が再び上昇(ロットネスト海進-1m)したことなどから、弓ヶ浜半島は島状の砂州となった。

〈飛鳥・奈良時代 AD700年頃〉 (図7:1200年前参照)

飛鳥時代、弓浜半島は縞状の砂州であった。奈良時代には再び海水面が上昇し、砂州は水没し、『出雲国風土記』に登場する「夜見の島」という表記からも往時の様子が窺える。そして中海は再び湾へと戻った。

奈良時代の中海は『出雲国風土記』には「飢宇の入海(おうのいりうみ)」として記述され、『万葉集』では安来の湊を「於保の浦」として記述されている。また「錦ヶ浦」などと呼ばれることもあった。

〈平安時代 AD1000年頃〉

平安海進(+0.5m)が起こり、弓浜半島は再びその姿の一部を海中に隠す。また、『更級日記』で真野の長者の家(現千葉県市川市)が水没した原因はこの海進であるとされる。

〈鎌倉・室町時代 AD1350年頃〉

パリア海退により再び半島状の地形を表す。この時代以降に土砂の堆

積や小氷期による海面の下降によって再び夜見嶋が陸繋砂州となり、中海が形成されたと考えられている。

1398年（応永5年）に成立した『大山寺縁起絵巻』には弓ヶ浜半島が描かれており、『境港市史』<sup>23)</sup>ではこれを鎌倉時代の様子ではないかと指摘している。

### 〈江戸時代 AD1700年頃〉（図7：300年前参照）

この夜見島が再び弓ヶ浜半島として復活したのは、中国山地で営まれた「たたら製鉄」によるものが大きいと考えられている。たたら製鉄の原料となる良質の砂鉄を産出する中国山地は、たたら製鉄の一大生産地で、砂鉄はかんな流しと呼ばれる手法で山砂を水路に流し、軽い砂を下流に流して採取する。

大量の山砂は、水路から日野川へ、そして河口から海流に乗って夜見島周辺に堆積していった。こうして夜見の島は段々と太くなり、ついには地続きとなって現在の中海が形成された。

### ②大根島<sup>24)</sup>

中海に浮かぶ火山島で、島の大きさは東西に3.3km、南北に2.2km、島の周囲は約12km。今から約12万年ないし30万年前に形成されたと推定されている。

『出雲国風土記』には、杵築の御崎のたこを捕らえた大鷲がこの島に飛来したことにより「たこ島」と名付けられたとの言い伝えが紹介されている。たこから太根（たく）そして大根（たいこ）と変化して今に至るが、人参を大根とよびかえたのが島の名の由来という説もある

### ③島根半島、出雲平野、斐伊川、神戸川、宍道湖、神西湖

神門川は、神門水海（今の神西湖）に流入していた。当時は斐伊川も神門水海に流入しており、土砂の堆積によりたびたび洪水が起こり、流れが変わった。

1635年（寛永11年）と1636年の洪水を契機に人工的な流路変更（川違え）が実施され、斐伊川は宍道湖へと東流するよう固定された。元禄年間までには築堤も完成し、神戸川の現在の流れが確定した。

神西湖は神門水海（かんだのみずうみ）として記述が見られるが、この湖は現在の約3倍の周囲長を持っており、現在の形とはかなりかけ離れていた。

#### (4) 日野川

##### ①概要

中国山地の三国山（標高 1004m）を源流とし<sup>22)</sup>、その源流付近には八岐大蛇や天叢雲剣の伝説で有名な船通山をはじめ、道後山など標高 1000メートルを超す山々が連なっている。全長約 77 km、流域面積 860 平方キロの県内最大の河川で、現在の流域内人口はおよそ 60800 人。河床勾配は、上流部で 1/30 程度、中流部で 1/190 程度、下流部でも 1/620 程度であり、中国地方の河川の中で有数の急流河川である（図 9）。この急勾配のため、斐伊川のような天井川には成らなかった。

土砂は川床にたまらず、日本海に流出した。それが弓浜半島を形成した一因であるとも推測されている。米子平野・淀江平野は日野川の氾濫原で、洪水による被害もさることながら、おそらく交通や農業においてそれ以上の大きな恩恵を受けたものと思われる。

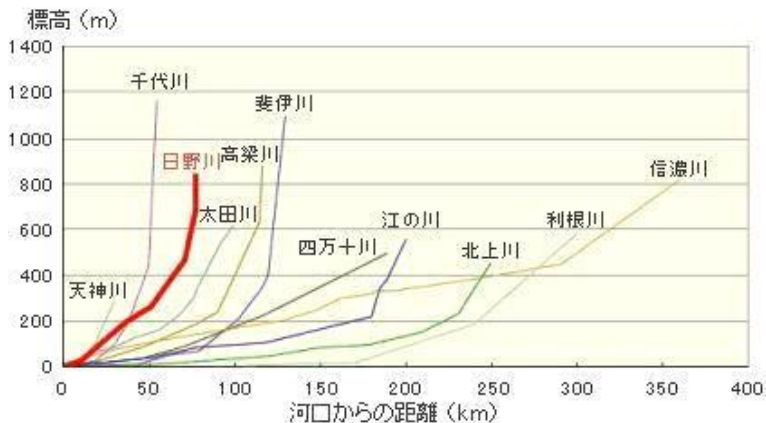


図9: 日野川および他の河川の勾配

②日野川流路の変遷 (図10)

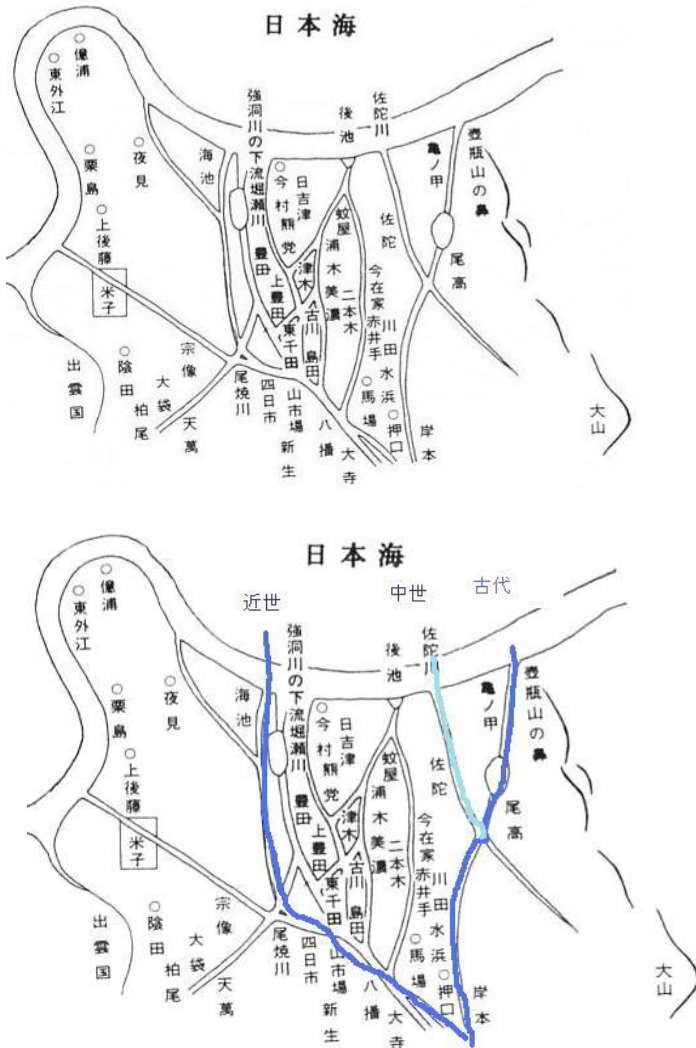


図10: 日野川流路の時代的变化

国土交通省 「倉吉工事事務所四十年史」より引用分を改変

## 1) 弥生時代

この頃の日野川は壺瓶山のふもとを流れていたと考えられており<sup>25)</sup>、この付近には妻木晩田遺跡が存在した。

## 2) 古墳時代

この頃も、岸本～河岡～尾高筋を経て、壺瓶山のふもとから日本海へ注いでいたと考えられている。淀江平野をはさむが、淀江町向山、福岡には岩屋遺跡、向山古墳群が存在した。

3) 1539年、日野川洪水記録の初見<sup>22)</sup>が認められる。

4) 1550年(天分19年)、大洪水により、流路を西に向け叢蚊屋平野の西側を流れるようになった。この洪水で八幡村は2分され、馬場、八幡の二村に分かれた。千太村は流滅した。

5) 1702年(元禄15年)、『伯耆誌』<sup>26)</sup>によれば元禄15年の洪水で法勝寺川(尻焼川)と合流した。この洪水が皆生(海池)を作ったと言われている。

## ③日野川の水運

勾配がかなり急峻で水運には不適とも思われる日野川であるが、各書において水運に利用されていた記載がある。

『日野郡史』<sup>27)</sup> 中篇 第7章 第三節 「川舟」 p1649より引用  
天保の黒坂・緒形四郎兵衛による矢戸から根雨までの川舟創設に関する記載あり。

『溝口町誌』<sup>28)</sup> IX 交通(4) 「川舟」 p108より引用

緒形四郎兵衛の記事と明治時代、根雨の近藤喜録によると、根雨から車尾までの水路開設に関する記事あり。緒形、近藤ともにたたら製鉄に関わる物資運搬だったという。

『岸本町誌』<sup>29)</sup> 第二編 歴史第四章 近世 「いかだ」 p336より引用

舟のほか、竹・木を組み並べた筏をつくり、材木・薪炭・砂鉄などの産物を輸送したという。

『日吉津村誌』<sup>30)</sup> 上巻 第2章 第3節 「大惨災と小惨災」 p 856、  
「たたら製鉄と日野川をめぐる諸問題」 p 861 より引用

鳥取県下の三大河川、千代川、天神川、日野川のうち、日野川はたたら・鉄穴流しのため河床の堆積物が多く水深が浅く、水運に好都合ではなかったこと。山林はたたら製鉄のため現地で消費され、いかだ流しもほかの川ほどさかんでいなかった、とある。また、米子市戸上から谷川の天津小学校下までの法勝寺川の方が舟運は盛んだったという記載あり。

『日野とその周辺』<sup>31)</sup> 鳥取県野外学習テキスト 第5集 7 地域とその周辺の交通 「川舟・渡し舟」 p 42 より引用

日野川では明治 30 年ごろまで筏流しがあり岸本町吉定などには筏師の泊る筏宿があったという。

## (5) 加茂川

加茂川は、その源を標高 258m の島根県安来鷲頭山に発し、米子市西南部を北東に流れ、長砂町付近で西に向きを変えて、目久美町付近で旧加茂川放水路を右岸に合わせ、米子市街西側を流下して深浦港に至り中海に注ぐ、幹川流路延長 9.5 km、流域面積 17.3 km<sup>2</sup> の一級河川斐伊川水系の支川である。

流域の歴史を紐解くと、「目久美・池ノ内遺跡」からの石器発掘により、縄文時代にも人々の営みがあったことが確認されている<sup>11)</sup>。古くから氾濫を繰り返し、この対策として、長砂地内で加茂川を分水して深浦注ぐ放水路（通称 新加茂川）を開削して現在の姿となり、洪水による被害は減少した。

## (6) 大山

最後の噴火は約 1 万年前で<sup>32)</sup>、有史以後の噴火記録は残されていないが、火山の一生は非常に長く、特に大山の長い活動史から考えると 1 万年程度の休止で完全に活動停止したと考えるのは妥当ではない。『出雲国風土記』によれば、古代は「火神岳」（ほのかみだけ）、「大神山」（おおが

みやま)と呼ばれていた。この「大神山」の神が省略されて、平安時代には、「大山」(だいせん)になったと言われている。その山麓を日野川が流れていたと考えられる。

(7) 孝霊山 (本誌 p 31- p 39 三原彰氏著「孝霊山考」を参照)

## (8) 壺瓶山

### 概要

標高 113m。上古、日野川はこの山のふもとを流れて日本海に注いでいたと考えられている。壺瓶山の由来は、山から壺や瓶がたくさん発見されたことに始まり、一帯から 28 基の古墳が発見されている<sup>11)</sup>。

壺瓶山 33 号墳 (45m) 壺瓶山 23 号墳 (32m) 壺瓶山 9 号墳 (30m)  
壺瓶山 13 号墳 (30m)

壺瓶山 16 号墳 (30m) 壺瓶山 17 号墳 (25m) 壺瓶山 14 号墳 (24m) など

付近には妻木晩田遺跡や向山遺跡、また遺跡群に加えて麓には日吉神社がある。調査が行われればさらなる遺跡の発掘も期待される地区である。

『伯耆志』<sup>26)</sup>によれば、「坪上山 會見、汗入兩郡の境に在り。官帳、坪亀に作る。田蓑日記もまた然り。山上、古の官道あり、今樵路となる。今の官道は百年前に改造されりと云えり」とある。

汗入と會見の郡境で昔は官道(駅路)が通っており小波集落辺には、天保年間に設置されたという旧山陰道の道標や番所跡もある。『伯耆志』が坪上山としており、壺瓶山となったのはかなり新しいものと見込まれる。

1976 年(昭和 51 年)の淀江条里遺構調査から、上淀廃寺跡付近から坪亀山の鞍部を越え、日野川を横切り伯耆国の最西の相見駅に達していたとみられている。

## 【3】結果まとめ



以上、渉猟した文献等から古代西伯耆の気象、地形について検索を行ったが以下にその時代順の概要をまとめてみる。

西伯耆の山々は有史以来噴火や地殻変動に伴った大きな変化はなく、古代と現代で大きな違いは無かったと考えられる。しかし平野部は海進・海退による海岸線の変化や、日野川流路の変遷、沖積などにより現代と大きく様相を異にしていた事が推測された。

## ①縄文時代

### BC11000～8000 縄文草創期

温暖化が進行し、氷河が溶けて海水面が上昇し、海が陸地に進入してきた（縄文海進の始まり）。

縄文海進、縄文海退により海岸線及び平野部は大きく変化を続けた。

### BC11000～8000 縄文草創期

温暖化が進行し、氷河が溶けて海水面が上昇し、海が陸地に進入してきた。この時の宍道湖、中海は入り江のような湾を形成していた。

### BC 8000～4000 縄文早期

はじめの頃は、現在よりも気温2度ほど低く、海水準も30メートルほど低かった。その後、海水面の高さが戻る。BC6000年頃、海拔0mになる。以後海水面は上昇し、BC5000年頃の弓浜半島は海中に姿を消していた。

### BC 4000～3000 縄文前期

縄文前期はじめの頃、縄文海進のピークを迎える（BC4300頃）。海面は今より3～5メートル（+4m）高く、しばらく高値で停滞（BC4300—BC3000頃まで）した。気温も現在より2度程度高く、以後海水面は緩やかに低下（縄文海退の始まり）した。三内丸山遺跡（BC3500—BC2000頃）もこの頃を中心に繁栄していた。

### BC 3000—2000 縄文中期

BC3000年頃より海退が始まり、海水面は緩やかに低下した。まだ海水面は高位で、島根半島は陸地から孤立した島であった。またこの時代から頃から陸稲稲作が開始された。

## BC 2000—1000 縄文後期

さらに海水面が低下し、BC1500頃には海岸線はほぼ現在に近くなつたと推測されている。しかし、内陸地域にも貝塚が出来ていた事から、まだ海岸線はかなり内陸部まで入っていたと思われる。

## BC 1000—600—500 縄文晩期

平均気温が2度前後低下した。そのためBC800年頃をピークにして、海水面は-4m程度まで低下した。弓浜半島は再び姿を現したが島状であった。

## ②弥生時代

紀元前後頃は寒冷期であった。海水面は-2mにあった（弥生小海退）。縄文海退により海岸線は現在よりやや後退していたであろうが、海進の影響は湿地帯を形成し、その影響は大きかったと思われる。弓ヶ浜半島は島状の砂州となった。

## ③古墳時代・飛鳥時代

古墳寒冷期あるいは万葉寒冷期と呼ばれる寒冷期であった

535年は文献や考古資料によると、世界各地で535～536年に突発的な寒冷化と荒天などの異常気象（Extreme weather events of 535—536）が発生した。原因としては火山の噴火（いわゆる火山の冬）や、隕石の衝突が挙げられている。有力な説として、クラカタウを含むスンダ海峡での巨大噴火が指摘されている。

この頃の日野川は、岸本～河岡～尾高筋を経て、壺瓶山のふもとから日本海へ注いでいたと考えられている。

## ④奈良・平安時代

大仏温暖期と呼ばれる温暖期であった。

AD700頃より海進が進み（-1m）、ロットネスト海進と呼ばれている。奈良時代には再び海水面が上昇し弓ヶ浜半島は海中に水没しており、中海は

湾へと戻る。この時期まで、南部町周辺は入り海の様相を呈していた可能性が考えられる。

AD1000 頃には海水準は $-0.5\text{m}$ 位となり、AD1100 頃にはさらに海進が進み、 $+0.5\text{m}$ となった（平安海進）。

### ⑤鎌倉・室町時代

この時代は寒冷期とされ、AD1350 頃の海水準は $-1\text{m}$ で、パリア海退と呼ばれている。

弓ヶ浜半島はパリア海退により再び半島状の地形を現す。1398 年（応永 5 年）に成立した『大山寺縁起絵巻』には弓ヶ浜半島が描かれており、この時期には概ね半島化していたと考えられている。

室町時代に日野川はその流路を大きく変えている。すなわち、岸本～河岡筋を経て、尾高を通り佐陀川と合流して日本海へ注いでいたと考えられている。また中世では、尾高城が当時の中心地であったと思われるが、日野川の水運が関与していたかもしれない。

1539 年に日野川洪水記録の初見が記され、1550 年（天分 19 年）大洪水により、流路を西に向け箕蚊屋平野の西側を流れるようになった。この洪水で八幡村は 2 分され、馬場、八幡の二村に分かれた。千太村は流滅した。

### ⑥江戸時代

やや寒冷な期間であった。ペルーのワイナプチナの噴火、アイスランドのラキの噴火インドネシアのタンボラ山の噴火による影響が考えられている。

夜見島が再び弓浜半島として復活したのは、中国山地で営まれた「たたら製鉄」によるものが大きいと考えられている。こうして夜見の島は段々と太くなり、ついには地続きとなって、現在の中海が形成された。

1673 年（延宝元年）、日野川堤防が切れたとの記録あり、この頃にはすでに日野川の治水が行われていた。1702 年（元禄 15 年）、伯耆誌によればこの時の洪水で法勝寺川（尻焼川）と合流し、この洪水が皆生（海池）

を作ったといわれている。

## ⑦明治～現代

AD1850年頃から気温上昇が始まった。産業革命以後、世界の平均気温は急激に上昇（+0.5～+1.0℃）し現在もなお上昇を続けている。現在の海水面はさらに上昇すると予測されているが、その程度は不明とされている。江戸時代後期から弓ヶ浜半島は安定し、日野川の流路にも大きな変化は無かった。

## 【4】考察

現在のような地図あるいは航空写真・衛星写真など無かった古代において、経時的に鮮明な地形を再現することはほぼ不可能であると言わざるを得ない。

今回は海水準変動、ボーリング調査の結果、地質学的文献等から当時の地形を推測したが、これらは主に理化学的見地からの検討で、やはりそのみでは十分とは言い難い。

それらをより精度の高いものにするためには、集学的な検討が必要とも思える。すなわち、考古資料、古地名、伝承なども当時の地形を考える貴重な資料として取り扱う必要があると認識すべきではなかろうか。

その観点から、以下にいくつかの例を挙げてみる。

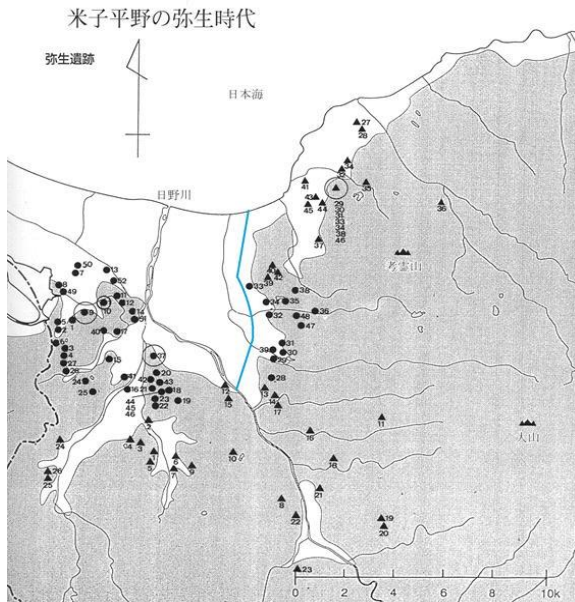
### (1) 遺跡から推測する古代の地形

西伯耆の弥生時代、古墳時代の遺跡群を観察すると、そのほとんどが丘陵地・微高地に集積している（図11）。西伯耆に限らず、現在平野部として存在する地域は古代から現代までの間に海水準変動、洪水、沖積等によってその姿を大きく変えてきた。平野部にも遺跡群は存在したが、地形の変化で消失してしまったという考察も成り立つかもしれないが、古代人の主たる居住区域は現在の平野部ではなかったと考える方が順当であるよ

うに思われる。

弥生時代以降の平野部は海退により海水面上に存在していたであろうが、おそらく湿地帯の状態、生活には適していなかったことが窺える。

ただし平安時代以降はおそらく沖積が進み、米子平野でも条里制が存在していた事<sup>5)</sup> からも生活空間として利用されていたのは間違いない。





の語源は「淡海」であったと言う説が信頼できる。

## ②三崎

半島状に突出た地形が岬のようであるため古くは見崎とも書いた。三崎山中腹の三崎社（現日御崎神社）に由来する。これからも、この地が入り海状の地形であった事が窺える。

## ③田住（明治11年～22年の村名）

1878年（明治11年）石田村と住吉村が合併し、田住村となった。このことから、法勝寺川流域には安曇、住吉という地名が在った事になる。また加茂川流域には宗像も存在し、これらはいずれも海人族に由来する地名である。

上記①、②、③から考えるに、当時の会見町周辺は入り海あるいは湖の様相を呈しており、海人族にゆかりのある土地柄であった可能性が強く示唆される。

## ④淀江

江とは海や湖が陸地に入り込んだ地形を示す。縄文時代以来、淀江平野に潟湖が発達し、「よどんだ入江」から来ていると言われる。

## ⑤日吉津

淀江町の日吉神社に関する記載で、『三代実録』に「清和天皇貞観16年7月戊子、正六位上天乃佐奈咩神に従五位下を給ふ、とあるは実に当社のことなり」、とある。日吉津地名の由来としては日吉神社の津と解釈も出来るのではなかろうか。また『日野郡誌』第4章神社P354-357 伯州日野郡楽楽福大明神記録事には、「孝霊天皇が隠岐の黄魃鬼（コウバツキ）退治後、日吉の津に上陸。孝霊45年に鳥取県日野郡周辺にやってきて同71年まで賊徒を退治した」と伝えられている。この記事の信憑性は判断し難く後世の造作とも思えるが、④、⑤より現在の淀江平野は、当時は入り海で良港の機能を果たしていた可能性を示唆するものとも考えられる。

## ⑥皆生

江戸時代の古文献には「海池」との記載があり、古地区には米子城から勝田町・中島・福原村を経て日野川河口に至る小道を「海道」する記載が

見られる。1570年頃八幡村の人たちが移り住んで福原村が出来たと言う説<sup>35)</sup>と、1702年の洪水によって皆生(海池)を作ったとする説<sup>26)</sup>がある。

以上、古地名が当時の地形を示唆する例を挙げたが、このような事例は枚挙に暇がない。

### (3) 古社の位置から推測する当時の地形

古社とされる神社は、概ね海拔10~20m前後の位置に存在する例が散見される。これは西伯耆だけでなく、香椎宮(福岡県):海拔約20m、出雲大社(島根県):海拔約20m、吉備津彦神社(岡山県)海拔約20m、住吉大社(大阪府):海拔約10m、熱田神宮(愛知県):海拔約15m、氷川神社(埼玉県):海拔約20mなど、他の地域においても列举に事欠かない。また、内陸部に位置する神社においては、近くに必ずと言っていいほど河川が近接する例が多い。

古代の神社の機能を鑑みると、古社は単なる礼拝所ではなく、租庸調を一旦神社に集積しそこから畿内へ搬送していたとされる。従って海上交通が主流であった当時において、神社の立地条件としてどうしても水運の便利な立地が必要であったと思われる。

すなわち式内社等の古社が存在していた土地は、概ね海岸線あるいは河川の近辺であり、その付近が当時の海岸線であったと想像することも許されるのではなかろうか。

実際西伯耆の古社を観察すると、概ね海拔20m付近に存在するか、日野川あるいは何らかの河川が流れていたと推測される地域に立地している(図12)のもその証左かもしれない。



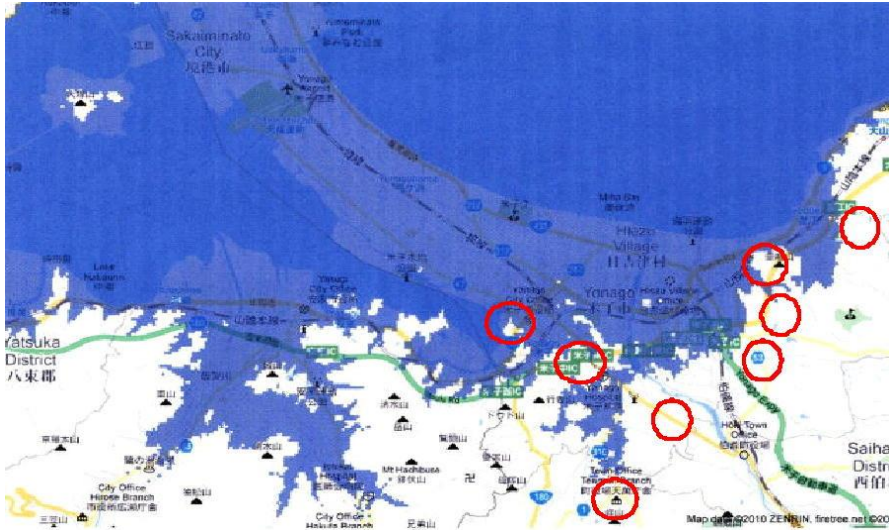


図12: 古社の分布と海岸線

以上、渉猟出来た文献等から古代西伯耆の気象・地理に関する概要を推測し報告した。今回の検索がどの程度正確な古代の地形を反映しているかは、大いに疑問の余地を残しているのは確かであろう。今後新たな調査、発掘が行われればこれらが大きく覆る可能性は十分にあるが、現時点での何らかの指標になるものと考ええる。

今回の検索で気象変化がわれわれ人間に与える影響の大きさをあらためて実感させられた。

長期的な気象変動は海水準を上下させ、生活範囲を大きく限定させる。現代に生きるわれわれですらそれに逆らうことはほとんど不可能で、それに従わざるを得ない。しかし先人たちはその環境を上手く利用し、逞しく生きていたのも事実である。例えば、水運を利用出来た海人族の様に、内陸部までその範囲を広げて行った人々などはまさしく顕著な例と言えるであろう。

短期的な気象変動も古代の人々に大きな影響をもたらしていた。地震、

津波、火山活動、洪水などの影響も計り知れないものがあるが、古代の人々はこれらとも上手く共存していた。

ここで1つ注目すべきは、古代における日食の記載である。天照大神の岩戸隠れは日食を神話の世界に反映させた歴史的事実と唱える諸説が存在する<sup>36)</sup>。しかし、もしそれが事実であるならば、それを経験あるいは伝聞して神話の世界に描いた者たちは、ごく限局された地域に居住した人たちであったと考えられる。表1にも示したように、日食の観測地域は比較的限局的かつ短時間である<sup>37)</sup>。さらに、卑弥呼と天照大神を同一な存在として扱う説<sup>38)</sup>も在るが、そうならば、邪馬台国の所在地も自ずと限られてくるのかもしれない。

古代の人々が経験して来たのと同様に、今後どの様な気象変動、あるいは地殻変動がわれわれを苛むかは全くもって定かではない。しかし、気象の大きな変動が有った後の歴史的な政変・乱・事件等との関連性を調査し、両者に何らかの因果関係を見いだすことが出来れば、現代人も未来の自然環境の変化やその後起こりうる社会の変化に対応出来るものとする。

## 【5】 結語

現時点で考えられる古代西伯耆の気象・地理に関する文献的考察を行いその概要を記載した。

長期的に観ると気象変動によって地形は大きく変化を繰り返していた。

古代西伯耆においては現代よりも水域が広く、それに支配されながら、かつ巧みに利用した生活が営まれていたと推測された。

稿を終えるに当たり、終始懇切なるご指導を頂いた「西伯耆の古代を考える会」会長坂田友宏先生ならびに御助言を頂いた同会会員各位に深謝申し上げます。

## 【参考資料】

- 1) カール・マルクス著 杉本俊朗訳 『経済学批判』 大月書店 国民文庫  
1966
- 2) B. フェイガン 『古代文明と気候大変動』 河出文庫 2008
- 3) 千田稔 『なぜ、地形と地理がわかると古代史がこんなに面白くなるのか』  
歴史新書 2015
- 4) 松島義章 『貝が語る縄文海進—南関東、+2°Cの世界』 有隣新書 2012
- 5) 『鳥取県誌』 第一巻 原始古代 1972
- 6) 河鱒公昭、谷川清隆 「中国・日本の古代日食から推測される地球慣性性能  
率の変動」 天体力学研究会集録伊豆長岡 2003
- 7) 湊正雄 『変動する海水面』 東海科学選書 1980
- 8) 田中義昭 「山陰地方における弥生時代の海水準について—遺跡立地から  
の検討—」
- 9) 狩野彰宏 「古気候学と歴史気象学：気候研究に関する文理融合のすすめ」  
比較社会文化 19 p 11～p 18 2013
- 10) 高橋学 「古代末以降における臨海平野の地形環境と土地開発—河内平  
野の島島開発を中心に—」 歴史地理学 167 p 1—p 15 1994
- 11) 『新修米子市史』 第一巻 通史編 原始・古代・中世 2003
- 12) 『新修米子市史』 第七巻 資料編 原始・古代・中世 2003
- 13) 寒川旭 『日本人はどんな大地震を経験してきたのか』 平凡社新書 2011
- 14) 静岡大学防災総合センターHP 「古代・中世 地震噴火史料データベース」  
<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/erice/>
- 15) 日本地震学会 HP 「日本付近のおもな被害地震年代表」  
[http://www.zisin.jp/modules/pico/index.php?cat\\_id=100](http://www.zisin.jp/modules/pico/index.php?cat_id=100)
- 16) 寒川旭 『地震の日本史』 中公新書 2007
- 17) 寒川旭 『地震考古学—遺跡が語る地震の歴史』 中公新書 1992
- 18) 加藤 芳郎 「益田を襲った万寿3年の大津波」 島根県技術士会 2011
- 19) 甲元眞之 「気候変動と考古学」 熊本文学部論叢 97 (歴史学篇)： p  
1—p 52 2008

- 20) 川幡穂高 『縄文時代の環境、その1 縄文人の生活と気候変動』 地質ニュース 659号、p11-p20, 2009)
- 21) Flood Map ( <http://flood.firetree.net/> )
- 22) 藤島弘純 『日野川の自然』 富士書店 2000
- 23) 『境港市史』 境港市史編纂室 1987
- 24) 『新修島根県史』 史料篇 古代・中世
- 25) 『倉吉工事事務所四十年史』 国土交通省 1978
- 26) 『因伯叢書第4巻 伯耆誌』 名著出版社 1972
- 27) 『日野郡史』 名著出版社 1972
- 28) 『溝口町誌』 溝口町誌編纂委員会 1973
- 29) 『岸本町誌』 岸本町誌編纂委員会 1983
- 30) 『日吉津村誌』 日吉津村誌編纂委員会 1986
- 31) 『鳥取県野外学習指導テキスト』 第5集 日野とその周辺 鳥取県教育研修センター編 1986
- 32) 『大山をめぐる山々』 伯耆文庫第4巻 今井書店 1988
- 33) 武光 誠 『地名から歴史を読む方法—地名の由来に秘められた意外な日本史』 KAWADE 夢新書 1999
- 34) 源順 『和名類聚抄』 930頃
- 35) 『ふるさと福生の歩み』 福生地区記念誌作成実行委員会 2011
- 36) 井沢元彦 『逆説の日本史—古代黎明編』 小学館 1998
- 37) 谷川清隆 「天の磐戸—日食候補について」 国立天文台報 第13巻, p 85-p99 2010
- 38) 安本美典 『倭王卑弥呼と天照大御神伝承』 勉誠出版 2003

## ——海部と服部の痕跡をたどる

黒田 一正

### 諸言

鳥取市福部町は古代においては、「因幡国法美郡服部郷」であった。現在、町内の海士に、式内社の服部神社が鎮座している。祭神の「天羽槌雄命・天棚機姫命」は、『古語拾遺』によれば、倭文氏の遠祖で、天羽槌雄神が文布を、天棚機姫神が神衣を織る神であった。その神を祭神とする当社の祭祀氏族も、機織りに関わる人々であった可能性が高い。福部町の「福部」は、この「服部」からきている。

一方、因幡国戸籍残簡（『正倉院文書』）には、海部牛麻呂を戸主とする十七人の名前が記録されており、「服部郷」のものと考えられている。「海士」という現在の地名は、この海部との関連が考えられる。

すると、一つの疑問が浮かんでくる。なぜ服部神社は海士に鎮座するのか、あるいは逆に、なぜ海部と関わる地に、海の神を祀る神社ではなく、服部神社が祀られるのか。郷名にしても同様である。

以下、服部・海部関連の式内社や郷の分布を通じて、この疑問に迫ってみたい。

## I 福部町海士の地誌

### ①海を意識した郡名

福部町は前述したように古代においては、法美郡服部郷と呼ばれていた。東隣の岩美町は巨濃郡、西は邑美郡である。法美郡・邑美郡いずれも「ミ」

が含まれている。

また伊福部氏の系図である『因幡国伊福部臣古志』には、「難波長柄豊前宮御宇天万豊日天皇（孝徳天皇）二年丙午、水衣評を立て督に任じ、小智冠を授く。時に因幡国は一郡を為し、更に他郡無し」、あるいは「後岡本朝廷（斉明天皇）4年戊午、大乙上を授く。同年正月、始めて水衣評を懐き（壊し?）、高草郡を作る」の記事が見える。これによれば、孝徳天皇の時代には、因幡国には水依評（みよりのこほり）があり、他に郡はなかった。斉明天皇の時代になって、高草郡が成立するが、水依評と高草郡の関係については、水依評を壊して高草郡が作られたとする説、水依評を懐き（含めて）高草郡が作られたとする説など諸説ある。そして、さらに水依評は、法美郡・邑美郡に分けられる。つまり二郡の元となった郡名も水依評で、やはり「ミ」が付く。おそらくは「ミ」は「海」の「ミ」だと考えられる（鳥取県史）。

伯耆国会見郡の「ミ」も海の「ミ」、「アフミ」である可能性が高いが、このように、因幡と伯耆、いずれにも海を意識した郡名があったことは興味深い。

## ②ラグーンを利用した海の交流

海との親縁性は、町内の遺跡からもうかがうことができる。主な遺跡としては、直浪遺跡、栗谷遺跡、湯山の古墳群などがある。

まず直浪遺跡は福部町直浪の砂丘のふもとに位置する複合遺跡である。遺跡周辺の砂丘はいくつかの層によって形成されている。層順は、下から湯山砂層、褐色火山灰層、黒ボク状黒色粘土層、黒スナ層、新砂丘層となっており、古墳時代の土器が黒ボク状黒色粘土層に混入しており、その上層を厚くおおっている新砂丘層は、古墳時代以降、とくに奈良・平安時代以降に形成されたと思われる。

こうした砂丘下に埋もれた遺跡は、鳥取砂丘にも広がっており、一種のラグーンを形成し、海を介して他地域との交流を行っていたと考えられる。

直浪遺跡の南側、福部町湯山の犬谷山先端部にあった直径13m、高さ1

m、5世紀初頭の円墳が湯山6号墳も、その一つの例証である。この遺跡からは、三角板革綴短甲、小札鋳留眉庇付冑（こざねびょうどめまびさしつきかぶと）が出土しており注目される。この冑の高度な鋳留技法、鍛造技術は、朝鮮半島から伝わったか、渡来系の技術者によって作製したものか、いずれかであるとされ、この古墳の被葬者も、海を舞台に活躍した人物であった。

また、塩見谷の入口に立地する粟谷遺跡は、鳥取砂丘東端部にあったラグーン（細川池）の南岸に位置する。前期～晩期の縄文土器、石斧、石皿、石匙、石鏃など、弥生時代の土器と石斧、古墳時代の土師器、須恵器、シャモジや火鑽臼などの木製品などが出土、長期にわたる生活の場であった。

さらに『日本三代実録』貞観5年（863）の記事によると、「57人の新羅国人が荒浜の浜辺に来着した」とある。荒浜は現在の高江・箭溪（やだに）あたりと考えられ、おそらくその辺りまで、入海だったと思われる。江戸時代まで、細川池や湯山池があり、低湿地を形成していた。

このように古代における服部周辺は、日本海の海岸線にそって細長く形成されたラグーンの一画に位置し、港の機能を持ち、海を生活の場とし、また海を通じてさまざまな地域との交流を行ってきたと思われる。

### ③二つの式内社

この服部郷には、服部神社と荒坂神社の二つの式内社がある。

服部神社は、現在は鳥取市福部町海士（あもう）に鎮座するが、元宮は9号線をはさんだ南の摩尼山山麓の御内谷（おうちだに）にあったという。祭神は天羽槌雄命、天棚機姫命、素佐雄命で、前述したように倭文神社と同じ神である。横山利宮司によれば、「神社の供え物として「山繭」を奉納していたが、今は廃れた。大正の頃までは、この辺りは一面、桑畑で養蚕が盛んであった」という。

一方の荒坂神社は鳥取市福部町八重原に鎮座するが、明治4年までは矢谷にあったという。祭神は大己貴命、少彦名命、素盞鳴命である。

二つの神社と関連すると思われる伝承が『播磨国風土記』に記載されて

いる。

讚容郡中川（なかつがわ）の里の条「弥加都岐原」の記事  
伯耆の加具漏（かぐろ）・因幡の邑由胡（おほゆこ）の二人、大（いた）  
く騎（おご）りて節（さだめ）なかく、清酒を以ちて手足を洗ふ。こ  
こに、朝廷、度に過ぎたりと為して、狭井連佐夜（さいのむらじさよ）  
を遣りて、この二人を召さしめき。その時、佐夜、乃ち悉（ことごと）  
に二人の族（やから）を禁（いまし）めて、参赴（まゐおもむ）く時、  
屢、水の中に漬（ひた）して酷拷（たしな）めき。中に女二人あり。  
玉を手足に纏（ま）けり。ここに、佐代恠（あや）しみ問ふに、答へ  
て曰ひしく、「吾は此、服部の弥蘇の連（はとりのみそのむらじ）、因  
幡の国造阿良佐加比売（あらさかひめ）にみ娶（あ）ひて生みませる  
子、宇奈比売（うなひめ）・久波比売（くはひめ）なり」といひき。そ  
の時、佐夜、驚きて云ひしく、「此は是、執政大臣（まつりごとまをし  
たまふまへつぎみ）の女なり」といひて、即ち還し送りき。送りし處  
を、即ち見置山と號け、溺（かづ）けし處を、即ち美加都岐原と號く。

「服部の弥蘇の連」は服部神社の祭祀氏族、「因幡の国造阿良佐加比売」  
は荒坂神社の祭祀氏族を象徴すると考えられる。特に阿良佐加比売を因幡  
国造と記すことは重要であろう。④でも述べるように、服部郷には因幡国  
造家の伊福部氏と通婚する海部氏の存在もあり、また因幡国守であった平  
範時は承德3年（1099）、因幡国に下向した際に宇倍社・坂本社・三島社・  
賀露社・服社・美歎社の五社に参拝しているが、それほど重要視された神  
社であった。あるいは、因幡国府から海へ向かうためのルート確保という  
性格もあったかもしれない。

服部神社の祭神は、前述したように天羽槌雄命、天棚機姫命、素佐雄命  
だが、素佐雄命は後の時代に付近の荒神を合祀したもので、本来は前者の  
二神である。



天羽槌雄命は『古事記』には登場しない。大同2年(807)に、齋部広成によって書かれた『古語拾遺』に、次のように記載されている。

太玉神をして諸部(もろとものを)の神を率て、和弊(にきて)を造らしむべし。仍りて、石凝姥神(いしこりどめのかみ)[天糠戸命(あめのぬかど)の子、作鏡が遠祖なり]をして天香山の銅(あかがね)を取りて、日の像(かた)の鏡を鑄(い)しむ。長白羽神(ながしろのかみ)[伊勢国の麻統(をみ)が祖なり、今の俗に、衣服を白羽と謂ふは、此の縁(ことのもと)なり]をして麻を種(う)ゑて、青和弊(あをにぎて)[古語に、爾伎弓(にきて)といふ]と為さしむ。天日鷲命(あめのひわしのみこと)と津咋見神(つくひみのかみ)とをして穀(かぢ)の木を種殖(う)ゑて、白和弊[是は木綿(ゆふ)なり。已上(かみ)の二つの物は、一夜に蕃茂(おひしげ)れり]を作らしむ。天羽槌雄神[倭文が遠祖なり]をして文布(しつ)を織らしむ。天棚機姫神(あめたなばたつひめのかみ)をして神衣(かむみそ)を織らしむ。

ここには、伊勢や宮中の祭りに、忌部氏を中心に鏡や衣服などを作成したさまざまな氏族が登場しているが、「天羽槌雄神[倭文が遠祖なり]をして文布(しつ)を織らしむ。天棚機姫神(あめたなばたつひめのかみ)をして神衣(かむみそ)を織らしむ」とある。倭文は機織り氏族だから、同じ神を祀ることからして、服部氏も機織りに関わる人々であろう。

因幡・伯耆にも倭文氏の存在が確認できる。千代川の中流域に「服部」という集落がある。服部神社が鎮座し、「天御杵命(あめのみほこ)」を祀る。この神については後述するが、大和国の服部連の祖神である。したがって福部の服部と何らかの関係があったと推定できるが、そこから少し上流に、「倭文」集落があり、式内社の倭文神社が鎮座している(祭神=武葉槌神)。

また伯耆では、東郷池の東の宮内集落に倭文神社(祭神=武葉槌神・下照姫命)があり、伯耆一の宮である。また倉吉の小鴨川左岸の丘陵地に「志

津」という集落があり、そこにも倭文神社（祭神＝経津主神・武葉槌神・下照姫命）がある。さらに、この丘陵地には「服部」集落がある。ここにも服部神社が祀られているが、この神社は大国主神と保食神を祀り、古くは桑原大明神と呼ばれていた。おそらくは養蚕に関わる人々が祀ったのであろう。このように、倭文と服部は、因幡・伯耆においても密接である。

また、タケハヅチについて、『日本書紀』には、次のように別の伝承が記されている。

『日本書紀』第九段（本文）国譲り伝承の末尾  
一に云はく、二の神（タケミカツチ・フツヌシ）遂に邪神及び草木石の類を誅（つみな）ひて、皆已に平（む）けむ。其の不服（うべな）はぬ者は、唯星の神香香背男（かかせを）のみ。故、加（また）倭文神建葉槌命を遣せば服（うべな）ひぬ。

これによれば、タケミカツチ・フツヌシによる国土平定に際し、倭文神建葉槌命は、両神に協力して賊を討伐した神でもあったらしい。これについては後にふれたい。

いずれにしても、服部氏は「天羽槌雄命、天棚機姫命」という祭神を倭文と共有し、忌部体制の一翼を担ったと思われる。

#### ④服部郷の人々——㊸海部

では次に、服部郷にはどのような人々が住んでいたのかを探してみたい。因幡国には幸いなことに、極一部だが古代の戸籍の断簡が残されている。神部と伊福部、そして海部の戸籍である。以下は、その海部の戸籍である。

因幡国戸籍残簡（『正倉院文書』）

戸主海部牛麻呂戸

男海部小人 年廿四 正丁

男海部男 年十六 小丁

女海部刀自売	年廿八	正女	
女海部津村女	年廿七	正女	
女海部足女	年十二	小女	
女海部小女	年六	小女	
従父妹海部稻依女	年五十	正女	
姪女海部小妹女	年卅二	正女	
男伊福部得麻呂	年卅四	正丁	
寄海部身麻呂	年卅四	残丁	
妻伊福部小足女	年卅	正女	
女海部黒女	年七	小女	
弟海部得安	年廿七	正丁	兵士
妻海部直橘足女	年廿三	正女	(得安の妻)
男海部長田	年二	緑子	
弟海部真床	年廿一	中男	(戸主の弟)
妹海部真成女	年廿五	正女	(戸主の妹)

これは海部牛麻呂を戸主とする一戸の戸籍である。17人の名が記載されている。全国的な平均としては、一戸25人とも50人ともいわれており、50戸で服部郷が構成されていたとすれば、約1000～2500人の人が住んでいたと思われる。

この戸籍でまず注目されるのは、14番目の「妻海部直橘足女」である。「直」は「アタエ」と読み、国造、郡領クラスの人に与えられる姓である。また10番目の「妻伊福部小足女」は、伊福部氏とも通婚する家柄であったことを示す。つまり海部氏は、因幡国において国造や郡領を出すほどの存在であった。

こうした視点に立てば、山陰海岸沿いに、「直」姓をもつ海部が濃密に分布することにあらためて留意すべきであろう。丹後国には「海部直」、但馬にも「海部直」がいる。丹後には籠神社が鎮座し、この神社には、火明命という尾張氏系の神を始祖とする「海部系図」が伝わる。但馬の「海部直」

も火明命を始祖とし、城崎にある海神社や西刀神社などの祭祀に関わっている。

地縁からすれば、因幡の海部もこれら山陰海岸沿いの丹後・但馬の海部と関係する可能性は高いと思われる。

## ⑤服部郷の人々——⑥服部

さて、もう一方の「服部」についてはどうだろうか。先述の『播磨国風土記』に登場する「服部連弥蘇(ミソ)」が因幡の住人だった可能性がある。

また千代川左岸から湖山池を郡域とする高草郡の中に、東大寺の荘園・高庭庄が成立するが、度々土地のもめごとがあり、「高庭庄坪付注進」という仲裁の文書が残っている。そこに「服部小丸」なる人物が署名している。この人物が服部郷の人だったかどうかは不明だが、証文に署名するくらいの高い身分だった人物である。

さらに『新撰姓氏録』の「服部連」には「允恭天皇の時代に服部連が諸国の織部を統括した記事があり、『続日本紀』には「但馬、因幡、伯耆、出雲、播磨など21の国に織部たちが派遣され」という記事により、因幡や伯耆に機織り集団の配置が確認できるのも、因幡国・伯耆国における服部氏の存在を推定する傍証になる。

そこで、諸言にも述べたような疑問がわいてくる。なぜこの郷は、海部郷ではなく、服部郷、神社も海部系の神社ではなく、服部神社なのか、という疑問である。

そこで参考になるのが、次の隱岐国の氏族構成である。

## II 隱岐国の戸籍から見えてくる海部・服部

### ①隱岐国居住者の郡・郷別の分布

隱岐国の郡・郷別の氏族・部民構成は、「隱岐国郡稻帳」(天平2年=730)

「隱岐国正税帳」(天平4年=732)、あるいは藤原宮跡・平城京跡出土の木簡、長屋王家木簡、二条大路木簡などにより、その概観が可能である。それは以下のとおりである。(加藤謙吉「隱岐の氏族・部民と畿内政権」『原始・古代の日本海文化』より)

[島前]

智夫郡 大領=海部 主帳=服部

宇良郷 壬生

由良郷 津守部 壬生部 阿曇部

大結郷 服部臣

大井郷 各田部

三田郷 石部 (3)

郷不詳 海部

海部郡 少領=海部直 主帳=日下部 少領=阿曇部

布施郷 阿曇部

海部郷 壬生部 (3) 阿曇部 勝部 三□部 物部首?

三宅郷 日下部 (2) 勝部 □部?

佐作郷 海部直 (3) 海部 (3) 凡海部 阿曇部 (6) 勝部 (2)

佐吉郷 日下部 (3) 阿曇部 (2)

[島後]

周吉郡 大領=大私直

上部郷 私部 (3) 蝮王部 孔王部 日下部

山部郷 服部 (2) 壬生部 物部 檜前部 雀部 宗我部

賀茂郷 雀部 鴨部

新野郷 私部 (3) 宗我部 日下部

奄加郷 蝮王部 □部

郷不詳 宗我部

隱地郡 大領=大伴部 少領=磯部 (3)

都麻郷 石部

武良郷	私部 勝部 大伴部 三那部
河内郷	鴨部
奈口郷	口棘部
郷不詳	大田部 日下部
郡不詳	服部 (臣) (3) 阿曇 阿曇部

(太字=因幡・伯耆・出雲にみられる部姓)

これらの氏族・部民構成について、加藤氏は以下のような考察を加えている。

- ① 隠岐の在地名をウジの名にする者が一名も存在しないこと。その一方、宗我部や物部など、中央の有力者の名を負う氏族が存在すること。
- ② 海部郡と智夫郡の大領・少領に阿曇氏と海部氏の名が見え、また両郡内にも阿曇部と海部が濃密に分布していること。
- ③ この重層する阿曇氏と海部氏の存在は、応神紀にみるような阿曇氏が海部を統率するという一方的な関係ではなく、両者による重層的な海部支配が行われていたと推定される。
- ④ 隠岐国の木簡によると、中央に運ばれた物資が 100%海産物であったこと、特に隠岐のアワビは珍重されたことなどから、隠岐国に配置された海人系の人々は、魚介類を贄として貢納する働きを期待されていた。
- ⑤ 「しかし『延喜式』によると、隠岐は旬料や節料として御贄を貢進する諸国のなかには含まれておらず、(中略) 志麻や若狭・淡路のような近国とは自ずから立地条件が異なる」とし、「隠岐の特殊性は、御贄の貢進体制そのものにあるのではなく、(中略) 御贄の貢進自体は二義的なもの……」とする。
- ⑥ その上で、『延喜式』の「陸奥国・出羽国・佐渡国・隠岐国・壱岐国・対馬国を辺要の地」とする記述を重視し、特に隠岐国は「新羅に対する辺要の地」であったことに注目する。したがって、隠岐の海部は日常的には海産物の捕獲に従事しながら、緊急時には軍事的な働きを期

待されていたのである」という結論を示す。

この㊦の結論から、さらに加藤氏は、中央勢力の山陰進出への経路と時期について、以下のような諸点を指摘する。

㊦①隠岐国の氏族・部民構成の背景には、在地名をウジの名とする者が存在しないことから、「現地勢力の自立性を排除した徹底的な中央支配が行われている」とする。

㊦②また隠岐国の氏族・部民が、丹後・丹波・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見の山陰各国に多くみられることから「山陰道諸国には、部姓者・人姓者の分布にかなり顕著な共通性が認められる。これは畿内政権の山陰支配が一定の方向性をもって、発展的・継続的にすすめられた事実を意味」と述べている。

㊦③具体的には「隠岐の部姓者を見ると、出雲と重複するものが、海部を除いても、実に一〇例に達する。畿内政権の隠岐進出は、出雲平定後に、主としてこの地から海を渡って為されたと見て間違いない」とし、「蘇我・安曇両氏の場合も、山陰の諸地域（蘇我氏―丹波国桑田・多紀・天田三郡に宗我部郷、但馬国出石・城崎郡に宗我部姓者、安曇氏―伯耆国会見郡安曇郷）を経て、伯耆や出雲などから隠岐に向かったと理解する」と述べる。

（筆者註―無論、伯耆国会見郡安曇郷を畿内勢力と結び付けることには異論もあろうが、巨勢郷や星川郷がいずれも大和国に本拠をもつ氏族の部姓者による立郷であることを考慮すれば、九州からの影響を重視するにしても、畿内政権の意志を無視するわけにはいかないだろう。

㊦④この畿内政権の隠岐国進出はいつの頃に行われたかについては、『出雲国風土記』神門郡日置郷、および意宇郡舎人郷の条に、欽明天皇の時代に日置部が派遣された記事があり、また岡田山1号墳から出土した鉄剣に「額田部臣」の文字が見え、その古墳の築造年代から、6世紀後半と推定する。

以上、長々と加藤氏の見解を紹介したが、本論にしたがって、いくつかの私案を述べてみたい。

### 《考察㉑》 隠岐国の海部と服部

- ①まず目につくのは、島前における海人系の部民が圧倒的に多い点である。  
②そこに「服部」も存在し、しかも智夫郡では大領＝海部・主帳＝服部という体制が成立している。この重なりは、因幡の海部と服部の重層を考えるうえで重要である。

### 《考察㉒》 隠岐国の部民・氏族構成からの推論

- ①「隠岐国の氏族・部民」の表に太字で示したように、隠岐国の氏族・部民の構成は、因幡・伯耆・出雲など、山陰道諸国の構成と共通する。それは、「山陰道諸国には、部姓者・人姓者の分布にかなり顕著な共通性が認められる。これは畿内政権の山陰支配が一定の方向性をもって、発展的・継続的にすすめられた事実を意味」するという加藤氏の見解は重要である。

そこで改めて、隠岐国の氏族や部民の構成をみると、海部・服部・津守部・阿曇部・勝部・鴨部・大田部など、多くが摂津国、あるいは河内国に縁のある氏族・部民であることが注目される（構成表太字表記）。

このことから、私は、海部氏と服部氏は、摂津・河内を中心とする氏族・部民集団の一員として、山陰沿岸から隠岐へと展開していったのではないかと考えている。

それを確かめるには、海部と服部という氏族について、もう少し掘り下げてみる必要がある。

## Ⅲ 海部氏とは



## ①日本海沿いの「火明命」を祖とする海部

『新撰姓氏録』に記載された「海部」関連の記事は以下の通りである。

左京神別

但馬海直 火明命之後也。

摂津国神別

凡海連 安曇宿禰同祖。綿積命六世孫小栲梨命之後也。

阿曇犬養連 海神大和多羅命三世孫穗己都久命之後也。

韓海部首 武内宿禰男平群木菟宿禰之後也。

未定雑姓

凡海連 火明命之後也。

これを海部のすべてとするわけにはいかないが、少なくとも「火明命」を祖とする海部系と、安曇氏を同祖とする海部系、あるいは渡来系の海部など、いくつかの系統があったことは確認できる。

このなかで注目したいのは、「火明命」を祖とする海部系である。この系統の海部氏は日本海沿いに広く分布している。

丹後国与謝郡に鎮座する籠神社には、火明命を祖とする「海部氏系図」が伝わり、この地が「火明命」系の海部の根拠地であったことがわかる。また『但馬国正税帳』にも、与謝郡大領として「海直忍立」の名が記録されており、資料面でも海部氏の存在が確認できる。

さらに但馬国について『新撰姓氏録』記載の「火明命」を祖とする「但馬海直」の存在は前述したが、この「但馬海直」は、但馬国城崎郡の円山川が日本海に注ぐ辺りに鎮座する海神社・西刀神社・絹巻神社などの祭祀氏族であろう。海神社の祭神は「大綿津見命、海部直の祖・建田背命」であり、西刀神社の祭神は「稲背脛命・西刀宿禰命（海部直の子）」、絹巻神社の祭神は「建田背命・海部直命・天火明命」である。

このように見てくると、因幡国服部郷の海部氏も、日本海沿いに分布する「火明命」系の海部と無縁とはいえないのではないだろうか。

というのも、服部郷の海部氏が、伊福部氏と婚姻を結ぶ関係にあったことは前述したが、伊福部氏もまた「火明命」を祖とする。『新撰姓氏録』によると、以下のとおりである。

伊福部 火明命之後也。  
伊福部宿禰 尾張連同祖。火明命之後也。  
伊福部宿禰 天火明命子天香山命之後也。  
伊福部連 伊福部宿禰同祖。

無論、因幡の伊福部氏を、火明命を祖とする尾張系氏族と即断するわけにはいかない。前述したように伊福部氏には、『因幡国伊福部臣古志』という系図があり、それによると始祖を大己貴命とし、第8代に櫛玉神饒速日命を記す。この饒速日命は物部氏の祖神である。

しかし物部氏による『旧事本紀』には、この神は「天照国照彦天火明櫛玉神饒速日尊」と記され、尾張氏系の火明命と、物部氏系の饒速日命が合体した神名となっている。これは、尾張氏と物部氏との間に、祖神を同一視するほど親密な関係が成立していたことを示している。

あらためて因幡国の部姓を名乗る郷の分布をみると、服部・若桜・丹比・刑部・日部・私都・土師・品治・鳥取・倭文・日置・勝部の12郷であるが、八東川沿いの若桜・丹比・刑部の各郷が火明命系の部姓である。

## 若桜郷

若桜郷は、八東川の上流に位置する。『新撰姓氏録』によると、若桜部は神饒速日命を祖とするもの、神魂命を祖とするもの、火明命を祖とするものなどいくつかの系統があったようである。この若桜郷には、式内社の意非神社がある。意非神社の「意非」について、『因幡誌』は「意非は大炊の仮名の略なり」とし、当社に伝わる武内宿禰の白羽矢の話を記す。

また大炊村について『因幡誌』は、「村の名大炊は人の氏なり。其起る所火明命四世の孫阿摩刀禰命の後を大炊刑部造と称す」とし、「和名抄当郡の内刑部郷あり。今分明ならずと雖、此处を大炊と云ふは大炊刑部の名残な

るにや。近隣屋堂羅村に大炊の宮あり。往古神号地名を称するの例少からず。屋堂羅も大炊の古地ならん歟」と記す。『新撰姓氏録』によると、火明命四世孫阿摩刀禰命を祖とする大炊刑部造、火明命五世孫天麴目命を祖とする大炊刑部造が記録されており、若桜郷と尾張氏系氏族との関係は濃厚である。

### 丹比郷

八東川の中流域に位置する丹比郷には、式内社の布留多知神社がある。石上神宮との関係、ひいては物部氏との関係が指摘されているが、この丹比郷が丹比氏に関わるなら、火明命を祖とする氏族である。これも『新撰姓氏録』によると、火明命を祖とする丹比宿禰・丹比連が記載されており、尾張氏系氏族である。

### 刑部郷

遺称地はないが、八東川中流域、あるいは私都川上流域などの説がある。『新撰姓氏録』によると、渡来系の刑部・刑部史・刑部造刑部とともに、火明命を祖とする刑部首の記載があり、尾張氏系氏族に加えて矛盾はない。

このように因幡国には、火明命系の部姓を有する郷が多くみられる。また若桜郷や丹比郷など、物部氏系と尾張氏系が重なり合うような傾向を示すことも重要であろう。あるいは因幡国への伊福部氏の登場にも、こうした尾張氏と物部氏が重層するような事情があったのかもしれない。

ではこうした事情には、いかなる歴史的背景があるのであろうか。

## ②部民制と継体—欽明朝

部民の発生は5世紀に遡るが、本格的に国造制、部民制、屯倉の設置などが展開するのは磐井の乱以後とされる。また先ほど述べたように、山陰道諸国における部民制の浸透時期は6世紀後半には隠岐国まで及んでいたと推定される。この時期の天皇は継体・安閑・宣化・欽明である。

継体天皇は、「武烈天皇以後の皇統の断絶の危機」を克服するために、「応神の5世孫」と称して、コシ地域から進出して王位についた天皇である。

この天皇の擁立に大きな役割を担ったのが、大伴金村大連・物部麁鹿火大連・巨勢男人大臣である。またこの時代に起きた「磐井の乱や武蔵国造の乱などの地方の反乱」を克服していくためにとられた政策が、「屯倉や部民の設置による直接的な地方支配の強化」であった。磐井の乱においても、この大伴金村・物部麁鹿火・巨勢男人が中心となって軍事的な九州の平定がおこなわれた。

一方、『日本書紀』によれば、継体天皇の最初の後は「尾張連草香の娘・目子媛」で、この目子媛の長子が安閑天皇、第二子が宣化天皇である。

このように継体朝の中心的な氏族として、物部氏と尾張氏は重要な位置を占め、互いに協力し合う関係にあったと推察される。そのことが『旧事本紀』の「天照国照彦天火明櫛玉神饒速日尊」という尾張氏の火明命と、物部氏の饒速日命が合体した神名を生み出す要因となったと考えられる。

因幡国に展開する物部氏系と尾張氏系が重なり合うような傾向も、こうした事情と無縁ではないだろう。

## 継体と摂津

ところで継体が最初に都を構えたのは楠葉宮である。『和名抄』の河内国交野郡葛葉郷、現在の交野市楠葉であった。その後、山背の筒城、同国の弟国と変遷し、継体 20 年によく大和の磐余の玉穂宮に定着する。しかし継体にとって、畿内における最初の拠点である楠葉宮周辺は忘れがたい土地であったと思われる。崩御後、継体は藍野陵に葬られる。この地は摂津国島上郡（現在の高槻市）、つまり淀川を挟んで右岸に楠葉宮、左岸に陵墓という位置関係にあたる。

現在、継体陵として伝わるのは、茨木市の茶臼山古墳であるが、この古墳は年代的に合わず、その東の位置する今城塚古墳（高槻市）が藍野陵に比定されている。いわゆる摂津国三島郡（後に三島上郡と三島下郡に分かれた）である。

この三島は、安閑天皇が竹村（たかふ）屯倉を設置した土地でもある。屯倉の設置は安閑紀に集中的に見えるが、この竹村屯倉について、「蓋し三嶋竹村屯倉には、河内県の部曲を以て田部とすることの元、是に起れり」

と記し、屯倉制、あるいは部民制の原点ともいうべき土地でもあった。

### **摂津における安曇と海部**

この三島郡のある摂津国には住吉大社が鎮座する。津守氏と安曇氏が祭祀する神社である。摂津は安曇氏の畿内における拠点であった。現在も大阪市北区野崎町に「安曇江」という地名伝承地や中央区に「安曇寺」伝承地があり、安曇氏の痕跡を伝える。

『日本書紀』応神天皇3年11月によると、「所どころの海人が命に従わないので、安曇連の租、大浜宿禰を派遣して、その騒ぎを治めた。よって安曇を海人の統率者にした」とある。九州を本拠とする安曇氏は中央に進出し、海人の統括をしたと思われるが、摂津はまさに中央における安曇の本拠地であった。

隠岐国の氏族構成に、津守、安曇がある点を踏まえれば、おそらく隠岐国に濃密に分布する海部系の人々は、摂津の津守氏や安曇氏の影響下にあったと思われる。この津守氏も火明命を祖とする尾張氏系の氏族である。

ということは、日本海沿いの火明命系海部氏の分布は、摂津が一つの基点になったと推定することが可能であろう。

### **摂津の三島鴨神社と因幡の賀露神社**

ところで摂津国三島郡には、海人と関わる三島鴨神社（祭神＝オホヤマツミ命・コトシロヌシ命）が鎮座する。鎮座地は淀川沿いの高槻市三島江である。オホヤマツミ命を祀る神社で有名なのは、伊予国一の宮の大山祇神社（瀬戸内海の大三島に鎮座）、伊豆国の三嶋大社、そして当社であるが、この3社を三三島と呼ぶ。

『伊予国風土記』逸文によると、「祭神のオホヤマツミ命は一名「和多志の大神」といい、百済より渡来し、摂津の御嶋に鎮座した。瀬戸内の大三島は摂津の三島の名である」とする。論証は省くが、この伝承の背後には、摂津の三島鴨神社の祭祀氏族のカモ氏が、淀川周辺の海の民とむすんで、瀬戸内沿岸、あるいは太平洋沿岸に進出していった歴史があったと考えられている。ちなみに前述した安曇江は、淀川を經由すれば指呼の距離である。

一方、因幡国の高草郡に賀露神社が鎮座する。賀露港を一望する小丘に建つ当社は、祭神はオホヤマツミ命・サルタヒコ命・吉備真備ほかを祀る。式内社ではないが、『三代実録』の貞観3年(861)以後たびたび神階授与の記事がみえる古社である。社伝によれば、祭神のオホヤマツミ命は伊予国から勧請したとする。千代川右岸の河口近くに三島神社(現在は荒木三島神社)も鎮座し、かつては両社の間で渡御の祭りがおこなわれていた。『賀露神社縁起』には、三島神社は「九州宗像神社の三祭神を勧請しやもので、天平年間(729~749)に賀露神社から移祀されたと伝え」(『因伯のみやしる』)られる。

しかし私は密かに、摂津の三島鴨神社の影響を無視できないと考えている。それについては「Ⅲ服部氏とは」のなかで、摂津国の服部の分析とからめて論じてみたい。

### Ⅲ 服部氏とは？

#### ①『新撰姓氏録』に見る二系統の服部

『新撰姓氏録』に記載された「服部」は以下のとおりである。

大和国神別

服部連 天御中主命十一世孫天御杵命之後也

摂津国神別

服部連 燠之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也。允恭天皇御世。任織部司。掎領諸国織部。因号服部連

河内国神別

服連 燠之速日命之後也

河内国諸蕃

吳服造 出自百濟国人阿漏史也

これによれば、天御中主命十一世孫天御杵命を祖とする大和国の服部連と、燖之速日命十二世孫麻羅宿禰を祖とする摂津国の服部連、さらに百濟人を祖とする渡来系の吳服造の存在が確認できる。

## ②大和の服部連

大和国には、山辺郡服部郷と大和国城下郡・服部神社が存在する。いずれも大和国における服部氏の本拠地と考えられる。

まず服部神社であるが、現在は村屋坐弥富都比売神社（みふつひめ＝三穗津姫命、奈良県磯城郡田原本町大字藏堂）の摂社として、境内の左奥（本殿城西側）に鎮座する。祭神の天御鉾命は記紀などには見えないが、神宮雑例集（13世紀初頭頃、上古から鎌倉初頭までの伊勢神宮に関する雑記録集）には、「天照大神が高天原に坐せし時、神部（かかむはとりべ）等の遠祖・天御鉾命を以て司とし、八千々姫を織女と為して織物を奉る」とある。

この城下郡に隣接する高市郡には、忌部氏の本拠地があり、天太玉命神社（奈良県橿原市忌部町）が鎮座する。また同郡は蘇我氏の本拠地でもあり、宗我坐宗我都比古神社も鎮座する。さらに葛下郡には葛木倭文坐天羽雷命神社が鎮座し、倭文氏の本拠地である。

これらを勘案すると、蘇我氏の影響下で、忌部氏が服部や倭文などの機織り氏族を統率する体制がみえてくるように思う。

しかし一方で、服部郷は山辺郡に属する。物部の本拠地であり、石上神宮が鎮座する。

隠岐国に宗我部と物部があることと、この大和において近接する忌部・倭文・服部の分布状況は関係するのであろうか。

## ③摂津の服部連

摂津国の島上郡には服部郷（現高槻市）があり、服部連の本拠地であっ

たと思われる。その服部郷には式内社・服部神社が鎮座する。祭神は『新撰姓氏録』の記述どおり、「燬之速日命」である。

この服部郷には「塚脇古墳群」と呼ばれる古墳時代後期の群集墳があり、紡錘車など機織りに関係する遺物が出土している。このことから、服部連一族の墓陵の可能性が強いとされている。また、芥川をはさんだ対岸に式内社「阿久刀神社」があり、そこにも顕宗天皇の時代に蚕織絶絹の見本を献上したという伝承がある。このように、服部郷周辺は養蚕・機織りに関係する氏族が集中していたと思われる。

#### ④出雲国大原郡のヒノハヤヒ命

ところで、この「燬之速日命（以下、ヒノハヤヒ命）」という神は、出雲国大原郡にも祀られている。『出雲国風土記』大原郡斐伊郷の条に以下のような記事が載る。

斐伊郷。郡家に属けり。樋速日子命、此の処に坐せり。故、樋と云ふ

『古事記』によれば、イザナミ命が火の神・カグツチ命を産んだ際、火傷して死ぬ。怒ったイザナギ命はカグツチ命を斬る。その刀に着いた血が岩に飛び散って化成した神が、ミカハヤヒ命、ヒノハヤヒ命、タケミカヅチ命の三神である。

このヒノハヤヒ命を祀る斐伊神社は、現在も雲南市木次町に鎮座するが、おそらくその祭祀氏族は、同じく『出雲国風土記』大原郡の「新造の院一所 斐伊の郷の中にあり。郡家の正南一里なり。巖堂を建立つ。（僧五軀あり）大領勝部臣虫麻呂が造るところなり」という記事により、大原郡の大領・勝部臣氏であろう。

勝部については、『播磨国風土記』揖保郡大田里の条に、以下の記事がある。

大田の里（土は 中の 上なり）。大田と稱ふ所以は、昔、呉の勝、韓國



より度(わた)り来て、始め、紀伊の國名草の郡の大田の村に至りき。其の後、分れ来て、撰津の國三嶋の賀美の郡の大田の村に移り到りき。其が又、揖保の郡の大田の村に遷り来けり。是は、本の紀伊の國の大田を以ちて名と為すなり。

これによれば、勝部氏は呉からの渡来人で、紀伊の大田、撰津の大田、播磨の大田と変遷したことがうかがえる。なかでも「撰津の大田」が変遷の地として登場するのは興味深い。

この「撰津の國三嶋の賀美の郡の大田の村」は、『和名抄』にいう「撰津国下島郡安威郷(現在の茨木市太田)」にあったと思われる。この安威郷には古墳時代の前期から後期にかけての安威古墳群があり、中臣藍連氏により形成されたとされる。また中臣鎌足が葬られた安威山の伝承地でもあり、中臣氏の重要な根拠地の一つであった(『大阪府の地名』)。

さらに茨木市太田には、前述した伝継体陵の茶臼山古墳があり、その古墳の脇に式内社・太田神社が鎮座する。現在の祭神はスサノヲ命、アマテラス大神、トヨウケ大神だが、この地は中臣大田連が勢力をはった地域で、古くは中臣氏の祖神・アメノコヤネ命を祀っていたとされる。「松尾社家系図」には、アメノコヤネ命 15 世として「太田彦命」がみえる。

しかしいくつかの異説がある。『神社叢録』では、サルタヒコ大神とする。また松下焯氏は、『日本の神々3』の「太田神社」の項で、「太田村を考えるうえで無視できないのは、『播磨国風土記』の揖保郡大田里」の記述だとし、中臣氏のこの地への進出以前に、渡来系の勝部氏が先住していたのではと述べている。

この松下氏の指摘は重要である。

なぜ重要かといえば、①この太田神社とヒノハヤヒ命を祀る服部神社は直線距離にして数キロしか離れていない、②出雲国大原郡には太田神社の祭祀に関わる勝部氏がヒノハヤヒ命を祀る斐伊神社が鎮座するからである。

このヒノハヤヒ命をめぐる服部連と勝部氏の関係は、いかなる歴史を秘めているのであろうか。

## ⑥因幡の勝部

実は勝部氏は因幡にも来ている。鳥取市青谷町の勝部川流域がかつての気多郡勝部郷で、因幡における勝部の本拠地であった。

この勝部郷に神前神社という神社がある。祭神はサルタヒコ。この神社の社伝によると、「当社は、初め大和の葛城に鎮座したが、雄略天皇のころ摂津国神前の里に移り、慶雲4年(707)に鳴滝村美古峯、至徳2年(1385)に鳴滝村亀山(現宮坂)に遷座した」とある。社伝というものは、あまり信憑性が確かではないが、この社伝が一定の事実を踏まえていると思えるのは、前述したように摂津にはサルタヒコを祀る太田神社があり、その祭祀氏族として勝部氏の存在が確認できるからである。

因幡の勝部郷には、もう一つの式内社・幡井神社があり、まさに機織り集団とも縁の深い地域である。またこの勝部郷は伯耆国との国境に位置し、近隣には同じく機織り集団の倭文部が祭祀する伯耆一の宮・倭文神社も鎮座している。

一方、出雲国大原郡の大領は勝部臣であるが、この郡内には、幡屋神社が鎮座し、その周辺には、幡屋・高麻山(=植麻した山)・古機・御機谷・神機谷・広機・長機など、機織り関連の地名が密集する。称徳天皇の神護慶雲三年に天下諸神に「神服」をご下賜されたとき、この幡屋神社も含まれていた。

さらに、大原郡の郡家は、初め幡屋神社近辺(現在の大東町幡屋)周辺にあったが、後に斐伊郷(現在の木次町)に移る。この郷の新造院について、風土記が「大領勝部臣虫麻呂が造りし所なり」と記すように、斐伊郷は勝部氏の根拠地であり、その斐伊郷は「樋速日子命、此の処に坐せり。故、樋と云ふ」と記す。

このように出雲国大原郡の勝部氏がヒノハヤヒ命を祭祀し、その周辺に機織り関係の地名が集中することは、因幡国気多郡の勝部郷内の神前神社の「摂津からの移動伝承」、幡井神社など機織り集団の存在などと深く関わっている。そして、その原点は、摂津国でヒノハヤヒ命を祭祀する服部連、

あるいは同じく三島郡に分布していた渡来系の勝部氏の存在に行きつくのである。

このヒノハヤヒ命をめぐる出雲と因幡と摂津を結ぶ関係について、大和岩雄氏は『日本古代試論』の中で詳細に論じている。多岐にわたるので紹介は省くが、大和氏の結論は、これらの関係の背後に中臣氏の影響があったとする。前述したように摂津の三島郡は中臣氏の根拠地である。

また大和氏は、ヒノハヤヒ命は中臣氏の祖神・タケミカヅチ命と兄弟神、あるいは父神としての神性をもち、ヒノハヤヒ命抜きにはタケミカヅチ命は語れないとする。タケミカヅチ命はまさに出雲の国譲りを迫った神である。その神の兄弟神を祀る大原郡は、出雲国の諸郡の中でも特異な郡である。郡領は勝部臣・日置部臣・額田部臣であるが、いずれも摂津に根拠地をもっており、出雲における国譲りを迫る側、つまり中臣氏の影響下にあったと思われる。

これについては本論のⅠの③で、倭文部の祭神・建葉槌命に関して「タケミカヅチ・フツヌシによる国土平定に際し、倭文神建葉槌命は、両神に協力して賊を討伐した神でもあったらしい」と述べたこととも深くつながってくる。

おそらくは、6世紀中ごろ、物部氏・尾張氏の山陰道進出にともない、因幡・伯耆・出雲に展開した勝部氏らは、物部氏没落後は蘇我氏の影響下に入り、さらに蘇我氏没落後は中臣氏の影響を受けながら、山陰道諸国に展開していったのであろう。

この勝部氏の、摂津→因幡→伯耆→出雲→隠岐というルートは、すなわち、隠岐国に多い摂津と関わる氏族の山陰進出コースを象徴しているのではないかと思われる。

なかでも、海部と服部という組み合わせは、隠岐国智夫郡の「大領＝海部・主帳＝服部」にみられるように、地域の統治システムとして機能していることは重要である。

## IV 結語——麻績王（おみのおおきみ）伝承——海部と服部をつなぐもの

因幡国法美郡の服部と海部の重なりから始めた考察は、隱岐国の知夫郡における服部と海部の統治体制の分析を経て、両者の結びつきが偶然のものではなく、大和政権の意識的な配置であった可能性が高まった。さらに隱岐国の氏族・部民の構成から、摂津との深い関係が見えてきた。特に勝部氏の移動経路に象徴されるように、摂津→因幡→伯耆→出雲→隱岐という日本海ルートが想定されると思われる。

しかし、服部と海部の関係はこれだけではない。大和から伊勢、紀伊、阿波、さらに三河、遠江、東国へと繋がる太平洋ルートについても考察するのが当然であるが、次回に回したい。

その予告編というのではないが、最後に、海部と服部をつなぐものとして、麻績王（おみのおおきみ）伝承について記しておきたい。

麻績王とは、伊勢の機織り氏族である麻績部と関わる人物であるが、『日本書紀』天武4年4月条に、麻績王を因幡に流すという記事がみえる。そして、『万葉集』に「打つ麻を 麻績王 白水郎なれや 伊良虞の島の玉藻刈ります」という歌が残されている。機織り氏族の象徴的人物が、「白水郎（あま）なれや」と歌われているのである。

また王とともに流された子どもたちの流刑地は、伊豆嶋、血鹿嶋（五島列島）、伊勢の伊良虞の島、三重県鳥羽市の神島と広範囲にわたり、いずれも海と関わる地である。さらに『常陸国風土記』行方郡条は、同郡板来（いたく）村（茨城県行方郡潮来町）とも記す。

折口信夫は、この伝承を海の民による貴種流離譚とする魅力的な見解を示すが、いずれにしても、この伝承の背後には、海の民と機織り集団との密接な関係が隠されていることは言えるであろう。

この王が因幡国に流されてきたという。因幡国法美郡の岡益石堂は、麻績王の墓とする説がある。またその近くには太田神社が鎮座し、サルタヒ

コを祀るのも興味深い。

以上、愚考を重ねたが、福部町における海部と服部の重なりは、海の民と機織りの民の深い因縁を語り、その系譜は全国各地に広がっている。

## 会員募集

当会では、会員を広く募集しています。古代史や伯耆の文化などにご興味のある方は、お気軽にご参加ください。会則や会費はありません。今年から3年間に伯耆の史跡めぐりを行っています。計画は以下のとおりです。参加希望の方は電話 0859-22-2304 黒田まで

### 会見郡を歩くシリーズ案——3カ年計画

#### ①弥生を歩く

目久美—池の内—長砂—宗像—奥谷—奈喜良—諸木など弥生人の足跡を歩く

#### ②古墳を歩く

#### ③安曇郷を歩く

#### ④カモを歩く

星川郷の賀茂神社・鴨部郷と大和の賀茂神社・鴨部古墳群と白山神社・出雲国意宇郡「賀茂神戸」・安来の賀茂神社など

#### ⑤星川郷から鴨部郷へ

浅井 11 号墳＝この地域最古の前方後円墳の可能性・金田窯跡・篠生の楽々福神社—金華山など

#### ⑥日下を歩く—会見郡と汗入郡の境界を探る

#### ⑦出雲国と伯耆国の境界線を歩く

陰田遺跡から新山要害山へ抜ける（口陰田と日御碕神社・奥陰田と犬田神社・陰田遺跡・新山周辺など、）など

#### ⑧大山町を歩く

孝霊山山麓周辺—孝霊山—玉簾山観音寺—宮内神社—宮内古墳群など

⑨淀江を歩く

⑩日野川を歩く

⑪日野郡を歩く

※その他、いろいろなコースが考えていきます。



### 第1回現地めぐり 安曇族を歩く

## 伯耆の古代を考える 第1号

◆発行 2016年11月15日◆

◆発行者 伯耆の古代を考える会◆

◆住所 〒683-0066 鳥取県米子市日野町187 黒田方◆

◆電話 0859-22-2304◆